

博士論文

在日朝鮮人詩人金時鐘の故郷観

—2000年以降の作品を中心に—

(Interpreting “Home” in the Works of Zainichi Poet
Kim Si-jong: A Focus on His Works Since 2000)

2023年9月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

岡崎 享子

立命館大学審査博士論文

在日朝鮮人詩人金時鐘の故郷観

—2000年以降の作品を中心に—

(Interpreting “Home” in the Works of Zainichi Poet
Kim Si-jong: A Focus on His Works Since 2000)

2023年9月

September 2023

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program: Major in Humanities
Graduate School of Letters
Ritsumeikan University

岡崎 享子

OKAZAKI Ryoko

研究指導教員：佐々 充昭教授

Supervisor : Professor SASSA Mitsuaki

目次

序章.....	1
(1) 先行研究の整理.....	1
(2) 問題提起と研究目的.....	6
(3) 本論文の構成.....	7
第 I 部 金時鐘のライフヒストリーと言語観.....	8
第 1 章 言語観の変遷.....	8
第 1 節 『ヂンダレ』における論争と言語観の芽生え—1950 年代～1960 年代.....	8
第 2 節 「在日朝鮮人語としての日本語」の成立—1970 年代～1990 年代.....	10
第 3 節 「日本語への報復」と新たな日本語の創造—2000 年以降.....	12
第 2 章 2000 年以降における朝鮮語詩集の翻訳.....	14
第 1 節 尹東柱『空と風と星と詩』の翻訳.....	14
(1) 小野十三郎の『詩論』からの影響.....	14
(2) 金時鐘の尹東柱に対する評価.....	17
第 2 節 金素雲『朝鮮詩集』の再翻訳.....	19
(1) 再翻訳に至った背景.....	19
(2) 日本語を解体するための再翻訳.....	23
第 3 章 言語観の根底にある「生理の言語」.....	25
第 1 節 「生理の言語」の定義.....	25
第 2 節 朝鮮語のカタカナ表記.....	27
(1) 『猪飼野詩集』(1978).....	28
(2) 『空と風と星と詩』(2004).....	29
(3) 『失くした季節』(2010).....	30
第 3 節 「献詩」(2022)における「生理の言語」.....	32
第 II 部 『失くした季節』(2010) の作品分析.....	35
第 4 章 2000 年の体験証言以前における済州 4・3 の記憶.....	35
第 1 節 済州 4・3 体験についての証言.....	36
(1) 金時鐘の証言.....	36

(2) 金石範との対談.....	41
(3) 金石範『火山島』に描かれる金時鐘の体験.....	43
第2節 『地平線』(1955)と濟州4・3.....	47
(1) 『地平線』の制作背景.....	47
(2) 「處分法」一虐殺現場を描く.....	48
(3) 「巨濟島」一腐乱した死者を描く.....	49
第3節 『光州詩片』(1983)と濟州4・3.....	52
(1) 『光州詩片』の制作背景.....	52
(2) 「褪せる時のなか」一出来事への不在.....	53
(3) 「遠雷」一出来事の連続性.....	54
(4) 「冥福を祈るな」一死者を描く.....	57
第5章 濟州4・3体験証言後の初詩集『失くした季節』.....	60
第1節 『失くした季節』の構成と季節観.....	60
(1) 『失くした季節』の制作背景.....	60
(2) 「夏」章一解放.....	62
(3) 「秋」章一沈黙.....	65
(4) 「冬」章一再生.....	69
(5) 「春」章一殺戮.....	71
第2節 尹東柱作品との比較からみる『失くした季節』.....	75
(1) 「序詩」からみる金時鐘の翻訳方法.....	75
(2) 共通する詩的イメージと自己の相対化.....	79
第3節 『失くした季節』における故郷探し.....	88
(1) 作品からみる故郷観.....	88
(2) 対馬・濟州慰霊祭と故郷の発見.....	92
第Ⅲ部 『背中の地図』(2018)の作品分析.....	96
第6章 『背中の地図』(2018)からみる金時鐘の体験と東日本大震災.....	96
第1節 『背中の地図』の制作背景と意図.....	96
第2節 3・11と重なり合う濟州4・3描写.....	99
(1) 「また そして 春」一濟州4・3の再体験.....	99
(2) 「吊い遙か」一死者を描く.....	101
第3節 海から想起される帰国事業の記憶.....	103
(1) 帰国事業と金時鐘.....	103
(2) 作品に描かれる<境界>.....	104

第7章 『背中の地図』における原発批判と故郷回帰.....	110
第1節 金時鐘の原発への応答.....	110
(1) 詩語からみる原発表象.....	111
(2) 利便性を追求する社会への批判.....	114
(3) 原発の忘却に対する警鐘.....	116
(4) 原発と金時鐘との間に存在する<境界>.....	120
第2節 作品からみる故郷の描かれた方.....	126
(1) 『背中の地図』における故郷表象.....	126
(2) 故郷喪失の再体験.....	128
(3) 「私」の向かう先—被災地への旅の後に.....	131
終章.....	137
参考文献.....	141

序章

(1) 先行研究の整理

在日朝鮮人¹一世の金時鐘²は、日本語で文学活動を行う詩人である。彼は、1929年に植民地朝鮮の釜山で生まれ、済州島で9歳から20歳まで過ごしながらか日本の教育を受けた皇国少年であった。金時鐘は日本語や日本の文学に馴れ親しみ、物心ついた時には、植えつけられた日本語は彼の一部となり、日本語は彼の意識を司る言語となる。1945年8月15日の植民地解放後、彼は初めて自分が朝鮮人であるという現実と向き合い、日本人になろうとしていた自分から距離を置き始める。金時鐘は次第に朝鮮人としてのアイデンティティに目覚め、朝鮮語を取り戻そうと必死に朝鮮語の習得に励んだ³。しかし、現在に至るまで朝鮮語は意識的にしか使用することのできない、奪われた言語のままである。

朝鮮の植民地解放直後、朝鮮半島のあり方を巡って対立が起こっていく過程の中で、済州島では、1948年4月3日に済州4・3⁴が勃発する。当時、南朝鮮労働党（以下、南労党）の連絡係であった金時鐘は、「郵便局事件」を契機に追われる身となったが、父母の助けで1949年6月に済州島から脱出し、親戚を頼りに大阪の朝鮮人集住地域である猪飼野（現在の大阪市生野区、東成区）で生活を始めることとなる。それから49年後の1998年までの間、済州島には戻ることはできなかつた。金時鐘は、1950年から在日朝鮮統一民主戦線⁵（以下、民戦）の下で本格的に在日朝鮮人の組織活動を始める。それと同時に、1953年から1959年まで発刊された文学雑誌『ヂンダレ』の編集に関わりながら、数多くの詩や論評を発表した。

¹ 本論文では、歴史的な地域名称として「朝鮮」、国籍にかかわらない民族名称として「朝鮮人」、朝鮮半島で使用されている言語を、さらに朝鮮半島にルーツを持ちながらも日本で生活している者を「在日朝鮮人」と称することにする。また、1948年に成立した大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国を、それぞれ「韓国」「北朝鮮」と略称する。

² 今までに発刊された金時鐘の創作詩集として、第1詩集『地平線』（1955）、第2詩集『日本風土記』（1957）、第3詩集『新潟』（1970）、第4詩集『猪飼野詩集』（1978）、第5詩集『光州詩片』（1983）、第6詩集『化石の夏』（1998）、第7詩集『失くした季節』（2010）、第8詩集『背中の地図』（2018）、『日本風土記II』（2022）がある。その他、主な随筆集として、毎日出版文化賞を受賞した『「在日」のはざままで』（1986）、『わが生と詩』（2004）、大佛次郎賞を受賞した『朝鮮と日本に生きる』（2015）、『「在日」を生きる』（2018）等がある。そして2018年からは、藤原書店より金時鐘全集として『金時鐘コレクション』（全12巻）が刊行されている。

³ 金時鐘『朝鮮と日本に生きる』岩波書店、84～86頁。

⁴ 済州4・3事件とは、1947年3月1日を起点とし、1948年4月3日に発生した騒擾事態及び1954年9月21日まで済州島で発生した武力衝突と鎮圧過程において住民が犠牲になった事件であり、犠牲者の数は2万5千人から3万人と推測されている。済州4・3に関しては、以下を参照。『済州4・3事件真相調査報告書』済州4・3真相究明及び名誉回復委員会、2003年済州四・三平和財団編『済州四・三事件の理解』済州四・三平和財団、2014年。文京洙『済州島四・三事件』岩波書店、2018年。

⁵ 民戦は、1945年から1949年に結成された在日朝鮮人聯盟の後継組織として1951年に結成された。1955年には、在日本朝鮮人総联合会として組織再編された。金時鐘は、『朝鮮と日本に生きる』において、民戦を「民戦（在日朝鮮民主主義統一戦線）」と記述している（金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる』、259頁）。

しかし、1955年に在日本朝鮮人総聯合会（以下、総聯）に改編されたことにより、文学活動においても朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）のプロパガンダを意識せざるを得なくなり、朝鮮語で文学活動強を強いられる状況となる。

そのような状況にもかかわらず、金時鐘は、1955年に第1詩集『地平線⁶』、1957年に第2詩集『日本風土記⁷』を発表し、組織から批判を受けながらも、むしろ日本語で書くことの意義を唱え続けた。その後、1959年に『ヂンダレ』は廃刊となり、1959年から約10年間にわたり文学活動を行えない状況となった。しかし、1970年に第3詩集『新潟』を発表したことを契機に、金時鐘は文学活動を再開した。その傍らで、1973年から1988年まで兵庫県立湊川高等学校で教員となり朝鮮語を教える等、在日朝鮮人の立場から様々な講演や言論活動を行ってきた。この頃の在日朝鮮人社会では、1970年頃から「第3の道」論が登場していた。「第3の道」とは、祖国志向でも、日本志向でもない、在日朝鮮人として日本に定住するという考え方であり、主に在日朝鮮人二世によって唱えられたものである⁸。そのような時代状況の中で、金時鐘は、従来から提唱し続けていた日本で在日朝鮮人として主体的に生きること、すなわち「在日を生きる」という現状に即した在日朝鮮人の在り方を発信し、そのことを文学作品で表現してきた。

このように金時鐘は、1950年代中頃から現在に至るまで活発に文学活動を行ってきた。その過程において、金時鐘は自らのエッセー集である『「在日」のはざま⁹』（1986）で毎日出版文化賞受賞、第7詩集『失くした季節¹⁰』（2010）で高見順賞受賞、回顧録『朝鮮と日本に生きる』（2015）で大佛次郎賞を受賞した。

（1970年代後半から1990年代における金時鐘研究）

金時鐘に関する研究は、1970年代後半から磯貝治良や梁石日によって始められた。その中でも磯貝は、最も早い段階から在日朝鮮人文学についての論考を発表してきた。磯貝は、『始原の光¹¹』（1979）において在日朝鮮人作家を日本語作家と捉えながら、「在日朝鮮人作家にとって日本語は抑圧者のことば」とであると指摘し¹²、金史良、金達寿、金石範、呉林俊、金時鐘、金泰生の作品分析を行なった。金時鐘に関する研究は、磯貝による論考「復元と対峙と-金時鐘ノート¹³」から本格的に始まったといえる。

⁶ 金時鐘『地平線』ヂンダレ発行所、1955年。

⁷ 金時鐘『日本風土記』國文社、1957年。

⁸ 「第3の道」に関しては、水野直樹、文京洙著『在日朝鮮人：歴史と現在』岩波書店、2015年、198~201頁を参照。

⁹ 金時鐘『「在日」のはざま』立風書房、1986年。その後、2001年に平凡社からも発刊されている。本項では、この2001年版を底本とする。

¹⁰ 金時鐘『失くした季節：金時鐘四時詩集』藤原書店、2010年。

¹¹ 磯貝治良『始原の光：在日朝鮮人文学論』創樹社、1979年。

¹² 同上、205頁。

¹³ 磯貝治良、前掲『始原の光：在日朝鮮人文学論』151頁~164頁。

また、梁石日は「金時鐘論¹⁴」(1988)を発表し、金時鐘と共に文学活動を行ってきた立場から金時鐘の言語観について論じた。梁石日は、金時鐘が日本語で書くということに対し、「(金時鐘の)詩は破壊された言葉の再生産であり、われわれの頭を押さえつけ、ねじ伏せようとした日本語を日本語によって破壊しようとする自我の喚起力である¹⁵」と言及し、金時鐘が文学活動を通して植民地時代に身につけた日本語の解体を実践していることについていち早く指摘した。

さらに、近年には、1970年代において松原新一と倉橋健一による金時鐘に関する論考が収録された『70年代の金時鐘論¹⁶』が発刊された。ここには主に、金時鐘が使用する日本語に焦点を当てた論考が収録されており、在日朝鮮人一世の金時鐘が植民地解放後も日本語と格闘しながら書き続けるしかないという言語とアイデンティティの問題について論じられている。

このように、1970年代後半から80年代にかけ、在日朝鮮人文学が論じられるようになるのと並行し、金時鐘についての研究も少しずつ蓄積されていった。この時期の金時鐘論は、1975年に発表されたエッセー集『さらされるものとさらすものと¹⁷』を土台にしている。そこには、金時鐘の植民地期における言語体験や解放後における日本語との格闘、そして湊川高校で朝鮮語教師として勤務した際の心境などについて語られている。このように、1970年代から80年代における金時鐘研究は、在日朝鮮人一世として生きる文学者として、彼のライフヒストリーを土台としながら、日本語使用の問題に焦点を当てながら論じられることが主であった。

1990年代頃から在日朝鮮人文学研究は、主に欧米のポストコロニアル研究やディアスポラ論の影響を受けながら発展していった¹⁸。浮葉正親によると、韓国では、1990年代から2000年代にかけて在日朝鮮人文学を民族文学として捉える研究が盛んになった。その一方で、日本では、2000年代から在日朝鮮人文学をディアスポラ文学として捉え直す新しい動きが見られたことを浮葉は指摘している¹⁹。この時期から在日朝鮮人文学の研究は、言語の問題に代表されるポストコロニアルの観点に加え、在日朝鮮人の「自分は何者であるのか」というアイデンティティの葛藤や、帰属の問題等に焦点が当てられるようになったのである。

それと並行して、金時鐘の「在日を生きる²⁰」という考え方が、ディアスポラ論の観点か

¹⁴ 梁石日「金時鐘論」『アジア的身体』青峰社、1990年、126～218頁。

¹⁵ 梁石日、前掲「金時鐘論」『アジア的身体』204頁。

¹⁶ 松原新一、倉橋健一『70年代の金時鐘論：日本語を生きる金時鐘とわれらの日々』砂子屋書房、2010年。

¹⁷ 金時鐘『さらされるものとさらすものと』解放教育選書8、明治図書出版、1975年

¹⁸ 宋恵媛、上掲「在日コリアンの文学」『在日コリアン辞典』178～189頁。

¹⁹ 浮葉正親「在日朝鮮人文学の研究動向とディアスポラ概念」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第20巻、2013年、1～18頁。

²⁰ 金時鐘は、「在日を生きる」とは分断されている朝鮮半島の北と南にもどちらにも同距離の立場にいることを意味する(金時鐘『わが生と詩』岩波書店、2004年、211頁)と述べながら、「日本で生きていながら、どうすれば本国の運命、祖国の運命をあわせもつことができるか。これが日本に着て以来の僕の命題です」(同上、213頁)と言及している。

ら注目され始めた。そうした中で、1990年代後半には、細見和之が金時鐘の使用言語に注目し、「ディアスポラを生きる詩人」として金時鐘を捉え、ドイツのツェランとの比較を通じて言語とアイデンティティの考察を深めた²¹。その他にも、川村湊は「故郷」という観点から金時鐘が日本語で書くことに関する問題について考察した²²。

(2000年以降における金時鐘研究)

2000年以降、在日朝鮮人文学の研究はより多様化し、作家別、テーマ別、特定の雑誌の研究が盛んになった。例えば、宋恵媛は、在日朝鮮人文学が日本語で書かれるものだけではなく、朝鮮語で書かれた文学も在日朝鮮人文学であることを主張した。その上で、今まで見過ごされてきた在日朝鮮人女性の書き手とその作品を見つけ出し、従来の日本語中心主義と男性中心主義に偏っていた在日朝鮮人文学に新しい視点を提示した²³。さらに、近年 David S. Roh は、在日朝鮮人文学が日本とコリアという二つの空間だけを研究領域とする傾向があることに問題意識を持ち、アメリカ、日本、コリアの三角関係からそれらの文学作品を読み解く必要性を唱えている。そのことを David S. Roh は、「マイナー・トランスパシフィック」と名付け、マイノリティ文学同士の交渉や対話がいかに実践されているのかについて明らかにする理論的枠組みを構築した²⁴。

このような在日朝鮮人文学をとりまく状況において、2000年以降、金時鐘研究は転機を迎えることになった。金時鐘は1998年に済州島を訪問し²⁵、2000年になって初めて「済州島四・三事件52周年記念講演会」の場で、自らの済州4・3の体験を公に証言した。このことにより、金時鐘の作品を済州4・3との観点から論じることが可能になったのである。この証言を契機に、金時鐘は済州4・3の体験を作品に書き始め、近年では自身の回想録である『朝鮮と日本に生きる』(2015)において済州4・3体験を書いている。これらの証言や回顧録は、金時鐘の作品を「済州4・3文学²⁶」という観点から再解釈することを可能にさせた。

これらの動向を踏まえ、2000年以降の金時鐘研究で大きな役割を果たした成果として、

²¹ 細見和之『アイデンティティ／他者性』岩波書店、1999年。

²² 川村湊『生まれたらそこがふるさと：在日朝鮮人文学論』平凡社、1999年、254～261頁。

²³ 宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために：声なき声のポリフォニー』岩波書店、2014年。

²⁴ David S. Roh『Minor Transpacific: Triangulating American, Japanese, and Korean Fictions』Redwood City: Stanford Univ Pr, 2022.

²⁵ 金時鐘、前掲「年譜」『朝鮮と日本に生きる—済州島から猪飼野へ』292頁。

²⁶ 文京洙は、済州4・3の真相究明と名誉回復の問題を課題に取り組みされてきた「済州4・3運動」が繰り返される以前に、文学作品において済州4・3をめぐる沈黙の壁を突き破ろうとする試みがあったことを指摘している。その代表作として玄基榮「順伊おばさん」(1978年)があげられる(文京洙『済州島四・三事件：「島のかに」の死と再生の物語』岩波書店、2018年、176～179頁)。また、キム・ドンヒョンは、済州4・3文学の特徴について、地域の身体に植え付けられた植民地主義と朝鮮半島の分断体制という暴力の様相を再現することであると指摘している。(김동현「가라앉은 기억들—반동주의와 개발이라는 쌍생아」고성만역은『비판적 4・3 연구』제주: 한그루, 2023, p. 89)。

細見和之²⁷、呉世宗²⁸、浅見洋子²⁹の研究があげられる。

細見和之は、2010年に金時鐘の作品に表れる済州4・3の記憶について分析した金時鐘論を発表した。これに関して、細見は金時鐘の2000年以降の作品の大きなテーマが、済州4・3など政治的な出来事の証言であるとし、金時鐘の代表的な詩集である第3詩集『新潟』(1970)においても済州4・3の記憶が顕著に現れていると言及している³⁰。

一方、呉世宗は、金時鐘の文学活動の精神として重要な「抒情」の問題に焦点を当てながら、金時鐘作品について論じている。そして、2000年以降の済州4・3の証言と『新潟』で描かれた済州4・3の言葉が一致していることを指摘し、作品自体が記憶の証言であると言及している³¹。

浅見洋子は、金時鐘の詩集『地平線』、『日本風土記』、『新潟』に細かい注釈をつけながら精緻な作品分析を行なった。その際、これらの詩集を金時鐘のライフヒストリーと関連付けながら、それぞれの詩集が持つテーマの移り変わりとその関係性について読み解いた。それだけでなく、今まで発掘されていなかった金時鐘の作品や一次資料を見つけ出したという点においても大きな成果をあげている。その中で浅見も、金時鐘のライフヒストリーにおいて済州4・3という原体験が作品に通ずるテーマに設定されていることを指摘し、済州4・3虐殺の記憶が『地平線』に既に現れており³²、『新潟』には済州4・3の記憶で満たされていると言及している³³。

その他にも近年では、金時鐘と韓国の詩人である金芝河(1941～2022)との関連性について論じた権保慶の研究³⁴や、金時鐘の初期における文学活動や1970年代の湊川高校の教員時代について批判的に論じた玄善允の研究³⁵など、多様な研究成果が蓄積されている。

以上に述べたように、2000年以降の研究では、済州4・3が金時鐘の文学活動において重要なテーマであることを指摘した上で、済州4・3を含んだ金時鐘のライフヒストリーに照らし合わせながら作品を読み解いていく方法がとられている。具体的にそれらの特徴は大きく2つにまとめることができる。第1に、金時鐘が故郷喪失を経験した在日朝鮮人一世であることから、ディアスポラの観点から論じられているということである。第2に、金時鐘が植民地期から植民地解放を経て済州4・3を経験したということから、ポストコロニア

²⁷ 細見和之『ディアスポラを生きる詩人金時鐘』岩波書店、2011年。

²⁸ 呉世宗『リズムと抒情の詩学：金時鐘『長篇詩集新潟』の詩的言語を中心に』藤原書店、2010年。

²⁹ 浅見洋子、2012年度大阪府立大学博士学位論文『金時鐘の言葉と思想：注釈的読解の試み』大阪府立大学、2013年。

³⁰ 細見和之、前掲『ディアスポラを生きる金時鐘』221～222頁。

³¹ 呉世宗、前掲『リズムと抒情の詩：金時鐘『長篇詩集新潟』の詩的言語を中心に』331～332頁。

³² 浅見洋子、上掲『金時鐘の言葉と思想：注釈的読解の試み』85頁。

³³ 同上、266～268頁。

³⁴ 権保慶「金時鐘における民衆と諷刺——一九七年代の金芝河との連をめぐって——」『朝鮮学報』第240号、朝鮮学会、2016年、41～70頁。

³⁵ 玄善允『金時鐘は「在日」をどう語ったか』同時代社、2021年。

リズムの観点から論じられているということである。これらの先行研究を踏まえながら、本論文においても金時鐘をディアスポラ詩人として捉え、金時鐘のポストコロニアルな体験である済州4・3の記憶が彼の作品にどのように表れているのかについて考察する。

(2)問題提起と研究目的

上に述べたように、2000年以降、金時鐘に関する様々な研究成果が蓄積されている。しかし、現在に至るまで主な研究対象とされたのは、『地平線』(1955)、『新瀉』(1970)、『猪飼野詩集』(1978)など、1950年代から1990年代までに発表された詩集であった。その一方で、2000年以降に発表された第7詩集『失くした季節』や第8詩集『背中の地図³⁶』については、いまだ十分な研究が行われていない。しかし、これらの詩集は、ディアスポラ詩人として金時鐘が故郷をどのように捉えるのかが最もよく表れており、彼の文学活動の集大成といっても過言ではない。そこで本論文では、2000年以降の詩集『失くした季節』と『背中の地図』に焦点を当て、従来論じられてきたポストコロニアルとディアスポラの視点を引き継ぎながらも新しい金時鐘論を説くことを試みる。

その際、本稿では金時鐘の言語と故郷の関係について着目する。これに関して、金時鐘は自らのエッセーの中で次の4つの言語について述べている。それはすなわち、日本語、朝鮮語、「在日朝鮮人語としての日本語」、「生理の言語」である。金時鐘が語るこれらの言語について、今まで数多くの研究がなされてきたが、それらでは日本語や「在日朝鮮人語としての日本語」を中心に論じられることが多かった。また、その内容は、金時鐘が植民地期に培われた日本語を報復の対象として打ち砕き、日本語の幅を広げることを文学活動で実践しているというものであった³⁷。

しかしその一方で、朝鮮語や「生理の言語」に関して具体的に論じた研究は少ない。その中でも丁海玉は、金時鐘の作品における言語の根底には、朝鮮語の存在が確かめられるということを目指し、金時鐘の言語観を朝鮮語との関連から捉えている³⁸。本稿においても、丁海玉の指摘を踏まえながら金時鐘の朝鮮語と「生理の言語」に着目する。実際、金時鐘は2000年以降に尹東柱の詩集を日本語に翻訳する作業を行い、朝鮮語と再び出会うことになった。また、2000年以降に金時鐘は、父母から伝わる「生理の言語」という言語があることについても度々言及している。ここでいう「生理の言語」とは、無意識に周囲の環境によって育まれる言語を意味する。それはまた、幼少期に過ごした済州島において父母たちから肌感覚で伝えられた言語であり、金時鐘にとって故郷の言語といえるようなものであった。このような観点から、本稿では朝鮮語詩集の翻訳作業や「生理の言語」に関する分析を通じて、金時鐘の言語観と故郷の関係について考察する。

金時鐘の2000年以降の言語と故郷を考える上で最も注目すべきは、2000年4月に初めて

³⁶ 金時鐘『背中の地図 金時鐘詩集』河出書房新社、2018年。

³⁷ これに関しては、主に前に述べた、磯貝治良、川村湊、梁石日らによって論じられた。

³⁸ 丁海玉『祈り』港の人、2018年、198頁。

公の場で自らの済州 4・3 体験について証言したことである。これを契機に、金時鐘は済州 4・3 体験を文学作品に直接的に描くようになる。そのことが最もよく表れているのが 2010 年に発表された『失くした季節』である。『失くした季節』は、済州 4・3 証言後に初めて発表された詩集であり、済州 4・3 体験が金時鐘の言葉で語られている。それと同時に生まれ育った故郷である済州島に対する金時鐘の考えがよく表れている。したがって、本稿では、『失くした季節』を「済州 4・3 文学」として捉え、金時鐘がどのように故郷と向き合い直したのかを考察する。

その後、2018 年に発表された『背中の地図』は、3・11 をテーマに編まれた詩集である。『背中の地図』では、まるで済州 4・3 の被害者であるかのように 3・11 の被害者を描写するなど、金時鐘の個人的な体験と重なり合うように、3・11 の現場の様子が描写されている。このことから、金時鐘は 3・11 による被災者の故郷喪失を迫体験することによって、自らが帰るべき故郷がどこにあるのかを再確認したと考えられる。

これと関連して、日本文学の分野では、3・11 をテーマに描かれた文学作品は「震災後文学」として論じられおり、数多くの論考や研究が蓄積されている³⁹。しかし、そこには在日朝鮮人文学の作品はとりあげられていない。それと同様に、在日朝鮮人文学の分野においても「震災後文学」の視点から論じた研究はいまだ十分になされていない。例えば、小林敏明は、3・11 による故郷喪失を在日朝鮮人作家の故郷喪失の体験と重ね合わせながら論じているものの、文学作品にそれらのテーマがどのように表れているのかについての分析には至っていない⁴⁰。本稿では、このような問題意識のもとに、『背中の地図』を「震災後文学」として捉え、金時鐘と故郷との関係について論じる。

以上のように、本稿では 2000 年以降の詩集『失くした季節』と『背中の地図』を対象として、金時鐘の故郷観がどのように表現されているのか具体的に考察する。そのような作業を通じて、金時鐘にとっての故郷がいかなるものであり、また人生の最晩年に生きる金時鐘が、自らの帰っていく場所はどこであると考えているのか明らかにする。本稿では、金時鐘の作品を「済州 4・3 文学」と「震災後文学」の側面から分析することによって、ディアスポラ文学としての在日朝鮮人文学という枠組みに留まらない、より多角的な金時鐘文学の読み方を提示する。また本稿では、筆者が金時鐘に直接行ったインタビューや、金時鐘に同行した済州島での現地調査をもとに、文学作品だけでは見えない新たな金時鐘像について論じたい。

(3) 本論文の構成

本論文は 3 部 7 章で構成される。第 I 部 (1～3 章) では、金時鐘の 2000 年前後に発表さ

³⁹ 木村朗子『震災後文学論：あたらしい日本文学のために』（青土社、2013 年）木村朗子『その後の震災後文学論』（青土社、2018 年）や、木村朗子、アンヌ・バヤール=坂井編著『世界文学としての“震災後文学”』（明石書店、2021 年）があげられる。

⁴⁰ 小林敏明『故郷喪失の時代』文藝春秋、2020 年

れたエッセーと朝鮮詩の翻訳作品の分析を行いながら、金時鐘の言語観について論じる。とりわけ、金時鐘の言語を考えるにあたって重要である朝鮮語と「生理の言語」に焦点を当てる。また、それらの言語が、日本語や金時鐘が言及する「在日朝鮮人語としての日本語」とどのような関係性を持つのかについて検討する。このように、金時鐘が自身の言語観を形成する過程をライフヒストリーと照らし合わせながら読み解くことによって、言語と故郷がどのように関連するのかについて明らかにする。

第Ⅱ部（4～5章）では、『失くした季節』について論じる。金時鐘の済州4・3の体験が『失くした季節』においてどのように描かれているのか、またそれが2000年の体験告白以前とどのように変容したのかについて考察する。さらに、同時期に行っていた尹東柱詩集の翻訳作業との関連性について論じる。『失くした季節』と尹東柱の翻訳作品には、共通テーマがみられる。これらの共通点を比較することによって、尹東柱の作品の翻訳作業から受けた影響について明らかにする。そして最後に、故郷がどのように描かれているのかについて考察する。故郷に関連する詩語の使用や故郷の描かれ方を検討することで、金時鐘の故郷に対する考えがどのように表れているのか明らかにする。

第Ⅲ部（6～7章）では、『背中の地図』について論じる。ここでは、出来事の再体験という観点から、済州4・3と北朝鮮への帰国事業という個人体験が『背中の地図』の中でどのように表現されているのか分析する。さらに、『背中の地図』の大きなテーマである原発批判について考察する。作中における原発の比喩表現の方法やその意図について分析することで、金時鐘が原発をどのように捉えているのかについて明らかにする。また、3・11によって故郷喪失を体験した人々を目撃することによって、金時鐘は故郷喪失を再体験したと考えられる。この再体験は、金時鐘に自らの故郷について考えさせる大きな動機になったに違いない。このような観点から、金時鐘の故郷観が『背中の地図』にどのように表れているのかについて明らかにする。

第Ⅰ部 金時鐘のライフヒストリーと言語観

第1章 言語観の変遷

第1節 『ゼンダレ』における論争と言語観の芽生え—1950年代～1960年代

金時鐘は、渡日した翌年の1950年に日本共産党に入党し、その組織下にある民戦の下で朝鮮学校の復興活動始めとする文化活動を行った。その一環として文筆活動を開始し、1953年から1959年まで発刊された文学雑誌『ゼンダレ』の編集委員として中心的な役割を担いながら数多くの詩や論評を発表した。しかし、1955年に民戦が在日本朝鮮人総聯合会に改められ、北朝鮮の影響を大きく受ける方向転換がなされた。それにより、北朝鮮の政治体制が総聯に反映され、文学活動においても北朝鮮のプロパガンダを意識せざるを得なくなっ

た。それに加え、朝鮮語で書くことを要求されるようになった。これに対し、金時鐘は、プロパガンダに従うことや朝鮮語で書くことに反対し、総聯から批判を受けるようになった。それでも金時鐘は日本語で創作する意義を主張しながら、1955年に第1詩集である『地平線』、1957年に第2詩集『日本風土記』を日本語で発表した。

当時の金時鐘の言語観がよく表れている例として、『ヂンダレ』の中で繰り広げられた「流民の記憶」論争があげられる⁴¹。この論争において、金時鐘は自らの言語観に関して述べた論考「盲と蛇の押し問答」⁴²を発表した。そこで金時鐘は、朝鮮語で書くことの難しさについて以下のように述べている。

私は在日という副詞をもった朝鮮人です。(…中略…) 私は、国語を意識的に朝鮮語であると云い聞かせることによつて朝鮮語が国語になつています⁴³。

ここでは、朝鮮語を「国語」と認識できないという言語とアイデンティティのズレが存在することが述べられている。また金時鐘は、この時すでに自らを「在日」する「朝鮮人」と認識していたことが分かる。これに関し、金時鐘は2000年以降に発表されたエッセーにおいて、「在日を生きる」という言葉について以下のように記している。

「在日を生きる」といい出したのは、実はかなり早くて、一九五八年ぐらいにはもう文章に書いています。(…中略…) 実際は「在日の実存を生きる」といいたかったんですよ。ただ「在日の実存を生きる」というのは、キャッチフレーズとしては長ったらしいので。それで「在日を生きる」。「在日を」というのは、日本で生きとおさなければならない、否応もない生活実態、つまり「在日であることの実存を生きる」ということです⁴⁴。

ここで示されている1958年とは、『ヂンダレ』やそれに関わる組織下で文化活動や文学活動を盛んに行っていた時期である。金時鐘は、その頃からすでに「在日の実存を生きる」ことを自覚していたのである。

このように、金時鐘は1950年中頃から1950年代末にかけて朝聯で組織の文化活動として日本語による文学活動を始めたものの、総聯へと組織改編がなされ、文学の内容や使用言語が制限される状況に陥った。そのことは、金時鐘に何を書くのか、朝鮮語で書くのか日本語で書くのかについて考えさせる契機となった。その答えとして、金時鐘は「在日」する「朝鮮人」として「日本語」で書くことを選択したのである。この時期の自身が何者であるのか

⁴¹ 「流民の記憶」論争に関しては、細見和之『ディアスポラを生きる金時鐘』（前掲）を参照。

⁴² 金時鐘「盲と蛇の押し問答—意識の定型化と詩を中心に」復刻版『ヂンダレ』18号、不二出版、2008年、2～8頁。

⁴³ 同上、2頁。

⁴⁴ 金時鐘、前掲『わが生と詩』211頁。

についての答えを出そうとして揺れ動く心境と、その過程で形成された「在日」として「日本語」を使用するという考え方は、後に金時鐘が提唱する「生理の言語」や「在日朝鮮人語としての日本語」という独自の言語観を生み出す基盤となった。

第2節 「在日朝鮮人語としての日本語」の成立—1970年代～1990年代

1955年の総聯への方針転換以降、金時鐘は1950年代末から1970年に至るまで文学活動を行えない状況に陥った。金時鐘が文学活動を再開できるようになったのは、第3詩集『新潟』(1970)以降のことであった。金時鐘は、詩集『新潟』を発表した後、1973年から1988年まで兵庫県立湊川高等学校で主に朝鮮語の教員として働きながら文学活動を行なった。金時鐘のエッセー集『「在日」のはざままで』には、1970年代から1980年代中頃に発表された湊川高校の出来事を綴ったエッセーや講演録が収録されている。そこからは金時鐘が10年間の沈黙を破り、在日朝鮮人作家として文学活動を再開しようと試みた心境を読み取ることができる。

この『「在日」のはざままで』において金時鐘は、日本語、朝鮮語、「生理言語」、「在日朝鮮人語としての日本語」の4つの言語観について言及している。まず日本語についてみると、金時鐘は日本語を自らの意識の底辺を形づくっている言語と述べている⁴⁵。ここでいう日本語とは、金時鐘が幼少期に植民地下の朝鮮で植えつけられた言語であり、かつて皇国少年であった金時鐘にとっての「国語」であった。

次に、金時鐘は朝鮮語について以下のように述べている。

私が朝鮮人に立ち返ったのは十七歳のときだった。(…中略…) なにしろその齢になるまでアの文字ひとつ、朝鮮文字では書けない皇国少年の私だったのだ。そのような私にこれがお前の国だという国を突きつけられる。その「国」にありつくだけの何物も持ち合わさない私にである。第一私には朝鮮語、民族としての意識を深め、自覚をとりつけるだけの母国語がなかった。かろうじて聞き分けがつく程度の、標準語からはほど遠い方言だけが、なけなしの私の母語であった⁴⁶。

ここでは、「母国語」と「母語」、そして朝鮮語について述べられている。植民地朝鮮の下で生まれ育った金時鐘にとって「母国語」といえる言語はなく、解放後に突如として「朝鮮語」が「母国語」として立ち現れた。しかし、金時鐘は解放後すぐに「母国語」としての「朝鮮語」を持つことができず、彼にとって「朝鮮語」とは「かろうじて聞き分けがつく程度」の「なけなしの私の母語」であった。

そのような金時鐘に、植民地解放直後初めて朝鮮人であることを自覚させ、「母国語」で

⁴⁵ 同上、29頁。

⁴⁶ 金時鐘、前掲『わが生と詩』35頁。

あり「母語」でもある「朝鮮語」に向き合わせたのが、金時鐘の父が歌っていた朝鮮語版「クレメンタインの歌⁴⁷」であった⁴⁸。金時鐘は、この歌を「生理の言語」であるとし、その定義について、「暮らしの伝承を共通して持ち合わせている者同士がひびき合う、あの体ごとの了解⁴⁹」と言及している。

さらに金時鐘は、「生理の言語」を土台にしながらい日朝鮮人が使用する言語を「在日朝鮮人語としての日本語」であると以下のように述べている。

朝鮮人は朝鮮人の総和でもって、個々人の独自性が保持されていますので、日本人と出会いますと生理が抱え持っている総和の意思が反発しあってぶれを生じることとなります。厳密に言うならば、在日朝鮮人の持つ「日本語」は在日朝鮮人語としての「日本語」なわけです⁵⁰。

これに続き、金時鐘は2001年の金石範⁵¹（1925～）と文京洙との対談においても、「在日朝鮮人語としての日本語」について以下のように言及している。

自分の言葉とは何かを必死で考えるようになりました。ぼくは「在日朝鮮人語としての日本語」という言い方をしています。在日の古い世代の使っているのは「日本語」ではないんです。「在日朝鮮人語」としての日本語なんです⁵²。

ここでいう在日朝鮮人の「古い世代」とは、在日朝鮮人一世、二世を指すと考えられる。金時鐘にとって「在日朝鮮人語としての日本語」こそが自らの使用言語であり、在日朝鮮人

⁴⁷ 「クレメンタインの歌」とは、元はアメリカ合衆国の民謡であり、いなくなってしまった娘に父が呼びかける歌である。ここで出てくる「クレメンタインの歌」は、歌詞が朝鮮語で内容も違うものである。以下は金時鐘が朝鮮語版「クレメンタインの歌」を日本語に訳したものである。「広い海辺に苦屋ひとつ、漁師の父と年端もいかぬ娘がいた。おお愛よ、愛よ、わがいとしのクレメンタインよ、老いた父ひとりにしておまえは本当に去ったのか。それは風の強い朝のことだった。母を捜すのだといって渚へでたが、おまえはどうとう帰ってこない。おお愛よ、愛よ、わがいとしのクレメンタインよ、老いた父ひとりにしておまえは本当に去ったのか。」（参考：細見和之、前掲『ディアスポラを生きる金時鐘』v～xv頁。金時鐘『「在日」のはざままで』平凡社、2001年、24～26頁）

⁴⁸ 金時鐘、前掲『「在日」のはざままで』24～26頁。

⁴⁹ 同上、445頁。

⁵⁰ 同上、430頁。

⁵¹ 在日朝鮮人二世の作家。1925年、母が済州島から渡日して3、4ヶ月後に大阪・猪飼野（現生野区）で生まれる。京都大学文学部美術学科卒業。13歳から歯ブラシ工場、看板店見習い、鐵工所工員、新聞配達などをして独学。14歳のとき済州島を訪れる。1957年、『文芸首都』に「看守朴書房」や「鴉の死」を発表して以来、済州4・3の追求をライフワークにする。その集大成が『火山島』である（国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編『在日コリアン辞典』明石書店、2012年）。

⁵² 金石範、金時鐘著、文京洙編『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか：済州島四・三事件の記憶と文学』平凡社、2015年、140頁。

の人々が持ち得る独自の言語なのである。

このように、金時鐘はライフヒストリーに照らし合わせながら自らの言語観について言及した。まず、日本語は金時鐘にとって植え付けられた言語であり、解放後もそれは変わらずに意識を司る言語であり続けた。その一方、「朝鮮語」は学び受け継ぐ機会を奪われた言語であった。そして、植民地解放直後に「クレメンタインの歌」を通して出会うことになるのが「生理の言語」であった。この「生理の言語」は暮らしの伝承で自然と身に付く言語であり、それを土台として在日朝鮮人の人々が使用する「在日朝鮮人語としての日本語」が作られると金時鐘は述べている。このようにして金時鐘は、文学活動を再開した1970年から1980年代にかけて自らの言語観を確立していき、在日朝鮮人が持ち得る独自の言語である「在日朝鮮人語としての日本語」の存在を主張するに至ったのである。

第3節 「日本語への報復」と新たな日本語の創造—2000年以降

金時鐘の言語観は、2000年に入り新たな転機を迎えた。それは、2000年4月5日に行われた「済州島四・三事件52周年記念講演会」において初めて公の場で自身の済州4・3の体験について語ったことが大きく関係している⁵³。これを契機に、金時鐘は、済州4・3の体験を直接作品に書き、未だ明かしていなかった故郷における出来事の詳細をエッセーに書き始めた。これらの行為は、金時鐘にとって自らの故郷を見つめ直す機会になり、言語観にも影響を与えたと考えられる。

金時鐘は、2004年にエッセー集『わが生と詩⁵⁴』（2004）を発表し、そこで日本語と朝鮮語について詳しく言及している。金時鐘は「私の何が解放されたかが問題である⁵⁵」と述べた後、言語の問題をとりあげ、朝鮮の植民地解放と日本語の関係について以下のように述べている。

日本語は全くもって私の過去、現在を抱え込んでしまっています。日本語はそのために失ってしまった私の過去そのものでもあります。これがみな夏に関わっている私の記憶の下地です。それでもその日本語にこだわって詩を書き、自分の思いを定着させようと戦後この方あくせくとしています。私の解放は自明です。手慣れた日本語から切れることであり、日本語で閉ざされてしまった自分の過去から目を離さないことです⁵⁶。

ここで、金時鐘はいまだ日本語に支配されたままであると述べながら、「手慣れた日本語から切れ」、「日本語で閉ざされてしまった自分の過去」と向き合うことが、自分にとっての

⁵³ 金時鐘「記憶せよ、和合せよ」『図書新聞』第2487号、図書新聞、2000年5月27日、1～3頁。

⁵⁴ 金時鐘、前掲『わが生と詩』。

⁵⁵ 同上、6頁。

⁵⁶ 同上、8頁。

植民地解放であると主張している。その際、金時鐘は「手慣れた日本語」を「報復」の対象として捉えていることが、以下の言及から読み取れる。

よんどろこなく来た日本での暮らしではありましたが、詩を書くことにそれでも執着するとすれば、いやがおうでも恨み多い日本語を“日本”へ向けて生きるしかなく、それはそのまま私という人間の下地を敷きつめた自分の日本語への私の報復ともならねばならないものでもありました⁵⁷。

このように金時鐘は、自らに染み付いた日本語を自らが「報復」することによって日本語からの解放を試みると言及している。金時鐘にとって「恨み多い日本語」と向き合いながら詩を書くということが「日本語への報復」であった。さらに、金時鐘はどのように「日本語から切れ」、「日本語への報復」を成し遂げるのかについて具体的に述べている。

あくせく身につけたせちがらい日本語の^{がしやう}我執をどうすれば剥ぎ落とせるか。訥々しい日本語にあくまでも徹し、練達な日本語に^か狎れ合わない自分であること。それが私の抱える私の日本語への、私の報復です。私は日本に報復を遂げたいといつも思っています。日本に狎れ合った自分への報復が、行き着くところ日本語の間口を多少とも広げ、日本語にない言語機能を私は持ち込めるかもしれません。その時、私の報復は成し遂げられると思っています⁵⁸。

さらに金時鐘は、「日本語の音の間口の狭さを心情的にでも広げるためには朝鮮語が多いに作用するだろう⁵⁹」とも言及している。ここで注目すべきは、金時鐘が「日本語への報復」を成し遂げる際に、「朝鮮語が大いに作用する」と述べている点である。実際、金時鐘は朝鮮語から日本語を翻訳しないといけなかったと回想しているように、幼少期から朝鮮語に慣れ親しんでいた⁶⁰。そのため、金時鐘は日本語に朝鮮語を取り入れることができたのである。そのことについて具体的に述べたものに、次のような言及がある。

私が日本語から得たものは決して小さいものではありません。私の母国語と日本語との関係でも、私は自分の国の言葉にない言葉の活用を、自分の言葉の仕組みとして持っております⁶¹。

このように金時鐘は、朝鮮語にない言葉の要素を日本語から取り入れることができた

⁵⁷ 金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる—濟州島から猪飼野へ』254頁。

⁵⁸ 金時鐘、前掲『わが生と詩』29～30頁。

⁵⁹ 同上、68頁。

⁶⁰ 同上、20頁。

⁶¹ 金時鐘、前掲『わが生と詩』24頁。

言及している。つまり、日本語を報復の対象として捉えるだけではなく、日本語と朝鮮語の双方を活かしながら新たな言語観を形成しようとした。

以上のように、2000年以降、金時鐘は済州4・3の体験証言を契機に、自らの言語論を深化させていった。それは、「日本語への報復」という概念によく表されている。金時鐘は、植民地期に植え付けられた日本語を削ぎ落としながら、日本語にあって朝鮮語にないもの、朝鮮語にあって日本語にないものを組み合わせることによって新たな日本語を創造することを通して「日本語への報復」の実践を試みようとしたのである。

第2章 2000年以降における朝鮮語詩集の翻訳

第1節 尹東柱『空と風と星と詩』の翻訳

(1) 小野十三郎の『詩論』からの影響

2000年以降における金時鐘の言語観の転機は、故郷の言語である朝鮮語と向き合うことへと繋がっていった。とりわけ、2004年に尹東柱の詩集の翻訳を行い、2010年に金素雲の『朝鮮詩集』の再翻訳を行うことは、「日本語への報復」を実践する重要な作業となった。これらの翻訳作業は、金時鐘にとって朝鮮語と出会い直す機会になったと考えられる。

金時鐘が朝鮮近代詩の翻訳を行う際に大きな影響を受けたと考えられるのが、小野十三郎の『詩論⁶²』(1947)であった。金時鐘は、1949年に渡日して一年が経ったある日に偶然立ち寄った本屋で詩人小野十三郎の『詩論』と出会った。『詩論』に記されている姿勢や考え方は金時鐘に大きな影響を与えた。これに関し、金時鐘は小野十三郎の『詩論』との出会いを以下のように記している。

私が日本に来て最初に出会った巡り合いは、一冊の古本^{ふるほん}の形でもたらされました。朝鮮戦争が火を噴く直前の、メーデーの帰りの恵みでした。(…中略…) 私はその本を道頓堀の「天牛^{てんぎゅう}」という古本屋で手に入れました。古本とはいえまだ新本同様の、『詩論』という小野十三郎著の単行本でした。そのときのとまどいと衝撃は、その後の私を決定づけてしまったと言っていいくらいのものでした⁶³。

金時鐘は、小野十三郎の『詩論』との出会いをことあるごとに述べ、「その後の私を決定

⁶² 小野十三郎『詩論』真善美社、1947年。本稿では、小野十三郎『詩論+続詩論+想像力』(新潮社、2008年)を参照する。『詩論』の元となる大部分は、1942年から1943年に雑誌『文化組織』に、また一部は1946年～1947年に雑誌『コスモス』に発表されている(寺島珠雄『詩論+続詩論+想像力』解説・編注 小野十三郎『詩論+続詩論+想像力』新潮社、2008年、16頁～18頁)。

⁶³ 金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる一済州島から猪飼野へ』251～252頁。

づける」、「日本に来ていたころ手に入れた私には羅針盤のような本」⁶⁴と語り表している程、金時鐘に大きな影響を与えた。それ程にも大きな衝撃を与えた『詩論』のどのような部分に金時鐘は惹かれたのだろうか。金時鐘が『詩論』を初めて読んだ際に感じ取った事柄について以下のように述べている。

故郷を遠くした者、国を離れた者の常として、家郷というのは感傷をひたしてくれる情緒となるものです。慣れない異国での苦しい生活の中で、郷愁は事実、私の孤独をいやしてくれたものでした。そのような私が、「故郷」という文字に惹かれて、なにげなく読んだ『詩論』の一つに、いやというほど打ちすえられたのです。

「故郷とは、熊本だとか信州だとか東北のことだと言った奴がある。私はいつも熊本や信州や東北に向って復讐しているつもりだ」

そこはかたなく私を包んでくれている情感、情念の「故郷」に対して、それは復讐されるべきものと言われると、なけなしの寄りどころが取り払われたみたいで、私の孤独感はこの上なくつまったものでした⁶⁵。

ここで金時鐘が取りあげている小野の「故郷」に対し復讐するという考え方には、「郷土」や「自然」に対して観念的、理想主義的なイメージや、それらの認識を「歌」に取り入れることに対する批判意識が根底に存在する。小野は、「郷土」、「故郷」、「自然」を現代の新しい観点から唯物思想的に捉える視点を持つようとしたのである。さらに金時鐘は小野の言葉を引用しながら以下のように述べている。

「人間がその人生のある時期において自己の思想を更新させるような意味をもつ、土地とか風景とかいうものにめぐり合わせたことは羨望に値する」

それが私にはよんどころなくやって来たはずの「日本」との出会いであり、日本の中の「朝鮮」を形作っている「猪飼野」の相貌であり、その事象、事物と、地点を開かせてくれた小野十三郎の言葉であり、『詩論』が明かす「抒情」の科学でありました⁶⁶。

金時鐘は、小野の郷土観、故郷観を吸収し、さらには自身の「在日」することへの肯定的な意味付けを行うことができた。故郷を二度失った金時鐘にとって、故郷の否定、郷土の新しい解釈という考え、つまりは日本の中の「朝鮮」ともいえる「猪飼野」という新たな「郷土」を発見させてくれる道標となった。すなわち、金時鐘が日本で生きていくことを肯定的に捉えさせてくれる教えであったといえるのである。

⁶⁴ 金時鐘「2022年アジア文学フェスティバル 第4回授賞式 基調講演〈詩は書かれなくても存在する〉-私の「日本語への報復」が悟らせたもの-」原稿資料、17頁。

⁶⁵ 金時鐘「私の出会った人々」小野十三郎、前掲『小野十三郎『詩論+続詩論+想像力』6頁。

⁶⁶ 同上、6～7頁。

この小野の故郷の否定や、故郷に復讐するという姿勢は、戦前における俳句や短歌に通ずる「抒情」に対する批判と密接に関係している。小野は、日本において七五調の抒情詩が蔓延している中、そのような風潮に危機意識を持ち、そこから抜け出そうと試みた。そして、小野自らが考える現代詩のあり方について、以下のように言及している。

現代詩に具わる新しい日本的性格とは、一口に言えば「批評」である。時代と自己との関係を塞ぐ意欲的な批判精神を私は挙げたい。(…中略…)「批評」は荒々しく詩の表面に躍り出て、その内容の非等質性と非親和性は詩形式を拒否し、むしろ生理的な嫌悪感をもって、古い声調や韻律に立ち向かう。かかる粗剛なる批評精神の発動を感じ得ない者には、抒情の変革ということは何の意味もないだろう⁶⁷。

このように小野にとって現代詩とは、短歌や俳句に含まれる「古い音調や韻律」を徹底的に批判し、「批評」の精神でもって詩を成り立てせるべきものであった⁶⁸。金時鐘は、これらの小野の考え方を「抒情」の科学とし、自らの地点を開かせてくれたきっかけであったと述べている⁶⁹。

さらに、金時鐘はこのような小野の姿勢に対し、短歌的な抒情詩に埋もれてしまう「狎れあい」がそのまま戦争加担や天皇制を受け入れる風潮に流されることにつながる確信が小野にあったと述べている⁷⁰。これに関し、金時鐘は当時の小野の詩論と天皇制の関係について以下のように述べている。

天皇中心の神がかり的な精神主義への批判が歌うより描きだす思考の可視^ア下を導きだした、とも言える詩的美の時代的必然の推移だったのです。主情的な情感から切れてなお流露する律動に耳を傾け、瞳を凝らす。この意志の批評こそが、現代詩人が見いださねばならない<抒情>です⁷¹。

金時鐘は、「狎れあい」や「あるがままの状態」に埋もれ、過去に皇国少年に育ってしまったという経験を持っているため、「狎れあい」や「あるがままの状態」に抵抗、批判する

⁶⁷ 同上、22～23頁。

⁶⁸ このような姿勢に対し、花田清輝は、「時間を空間化し、質を量に還元し、観念を物質としてとらえ、聴覚を視覚によって置き換え一要するに、一個の唯物論者として、あくまで科学的に、これまであがめてたてまつられてきたいっさいのものから、神秘のヴェイルをはぎとろうと試みている」と評価している（同上、288頁）。

⁶⁹ 同上、6～7頁。

⁷⁰ 金時鐘、倉橋健一、山田兼士「〈ひとり〉の場所——小野十三郎の現在形（特集 小野十三郎再読）」『現代詩手帖 51(10)』思潮社、2008年、82～97頁。

⁷¹ 金時鐘、前掲「2022年アジア文学フェスティバル 第4回授賞式 基調講演<詩は書かれなくても存在する>—私の「日本語への報復」が悟らせたもの—」12頁。

ということは、過去の自分を批判する姿勢とも繋がるのである。このことから、金時鐘は、「歌うより描く」こと、「意思の批評」を作品に表すことの重要性を説くのである。

このような作品に対する姿勢は、小野の「歌と逆に。歌に。」という言葉に集約されるが、金時鐘はこれを「切れてつながること」と解釈し、以下のように述べている。

亡国の情念は私が壁となって切れるのよ。つまり受け入れるわけにはいかないけど、それでもその思いは無化にできない。だから大衆のなかのどういう存在かが問われてくる。(…中略…) つまり、切れてつながっている。もちろん大衆の側、めぐまれない社会的弱者たちの側で、ぼくは生きていく⁷²。

このように金時鐘は、「大衆」に染み付いた「情念」や戦前から引き継がれる抒情から離れ、それと背を向けることによって、自らの作品を創り上げていくという方向性を小野の『詩論』から受け継いだのである。このことは、朝鮮近代詩の翻訳作業によって実践されていく。以上のことを踏まえながら、金時鐘がいかに朝鮮近代詩の翻訳作業を行ったのかについてみてみよう。

(2) 金時鐘の尹東柱に対する評価

金時鐘は、2004年に尹東柱の翻訳詩集『空と風と星と詩⁷³』を発表した。その巻末「解説に代えて—尹東柱・生と詩の光芒」には、金時鐘が尹東柱をどのように認識しているのかについて述べられている⁷⁴。金時鐘は尹東柱作品の印象について、戦時非常時体制の時局意識からはかけ離れた、なよなよしい、というよりも女々しい願いのつぶやきが集められている詩集と受け止められて、むしろ罵りを受けたはずであると言及している⁷⁵。そのような時局からかけ離れた「つぶやき」が、治安維持法に引っかかる可能性をむしろ高めさせたのだろうと予想している。

また、尹東柱についての従来の評価である「民族抵抗の象徴」の詩人やキリスト教に基づいた詩人という尹東柱のイメージについて批判をしている。この「植民地に抵抗した詩人」というイメージは読者側の勝手な捉え方であり、尹東柱の詩の精神的な内容はその見方によって見過ごされていることを金時鐘は指摘しているのである⁷⁶。そして、自らが尹東柱を翻訳し理解する目的について、同じ詩人という立場から、尹東柱と日本語に取り付いている

⁷² 金時鐘、倉橋健一、山田兼士、前掲「〈ひとり〉の場所——小野十三郎の現在形（特集 小野十三郎再読）」92頁。

⁷³ 金時鐘は、2004年にもず工房から、2012年に岩波書店から『空と風と星と詩』を発表した。本稿では、2012年版を底本とする。

⁷⁴ 先行研究の整理「在日朝鮮人詩人金時鐘の言語世界」国際高麗学会『韓国学と朝鮮学、その争点とコリア学』ペロダタイムブック、韓国、151～174頁、2018年を参照。

⁷⁵ 金時鐘「解説に代えて—尹東柱・生と詩の光芒」『空と風と星と詩：尹東柱詩集』岩波書店、2012年、163頁。

⁷⁶ 同上、168～169頁。

朝鮮人である自身との隔たりを見定めることで、尹東柱の詩と特質を探り出すことであると述べている⁷⁷。具体的には、尹東柱の詩がかかえもっている方法意識と、その詩がにじませている抒情の質の問題を読み取るべきだと主張しながら⁷⁸、以下のように言及している。

念を入れて読むと、尹東柱の詩は情感と抒情を混同するような近代抒情詩ではなく、手法的にもすぐれて現代詩的な、思考の可視化を成り立たせています。「思考の可視化」とは、考えていることや思っていることを目に映るように描き出すということです。近代抒情詩と現代詩の違いを一言でいえば、思いを歌うように述べるか、思いを描きだすかの違いです⁷⁹。

このように金時鐘は、尹東柱作品に現代詩の要素が存在する点に着目したのである。金時鐘は尹東柱の詩を一見情感たっぷりの詩であるかのように見えるものの、よく読んでみると、「思考の可視化」を実践する「現代詩」であると言及している。ここでいう「現代詩」とは、情感を取り入れた近代の抒情詩と対立するものとして捉えられていることはいうまでもない。金時鐘は、尹東柱の詩を書く姿勢について、思いを感じさせるより見える物として描こうと努めている現代詩人の要素を持っていたと分析している。

そして金時鐘は、そのことがよく表れている尹東柱の作品として「自画像」をあげている。この作品の本文は、以下の通りである。

麓の隅^{すみ}を廻り ひそまった田のかたわらの 井戸をひとり訪ねては
そおっと覗いて見ます。

井戸の中には 月が明るく 雲が流れ 空が広がり
青い風が吹いて 秋があります。

そしてひとりの 男がいます。
どうしてかその男が憎くなり 帰っていきます。

帰りながら考えると その男が哀れになります。
引き返して覗くと その男はそのまいます。

またもやその男が憎くなり 帰っていきます。
道すがら考えると その男がいとおしくなります。

⁷⁷ 同上、167 頁。

⁷⁸ 同上。

⁷⁹ 尹東柱著、金時鐘編訳『空と風と星と詩：尹東柱詩集』岩波書店、2012 年、165 頁。

井戸の中には月が明るく 雲が流れ 空が広がり
青い風が吹いて 秋があつて
追憶のように 男がいます。

(尹東柱作、金時鐘訳「自画像⁸⁰⁾)

この作品は、井戸の中を見ている「私」が、井戸の中に映る「男」に近づいたり離れたりしながら思い悩んでいる様子を描いている。この「私」は現在の「私」として、「男」は過去の「私」として解釈できる。「自画像」について金時鐘は、自分も見つめられる対象の「物」に客体化させてしまう方法、つまり書き手の心境が読み手の目で見取れる映像として描きだされた作品であると指摘している⁸¹⁾。さらには、井戸の中に自分の分身がいるという構図に注目しながら、自分というものを対象化して作品を書いている点を評価した。これに関連して、金時鐘は今まで見落とされがちな尹東柱作品の特徴について以下のように説明している。

尹東柱の清純な心情を慮るあまり、とかく見落としてきたのが彼のこの内面言語です。尹東柱は詩を書いている自分と、自分の心の奥の自分とをいつも対話させます。気をつけて読めば、どの作品にも自己への問い返しが織りなされていることを感じ取れるはずで
す⁸²⁾。

ここからも分かるように、金時鐘は尹東柱を単なる当時の植民地主義や宗主国である日本に対する「抵抗詩人」として評価するだけに留まらず、現代詩を書く詩人として評価している。具体的には、感情を直接描くのではなく、感情や思想を何か別の対照に投影して述べる手法を尹東柱が持っていたことに注目し、当時では珍しい「自己への問い返し」を描いた詩人であることを見出した。尹東柱に対するこのような評価や作品の読解方法は、金時鐘が尹東柱の作品を翻訳する際にも影響していると考えられる。翻訳作品の詳しい分析については、第5章でとりあげる。

第2節 金素雲『朝鮮詩集』の再翻訳

(1)再翻訳に至った背景

⁸⁰⁾ 同上、10～11頁。

⁸¹⁾ 同上、174～175頁。

⁸²⁾ 金時鐘「時代と詩—非命の詩人・尹東柱の生をめぐって」『わが生と詩』岩波書店、2004年、77頁。

2000年以降における金時鐘の朝鮮語との出会い直しの作業は、尹東柱の詩集を翻訳したことを契機により活発に展開されていく。

金時鐘は、尹東柱の翻訳詩集を発表した3年後の2007年に『再訳 朝鮮詩集』を発表した。これは、金素雲が既に日本語に翻訳した『朝鮮詩集』を金時鐘が朝鮮語の原作と照らし合わせながら日本語に翻訳し直したものである。

『朝鮮詩集』とは、金素雲が植民地期に朝鮮語の詩作品を日本語に翻訳した詩選集である。金素雲は、1940年に朝鮮語詩集を日本語に訳した『乳色の雲』（河出書房）を発表し、当時の日本文壇から高い評価を受けた。これに関して、林容澤は、金素雲が同時代に日本で西欧文学の翻訳を手がけた上田敏や永井荷風の影響を受けていた点を指摘している⁸³。その後、『乳色の雲』は、何度か金素雲の手により版を重ねて出版され、最終的に訂正を加えた文庫本として1954年に岩波書店から『朝鮮詩集⁸⁴』発刊された。金時鐘はこの1954年に発表された『朝鮮詩集』を再び日本語に翻訳し直し、『再訳 朝鮮詩集』として発表したのである。

金時鐘による『朝鮮詩集』の再訳に関する研究は、呉世宗によって詳しくなされており、金時鐘の「短歌的抒情」の否定という概念がどのように金時鐘の文学作品に表れているのかについて詳細に分析されている。さらに呉世宗は、金時鐘の「短歌的抒情」の否定の概念が表れているものとして、『再訳 朝鮮詩集』の再訳を取りあげ、金素雲の訳詩と金時鐘の訳詩を比較検討している⁸⁵。その他にも、細見和之は、金時鐘の翻訳作業について、「朝鮮の近代詩を、その抒情を、新しい翻訳をつうじていわば脱植民地下する⁸⁶」試みであったと指摘している。これらの先行研究を踏まえ、金時鐘が再訳に至った経緯や再訳をどのように行ったのかについて詳しくみていく。

金時鐘は、金素雲の既存の翻訳に対し、「まともな朝鮮語辞典ひとつなかった時代に、これほども見事に朝鮮語を移しえた国語（朝鮮語）力の高さと、言語素養の深さにはただただ目を見張るばかり⁸⁷」と言及しながらも、再訳に至った理由について、『再訳 朝鮮詩集』のまえがきで以下のように語っている。

私はいまもって植民地下の自分を育てあげた宗主国の言語、日本語の呪縛から自由ではない。皇国少年として自分の国を言葉で捨て去っていた私にとって、『朝鮮詩集』の再訳を試みるということはそのまま、自分の原語への立ち帰りを図ることであり、“解放（終戦）”からこのかた抱きつづけた自己課題への、六十年越しの取組みであることに私の再訳の理由は尽きる⁸⁸。

⁸³ 同上、76～77頁。

⁸⁴ 金素雲『朝鮮詩集』岩波書店、1954年

⁸⁵ 呉世宗、前掲「『乳色の雲』から『再訳 朝鮮詩集』へ」『リズムと抒情の詩学：金時鐘『長篇詩集新潟』の詩的言語を中心に』75～123頁。

⁸⁶ 同上、49頁。

⁸⁷ 金時鐘『再訳 朝鮮詩集』岩波書店、2007年、5頁。

⁸⁸ 同上、5～6頁。

金時鐘にとって、皇国少年であった頃に大きな影響を受けた金素雲の『朝鮮詩集』を再訳することは、植民地解放後から60年以上も抱いた「自己課題」であった。さらに金時鐘は、2015年に行われた金石範との対談⁸⁹の中で、朝鮮近代詩の翻訳について言及している。そこで、政治的な問題と朝鮮語の翻訳がどのように関係しているのかという問いに対し、金時鐘は金素雲の『朝鮮詩集』との出会いについて以下のように切り出した。

金素雲が日本語に訳した『朝鮮詩集』が最初に出たのは『乳色の雲』（一九四〇年五月、河出書房）です。旧制中学二年の時でしたけど、手に入れて本当に擦り切れるくらい読みました。（…中略…）自分の国の言葉も、自分の国に詩があることも知らんで、金素雲が訳してくれた詩で、朝鮮の“詩心”を分かった気になったんですよ。それはつまりね、うちの国にも、日本の近代抒情詩と同じような抒情詩があることを発見した喜びだったの⁹⁰。

しかし、解放後その詩に対する感動は、日本の「詩心」や抒情と変わらないことに対する感動であり、朝鮮の詩を理解していたわけではなかったということを金時鐘は分かり始めたという。そして、金素雲の『朝鮮詩集』の訳に表れている抒情の質を発見するに至った。金時鐘は、金素雲の日本語訳について以下のように述べている。

金素雲の訳も（…中略…）藤村や白秋の詩にみるような情感ゆたかな「詩」でないと、詩ではなかった時代の金素雲でもありましたので、その語感、韻律、抒情感まで生かして訳をしているわけです。文語、雅語までも駆使して五七五の音調律をととのえろといった、玄妙な日本語でした⁹¹。

これに続き、金時鐘は、植民地が情感ゆたかな詩や小学校唱歌や日本の童謡等の優しい日本の歌としてやって来たと述べながら、『朝鮮詩集』が自分を皇国臣民に作り上げたと言及している⁹²。このような過去を考慮すると、『朝鮮詩集』を再訳は、金時鐘にとって植民地の下で皇国臣民であった自分との訣別を意味する。

さらに金石範は、金時鐘の再訳の作業について、以下のように言及する。

それまで「日本人」のつもりで生きてきたのが、八・一五で「日本人」であることをやめて、今度はまあ南労党に入るようなことになって、四・三で日本に一人で逃げてきた。

⁸⁹ 金石範、金時鐘著、文京洙編、前掲『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか：濟州島四・三事件の記憶と文学』192～249頁。

⁹⁰ 同上。

⁹¹ 同上、222頁。

⁹² 同上。

日本でも詩を書きながら、いろいろな運動もしているけどね、それは、みんな八・一五で完全に否定された自分をもう一度作り直すためじゃないか⁹³。

さらに、金時鐘は、「生まれ変わったつもりではいます⁹⁴」と答える。それに対し、金石範は再び以下のように言及する。

生まれ変わりか。「再生」のための「再訳」というわけや。ある日本の作家が金素雲の訳詩と金時鐘の再訳とを比べて、金素雲の方が文学的にすっと入ってくると言うてたが、それは当然だろうと思う。しかし、「すっと入る」というのは、言葉の「呪縛」と同じだ⁹⁵。

ここでいう「再生」とは、金時鐘の徹底的に自分の過去を否定し、日本的な抒情性が身体の中まで染み込んだ現在の自分を否定することから生まれる「再生」である。また、金時鐘は「言葉の「呪縛」」を具体化し、「抒情は「感性の呪縛」でもある」と述べ、「日本語は例えば季語のように「心情の定型」に縛られているところがある」と言及している⁹⁶。やはりここでも、金時鐘にとって短歌的な抒情は重要な意味を持つことが分かる。したがって、『朝鮮詩集』を再翻訳するということは、短歌的な抒情を否定し、自身の日本語を「再生」する試みであったということがいえる。翻訳に関しての最後の対談内容に、金時鐘は日本語を「復讐」の対象として捉えているという点について以下のように述べている。

日本語への復讐というより、正確には、自分の持っている日本語への復讐ですよ。日本語が一切使えない言葉になって、でも「在日」として、日本語で生きるしかないのよ。詩を書き続けるとすれば、日本人に向けた日本語で書くしか方法はないでしょ。そうすると、つまり今まで自分で作り上げてきた日本語から切れていかなければならないの。私を作り上げた日本語と向き合って、その日本語を私はたたき殺していかなければならないの。それから別の自分の日本語を作り上げなきゃならんの⁹⁷。

ここに、先に述べた小野の「歌と逆に。歌に」という概念を金時鐘が「切れてつながること」と解釈したことがよく表れている。皇国少年として自身を作り上げた日本語から「切れ」、「叩き殺し」、「別の自分の日本語」に「つながる」ことが金時鐘にとって文学活動を行う意図であり原動力になったのである。また、それは朝鮮近代詩の翻訳を通して実践的に行われたのである。それでは次に、金時鐘による金素雲の『朝鮮詩集』の再訳の作品を具体的に分

⁹³ 同上、224 頁。

⁹⁴ 同上、225 頁。

⁹⁵ 同上。

⁹⁶ 同上、225 頁。

⁹⁷ 同上、227 頁。

析してみる。

(2) 日本語を解体するための再翻訳

金時鐘の『朝鮮詩集』の再訳に対する考えを踏まえ、具体的に金素雲の訳と金時鐘の訳を比較検討する。両者の訳の違いがよく表れている例として、異河潤の「들국화(野菊)⁹⁸」があげられる。作中の「나는 들에 핀 국화를 사랑합니다(私は野に咲く菊を愛します)」を、金素雲は、「愛ほしや野に咲く菊の」と訳し、原文の文型とは異なる意識を行なった。一方、金時鐘は、「私は野に咲いている菊の花を愛します」と直訳に近い形に訳出した。

この金素雲の意識と金時鐘の直訳に近い翻訳という特徴は、他の作品においてもみることができ、それは金尚鎔「南に窓を」でより明確に表れている。以下は、金尚鎔「南으로 窓을 내겠소(南に窓を)」の原文の本文である。引用文の番号と下線部は筆者による。

金尚鎔「南으로 窓을 내겠소 ⁹⁹ 」
①南으로 窓을 내겠소 밭이 한참가리 팽이로 파고
②호미론 풀을 매지요。
③구름이 피인다 갈 리 있소 새 노래는 공으로 드르랴오 강냉이가 익걸랑 함께 와 자셔도 좋소。
④왜 사냐건 웃지요。

この「南に窓を」を比較するにあたって、本稿では主に以下の4ヶ所に焦点を当てる。第1は①「南으로 窓을 내겠소」、第2は②「호미론 풀을 매지요」、第3は③「구름이 피인다 갈 리 있소」、第4は④「왜 사냐건」である。金尚鎔「南に窓を」の金素雲訳と金時鐘訳の本文は、以下の通りである。この引用文に記されている番号と下線部は筆者によるものである。

⁹⁸ 金時鐘、前掲『再訳 朝鮮詩集』228～229頁。金素雲、前掲『朝鮮詩集』4頁。

⁹⁹ 金時鐘、前掲『再訳 朝鮮詩集』50～51頁。

金素雲訳「南に窓を ¹⁰⁰ 」	金時鐘訳「南に窓を ¹⁰¹ 」
<p>①南に窓を切りませう</p> <p>畑が少し 鋤で掘り</p> <p>②手鋤で草を取りませう。</p> <p>③雲の誘ひには乗りますまい</p> <p>鳥のこゑは聴き法樂です 唐もろこしが熟れたら 食べにお出でなさい。</p> <p>④なぜ生きてるかつて、 さあねー。</p>	<p>①南に窓をしつらえるとします</p> <p>ひとりで耕せそうな畑を 鋤で掘り</p> <p>②手鋤では雑草を取ります。</p> <p>③雲が賺したとてその術に乗りましょうや 鳥の唄は只で聴きとうございます。 唐もろこしが熟れたら 共にいらして召し上がっても結構です。</p> <p>④なぜ生きているってですか？ そういわれても笑うしかありませんね。</p>

まず①に関して、金素雲は「南に窓を切りませう」と訳し、歴史的仮名遣いを使用していることが特徴的である。一方、金時鐘は「南に窓をしつらえるとします」と訳し、金素雲訳に比べると説明的に訳していることが分かる。

次に②に関して、金素雲と金時鐘は、固有名詞「호미 (草を取るための鎌)」を「手鋤」と訳し、朝鮮語の読みをカタカナに置き換えてルビを施した。両者が朝鮮の固有の名詞の「ホミ」という音をルビという技法を使ってそのまま表記したことは、朝鮮的な要素を少しでも残そうとした意図があったと考えられる。また①でもみられたように、金素雲は「取りませう」と歴史的仮名遣いを使用している一方、金時鐘は「取ります」と現代語に置き換えていることが分かる。

このような、金時鐘による現代語へ置き換える作業は、次の③の訳で顕著にみられる。原文の③「구름이 피인다 갈 리 있소」は、「雲が誘った 行くことがあるか、いやいかない (筆者訳)」と反語を表している。金素雲は「雲の誘いには乗りますまい」と訳しているのに対し、金時鐘は「雲が賺したとてその術に乗りましょうや」と訳している。金時鐘は、反語の部分を「その術には乗りましょうや」と意識し、語尾を話し言葉に置き換えている。

最後の④に関しては、両者の訳の違いが大きく反映されている。金素雲は「なぜ生きてるかつて、さあねー」と訳し、原文「웃지요 (笑ってしまいます)」を省略した意識をしている。その一方で、金時鐘は、「なぜ生きているってですか？／そういわれても笑うしかありませんね」と訳し、原文をより具体化しながら説明している。

以上のことをまとめると、金素雲は、訳詩だとは思わせないような日本語の詩のように訳している。とりわけ、④の「さあねー」のように、原作の趣向をうまく表現する意識といえ

¹⁰⁰ 金素雲、前掲『朝鮮詩集』57～58頁。

¹⁰¹ 金時鐘、前掲『再訳 朝鮮詩集』50～51頁。

る部分が多く見受けられる。それとは反対に、金時鐘は、独特な言い回しを使いながら、より説明的に訳している。このような金時鐘の再訳の姿勢からは、皇国少年期に影響を受けた金素雲『朝鮮詩集』の日本語訳を客観的に読み直し、朝鮮語の原作と向き合うことによって金素雲の日本語を解体しようという意図がみられる。

以上のように、2000年に入り金時鐘は尹東柱の詩集を翻訳し、それに続いて金素雲の『朝鮮詩集』の再訳を行った。これらの作業は、植民地期に植え付けられた日本語に対し「報復」することとも密接に関係していた。金時鐘が尹東柱を新たな視点から評価し訳すことは、金時鐘が出会い損ねた故郷の言語である朝鮮語と出会い直す作業であった。またそれは、故郷と向き合う行為であった。

また金時鐘は、金素雲『朝鮮詩集』の朝鮮詩を新たに翻訳することによって、植民地期から引き継がれる「感性の呪縛¹⁰²」ともいえる抒情を批判し、解体しようとした。したがって、金時鐘にとっての災厄の作業とは、皇国臣民であった過去の自分自身と向き合う行為であり、「日本語への報復」を実践するための重要な過程であった。このような2000年以降における金時鐘の朝鮮語詩の翻訳作業は、日本語に朝鮮語を取り入れ金時鐘独自の日本語を新たに創造する役割を果たしたのだ。

第3章 言語観の根底にある「生理の言語」

第1節 「生理の言語」の定義

前章では、金時鐘は、朝鮮語を再発見し取り入れながら自らの新たな言語観を形成したことについて明らかにした。この金時鐘の言語観の形成に大きな役割を果たしたもう一つの言語として、「生理の言語」があげられる¹⁰³。浅見洋子は、金時鐘が言及する「生理の言語」について、以下のように述べている。

在日朝鮮人の日々の生活のなかでは、その生活感覚に根ざした言葉が「生理言語」として受け継がれてきた。それは、世代を継いで異郷で暮らしてきた在日朝鮮人の苦い笑いや悲愁が抱えられた言葉である。金時鐘は、在日朝鮮人文学はこの「在日朝鮮人語」を下地にして、日本語にも朝鮮語にもない「喩」を創り出せる可能性をもっているのであり、そのことが、「第三世界に繋がる文学の目安」ともなるのだという¹⁰⁴。

¹⁰² 金石範、金時鐘著、文京洙編、前掲『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか：済州島四・三事件の記憶と文学』225頁。

¹⁰³ これに関しては、岡崎享子「金時鐘の「生理の言語」と「在所」—『猪飼野詩集』(1978)から「献詩」(2022)へ—『立命館大学言語文化研究』第34巻第2号、2022年12月25日、51～66頁を参照。

¹⁰⁴ 浅見洋子、前掲『金時鐘の言葉と思想：積的読解の試み』346頁。

このように、浅見は「生理の言語」が「在日朝鮮人語」であることを指摘している。ここでいう「在日朝鮮人語」とは、「在日朝鮮人語としての日本語」を意味すると考えられる。つまり、浅見洋子は、「生理の言語」を「在日朝鮮人語としての日本語」と同一のもの、あるいはより「在日朝鮮人語」をより具体化させた言語と捉えている。その上で、「生理の言語」は、金時鐘が日本語でも朝鮮語でもない「喩」を創り出す過程における土台になっていると指摘する。「生理の言語」が日本語にも朝鮮語にもない「在日朝鮮人語としての日本語」を創り出す可能性を広げるものという浅見の指摘は重要であり、いかに「生理の言語」が金時鐘の言語観を形成するにあたって大きな役割を果たしているのかを確認させてくれる。

一方、「生理の言語」と「在日朝鮮人語としての日本語」は同等の言語として考えるべきであるのかについては、議論の余地がある。なぜなら、「生理の言語」には、先述したように言語だけでは説明できない空気感、雰囲気もふくまれるという特性を持つからである。そして何よりも金時鐘自らが「生理の言語」という言語のカテゴリーを区分して使い、「在日朝鮮人語としての日本語」とは違う文脈で言及していることにも留意しなければならない。このことから本稿では、「生理の言語」を「在日朝鮮人語としての日本語」と切り離して捉え、金時鐘の「生理の言語」がいかなる言語であるのかを検討する。

金時鐘が言及する「生理の言語」は、大きく2つに分類することができる。1つ目は、金時鐘の個人的な体験にもとづく「生理の言語」である。第1章の第2節でも述べたように、皇国少年であった金時鐘を朝鮮人として蘇らせたのは、自身の父親が幼少期に唄っていた朝鮮語版の「クレメンタインの歌」であり、この歌を「生理の言葉」と位置付けている。細見和之は、「クレメンタインの歌」について、祖父から孫にいたる三代の思いに関わる歌であると述べている¹⁰⁵。この言及は、「あの歌は私の父親が自分の父の父親、つまり私の祖父にむけて歌っていた歌かもしれないとも思えてね¹⁰⁶」という金時鐘の証言にもとづいている。

そして2つ目は、在日朝鮮人同士が共有し得る言語空間としての「生理の言語」である。これに関して、金時鐘は以下のように言及している。

「生理言語」とでも言うべきものの息づきがある。もちろん辞典を操って分かるような代物ではない。暮らしの伝承を共通して持ち合っている者同士がひびき合う、あの体ごとの了解のようなものだ。(…中略…) この関係のさ中であっては、ちょっとした言葉のきれはしでさえ特定の意味を描きだすことがあり、知らないはずの言葉までが、時として丸ごと通じてしまうことだって珍しくない。在日朝鮮人の語らいの多くは、このようにして蔵されている生理の中の言葉のような気がするのである¹⁰⁷。

¹⁰⁵ 細見和之、前掲『ディアスポラを生きる詩人金時鐘』8頁。

¹⁰⁶ 同上。

¹⁰⁷ 金時鐘、前掲『「在日」のはざままで』406頁。

このように、金時鐘は「生理の言語」を「言語」として意識的に教わるものではなく、知らぬ間に身につけている「暮らしの伝承を共通して持ち合わせている者同士」の間で成立する「体ごとの了解」であると述べている。

これに関し、金時鐘は「こぼれ話」として、「漬物」と聞いてキムチの酸っぱさを思い浮かべることや、「フトン」を「ウドン」と間違え、夜通し「ウドン」を所望し続けた話などを例にあげながら、以下のように述べている。

この手の話は「在日」の暮らしのなかにずいぶんとあるのだが、話の妙味が日、朝両語の、それも土着臭の強い地方語との兼ね合いのなかで醸されるものだけに、新しい世代たちが主座を占めるようになった今日の在日の実情からは、ますます遠のいてゆく受け手のないこぼれ話だ。それは日本語の領域での、在日朝鮮人語としての「日本語」の限界を差し出しているものである。いかに日本語を磨こうと、日本語の領域での日本語だけでは、とうてい記録にさえなりにくい未形の伝承なのだ。(…中略…) 共感の下地を共有するという点では、在日朝鮮人の可能性として生理言語といったものが考えられる¹⁰⁸。

このように、「生理の言語」とは、「日、朝両語の、それも土着臭の強い地方語との兼ね合いのなかで醸される」「言語」である。また、金時鐘は「生理の言語」が在日朝鮮人同士の「共感の下地を共有する」「言語」であることを指摘しながら、今日の新しい世代の人々には「生理言語」が通じない状況になりつつあると吐露している。つまり、1990年代後半の時点で、金時鐘は、在日朝鮮人の人々の間で培ってきた「生理の言語」が新しい時代には次第に通じなくなっているという感覚を持ち、「生理の言語」の消滅を危惧していたのである。

以上のように、「生理の言語」は、日本語でも朝鮮語でもなく、作中から特定の箇所をとりあげて説明することは難しい。言うなれば、作品から醸し出ている言語空間である。金時鐘は、この言語空間を朝鮮語のカタカナ表記を使用することによって作り出した。次に、金時鐘がどのように作中で朝鮮語のカタカナ表記を使用しながら、「生理の言語」をいかに表現したのかについてみていく。

第2節 朝鮮語のカタカナ表記

金時鐘は、「生理の言語」を作中で表現する試みの一つとして、朝鮮語のカタカナ表記を取り入れた。その方法は、朝鮮語の読み方をそのままカタカナで表記するものである。また、場合によっては朝鮮語訛りのある日本語を表現する場合にカタカナ表記が用いられるもある。前章の第2節でも述べたように、金素雲も朝鮮詩の翻訳を行う際、巧妙な日本語を使い

¹⁰⁸ 金時鐘「こぼれた話」『草むらの時』海風社、1997年、338～339頁。

ながらも朝鮮語のカタカナ表記を使用する形で朝鮮の要素を取り入れた。ここでは、金時鐘の作中の朝鮮語のカタカナ表記に注目することによって、金時鐘がいかに関朝鮮語を日本語の作中で書き表し、「生理の言語」の空間を作り出そうとしたのかについて考察する。

ここでは、『猪飼野詩集¹⁰⁹』、『空と風と星と詩』、『失くした季節』をとりあげる。これらの詩集を選定した理由については以下の通りである。まず『猪飼野詩集』は、金時鐘の詩集の中でも朝鮮語のカタカナ表記が多く、その特徴が最も表れている詩集であるからである。次に、『空と風と星と詩』は、朝鮮語から日本語への翻訳不可能な表現をカタカナ表記している点が見受けられるからである。最後の『失くした季節』は、朝鮮近代詩の翻訳作業と同時並行に書かれたために、朝鮮語の影響を見出すことができるからである。

(1) 『猪飼野詩集』(1978)

金時鐘の第4詩集『猪飼野詩集』(1978)は、在日朝鮮人季刊誌『季刊三千里』に連載された作品を基にして編まれた。『猪飼野詩集』には、在日朝鮮人の集落である猪飼野における在日朝鮮人の日常生活が描かれている。詩集には、全24篇の作品が収録されており、作中における朝鮮語のカタカナ表記は51か所ある。以下の〈表1〉は、『猪飼野詩集』における朝鮮語のカタカナ表記を整理したものである。なお、重なる詩語については省略している。

〈表1〉『猪飼野詩集』(1978)における朝鮮語のカタカナ表記

題目	カタカナ表記
「うた ふたつ」	イカイノ、 ^{マンギョンボン} 万景峰、オクスニ、チマチョゴリ、 ^{クムスサン} 錦繡山 民主首都
「寒ぼら」	ヨボ、 ^{チネ} 鎮海
「日日の深みで(2)」	ヨンジおばさん、ケイアイスル
「朝鮮瓦報」	^ホ 胡おじいさん、 ^{ホン} 洪さん
「イカイノ トケビ」	ニホン、 ^{ケイハンゼエ} チョウセン、 ^{トンマルギ} 軽犯罪、周衣、ウエハラさん
「果てる在日(1)」	ジョンスニ、 ^{チョーセン} チョーセン
「果てる在日(2)」	ハナニム!、 ^{チュグム} 死、 ^{バク} 朴の実、 ^{チョルヒョ} テンギ、 ^{オジャ} 哲顕なア、五子やア
「果てる在日(3)」	^{サクソニヤ} 多身銃
「いぶる」	^{ブルヨ} 火華、 ^{バンハ} 焼畑
「それでも その日が すべての日」	アパ、オンマ、ハッキョウ、 ^{ウリハッキョ} 民族学校
「イルボン サリ」	^{チョッチェサ} 初祭祀、 ^{インジェクション} 射出成型機、 ^{チェス} 祭需、 ^{イルボン サリ} 日本暮らし
「夜」	^{クギン} 棘人

¹⁰⁹ 金時鐘『猪飼野詩集』東京新聞出版局、1978年。その後2013年に岩波書店から文庫本として発刊された。では本稿では2013年版を底本とする。

上記の通り、『猪飼野詩集』では、多様な朝鮮語のカタカナ表記がみられ、金時鐘の詩集の中で最も多い。また、直接作品の本文で表現する箇所が多いこと、朝鮮語だけではなく一部の日本語のカタカナ表記もなされていることが特徴的である。『猪飼野詩集』に朝鮮語のカタカナ表記が多い理由は、いくつか考えられる。

まずは、金芝河から影響を受けたということがあげられる。『猪飼野詩集』の作品は『三千里』の創刊号から連載されたのだが、創刊号では金芝河特集が組まれていた。また、『猪飼野詩集』の作品「朝鮮瓦報」の中にも金芝河について書かれている箇所が存在する。『三千里』で金芝河特集が組まれた当時、金芝河は長編詩『五賊』(1970)を発表した。この『五賊』の大きな特徴は、漢字を用いながら当て字やルビふることによって言葉遊びをしながら、辛辣な社会風刺のメッセージを打ち出したという点である。それと同様、『猪飼野詩集』にも諷刺、詩のリズム感が重要視されていることから、金芝河からの影響を少なからずとも受けたのではないかと考えられる¹¹⁰。

次に朝鮮語のカタカナ表記が多い理由としては、日本語で訳し切れない詩語が多くあったことがあげられる。在日朝鮮人の生活に密着した内容であることから、固有名詞や在日朝鮮人にしかない習慣の名称は日本語訳することが不可能であったと考えられる。それに加え、よりリアルな在日朝鮮人の実態を伝えるために効果的に朝鮮語と日本語を織り交ぜた形式をあえて選択したことも推測できる。

(2) 『空と風と星と詩』(2004)

金時鐘による尹東柱の翻訳詩集『空と風と星と詩』では、朝鮮語のカタカナ表記はどのようになされているのだろうか。『空と風と星と詩』は、『空と風と星と詩』の全19編と、『空と風と星と詩』以外の作品の全47編の2部で構成されているが、ここでは前者のみを対象とする。作中における朝鮮語のカタカナ表記は10か所ある。該当箇所は、以下の以下の<表2>の通りである。カタカナ表記と括弧の中にはそれに該当する原文を記す。

<表2> 『空と風と星と詩』(2004)における朝鮮語のカタカナ表記¹¹¹

題目	カタカナ表記(原文)
「少年」、「雪降る地図」	順伊 <small>スンイ</small>
「悲しい一族」	コムシン(고무신)、チョゴリ(저고리)、チマ(치마)
「星をかぞえる夜」	オモニ(어머니)、佩 <small>ヘ</small> 、鏡 <small>キョング</small> (鏡)、玉 <small>オク</small> 、北間島 <small>ブツカンド</small>

¹¹⁰ 金時鐘『猪飼野詩集』と金芝河の影響関係に関しては、権保慶「金時鐘における民衆と諷刺：一九七〇年代の金芝河との関連をめぐって」(『朝鮮学報』第240輯、2016年、41～70頁)を参照。

¹¹¹ 本稿では、2012年版を底本とする。

この<表 2>から分かるように、『空と風と星と詩』における朝鮮語のカタカナ表記は、固有名詞のみに留まっており、「悲しい一族」の例を除き、全てが漢字で書かれた名前と地名に、朝鮮語のカタカナの読み方をルビとして記したものである。『空と風と星と詩』は、朝鮮語の原文があるにもかかわらず、『猪飼野詩集』と比べると朝鮮語のカタカナ表記は圧倒的に少ない。

また、注目すべきは、「별헤는 밤 (星をかぞえる夜)」で、「어머니」を「オモニ」、「어머님」を「お母さん」と訳し分けていることである。以下は、尹東柱「星をかぞえる夜」の原文と金時鐘訳における該当する箇所である。下線部は筆者による。

尹東柱「별헤는 밤 ¹¹² 」	金時鐘「星をかぞえる夜 ¹¹³ 」
(...생략...)	(...省略...)
별하나에 追憶과	星ひとつに追憶と
별하나에 사랑과	星ひとつに愛と
별하나에 쓸쓸함과	星ひとつにわびしさと
별하나에 憧憬과	星ひとつに憧れと
별하나에 詩와	星ひとつに詩と
별하나에 <u>어머니, 어머니,</u>	星ひとつに <u>オモニ, オモニ,</u>
<u>어머님</u> , 나는 별하나에 아름답은 말	<u>お母さん</u> , 私は星ひとつに美しい言葉をひ
한마디씩 불러봅니다.	とつずつ唱えてみます。
(...중략...)	(...中略...)
<u>어머님</u> ,	<u>お母さん</u> ,
그리고 당신은 멀리 北間島에 계십니다.	そしてあなたは遠く北間島 <small>フツカランド</small> におられます。

上記のように、金時鐘は、「어머니」を「オモニ」と訳し朝鮮語の読みをカタカナで表した。一方、「어머님」を「お母さん」と訳した。さらに金時鐘は、作中「オモニ」に注付け、「オモニ＝お母さん」と説明している。このことから、1つの詩語でも朝鮮語と日本語を組み合わせながら読み手に複数の情報を与える工夫を施していることが分かる。

(3) 『失くした季節』(2010)

最後に、2010年に発表された金時鐘の第7詩集『失くした季節』における朝鮮語のカタカナ表記についてみてみよう。『失くした季節』には、在日朝鮮人の日常生活や金時鐘の済州4・3体験が描かれた作品も存在する。『失くした季節』には全32篇の作品が収められているが、朝鮮語のカタカナ表記は12か所ある。<表 3>は、『失くした季節』における朝鮮

¹¹² 윤동주 『하늘과 바람과 별과 시』 서울: 소와다리, 2016년, pp. 38~41.

¹¹³ 尹東柱著、金時鐘訳、前掲『尹東柱詩集 空と風と星と詩』31~34頁。

語のカタカナ表記である。

<表 3> 『失くした季節』(2010) における朝鮮語のカタカナ表記

題目	カタカナ表記
「失くした季節」	六・二五、 <small>ギムオク</small> 金億、 <small>カンチョンジュン</small> 姜処重
「伝説異聞」	セットン
「こんなにも離れてしまって」	<small>アンジョンファン</small> 安貞桓
「 <small>つぼくら</small> 空隙」	ホトケェーホトケェー
「つながる」	ヨン様
「春に来なくなったものたち」	キキョウ、キンラン、フデリンドウ、オギョウ、ワラビ

<表 3>から分かるように、朝鮮語のカタカナ表記はほとんどが固有名詞で用いられている。その中でも特に注目すべきは、「空隙」の「ホトケェーホトケェー」である。これは、以下のような場面で出てくる。

ついにそぐうことなく／半可な国訛りで老いてしまった／集落止まりの日陰の日本語よ。／ホトケェーホトケェー／かまわないでと言ったのか／ホトケさまァ、と叫んでいたのか。／施設の車に載せられるあいだ／老婆は絶えだえに身もだえたのだ。／そもその初めから／言葉は異様な抑揚の反復だった¹¹⁴。

この場面は、コリアタウンの近辺で起こった出来事であると書かれていることから、「半可な国訛りで老いてしまった」「老婆」とは、在日朝鮮人一世であると考えられる。そして、「老婆」が発した「ホトケェーホトケェー」という言葉は、朝鮮語「訛り」を含んだ日本語の「放っておけ」と、「仏」の意味を持つ可能性があることが示唆されている。この「老婆」が発する「集落止まりの日陰の日本語」、すなわち「在日朝鮮人語としての日本語」を表現するために金時鐘はカタカナ表記を用いたのである。

以上のように、『猪飼野詩集』では、朝鮮語のカタカナ表記を行いながら、在日朝鮮人の人々の間で使われている「生理の言語」を実践したことが見受けられた。次の『空と風と星と詩』では、朝鮮語表記をそのまま活かしている箇所が少ないことが分かった。それでも、同じ詩語でも朝鮮語のカタカナ表記と日本語を合わせることによって、朝鮮語の要素を表現しようとしたことが伺えた。そして最後の『失くした季節』では、「ホトケェー」ように、在日朝鮮人が話す朝鮮語訛りの日本語をカタカナ表記によって伝えようとしたことを確認した。

¹¹⁴ 金時鐘、前掲『失くした季節』112頁。

このように、金時鐘は日本語の作品の中に朝鮮語のカタカナ表記を用いることによって、在日朝鮮人が使用する日本語、朝鮮語、「在日朝鮮人語としての日本語」が混ざっている言言語空間を可視化させた。朝鮮語のカタカナ表記は、単なる朝鮮語の読み方の表記ではなく、在日朝鮮人が実際に使用する生きた言語感覚を文字化したものであり、その根底に存在するのが、「生理の言語」なのである。

第3節 「献詩」(2022)における「生理の言語」

金時鐘の言語観において、「生理の言語」の存在は2000年以降次第に大きくなっていく。2022年に発表された「献詩」には、「生理の言語」が詩語として用いられながら説明されている。そこで、「献詩」において「生理の言語」がどのように描かれているのかについてみていく¹¹⁵。

2022年5月、金時鐘の作品「献詩」が刻まれた「共生の碑」が大阪市生野区にある御幸通商店街(以下、大阪 코리아タウン)に設立予定の大阪 코리아タウン歴史資料館の前に建立された。これは、初めての金時鐘の詩碑であり、大阪 코리아タウン歴史資料館の設立に合わせ、一般社団法人大阪 코리아タウンから金時鐘に「共生の碑」に寄せた作品を書いてほしいと依頼したことが背景にある。2022年5月14日には「共生の碑」の除幕式が執り行われ、「献詩」は初めて公の場で発表された。「献詩」は、第4連42行で構成される作品である。「献詩」には、在日朝鮮人が作り上げた集落である「猪飼野」の昔の姿から現在に至るまでの観光客で賑わう大阪 코리아タウンの姿、未来に向けた人々の「共生」の願いが描かれている。

そして「献詩」の第3連では、「生理の言語」が登場する。そこには、在日朝鮮人の「先人」が「在所でなじんだ」「おしんこ」や「祭祀」のような「在所でなじんだ風俗」が、「言語」では表すことのできない「物言わぬ生理の言語」として受け継がれ、「心の奥の語り」となったことが書かれている。作中の「おしんこ」は、キムチを表し、「祭祀」は朝鮮半島式の法事であるチェサを表していると推測できる¹¹⁶。第3連の最後には、かつては在日朝鮮人のみで「伝承」された「キムチ」や「焼肉」文化が、今では日本の食文化として受け入れられるようになったという内容で締め括られている。

このように、金時鐘が「献詩」の作中で「生理の言語」についての説明を行なったということは、本作品における大きな特徴の一つである。なぜなら、金時鐘は、これまで「生理の言語」についてエッセー等の散文で言及することはあっても、作中で説明することはなかつ

¹¹⁵ これに関しては、岡崎享子、前掲「金時鐘の「生理の言語」と「在所」—『猪飼野詩集』(1978)から「献詩」(2022)へ—」を参照。

¹¹⁶ 金時鐘は、エッセーの中で「朝鮮人には漬物といえば、「キムチ」の味覚が働き、祭といえば、日本では異風景のはずのチェサ(祭祀)＝儒教にのっとった法事や季節祭＝がすっかりなじんだ習わしとなる」と述べている(金時鐘「世代に光を」前掲『「在日」のはざま』408頁)。

たからである。その背景には、「生理の言語」の存在を今一度確認し、その存在意義を再確認するという意図があったと考えられる。第3章で述べたように、金時鐘は新しい世代の在日朝鮮人には「生理の言語」が通じなくなってきていることを危惧していた。そのことから分かるように、金時鐘は、在日朝鮮人一世の立場から、「生理の言語」を共有するた一員として、いずれ無くなってしまふかもしれない「言語」を、今に生きる人々や後世の人々に伝える必要性を感じたことが伺える。

金時鐘が「生理の言語」の存在を伝えようとする心境は、筆者が直接金時鐘から聞いたインタビューの内容からも見受けられる。「共生の碑」の除幕式に先立ち、筆者は2022年4月20日に金時鐘宅にて、金時鐘本人から「献詩」に関する話を聞く機会を得た。そこには、『毎日新聞』の高尾具成記者が同席し、話しの一部は、2022年5月13日の『毎日新聞』夕刊の「特集ワイド：93歳金時鐘さん 大阪コリアタウンに献詩 異郷の在日、共生の本流願ひ 文化耕した知恵、先人への敬慕¹¹⁷」として紹介された。ここでは、筆者が聞いたインタビュー内容と高尾記者の記事を参考にしながら、金時鐘が語る「生理の言語」について検討する。

先に述べたように、金時鐘は「生理の言語」を成り立たせるものは、在日朝鮮人が日本で実践しながら受け継いできた「在所でなじんだ風俗」であると言及した。これに関連して、金時鐘本人は、具体的なエピソードを出しながら、「生理の言語」が持つ3つの性格について述べた。その1つ目は「悲しみを散らす」こと、2つ目は「比喩表現」であること、3つ目は「民族」や「同胞」の間で引き継がれるものであるということである。次に、これら3つの観点に基づきながらインタビューの内容について詳しくみていく。

金時鐘は、「生理の言語」について説明する際、「生理の言語」と在日朝鮮人による冠婚葬祭等の「風俗」を例に説明をした。これに関し、高尾記者は、記事の中で以下のようにまとめている。

（筆者追記：金時鐘は）辛苦に満ちた過去を振り返りながらも、「異郷」でもついえなかつた風習をいとおしく感じてきた。金さんは、朝鮮半島を「うちの国」と言い、文化をつないできた先人たちのかたくなさをたたえる。

一例として、悲しみを散らすようににぎやかな葬儀や法事を挙げる。ひそひそ話はいけないという礼儀や風習があるから、声高で粗野になる。出身地によってお供えもののあげ方が違うから、魚の頭を左にするか下にするかで年寄り同士が大騒動になる。「そんな様子を見つめながら、日本人たちはへきえきとしとるやろうから、改めなあいけんのになあと思ひながらも、じわーとまぶたが潤むんだよね。なけなしで日本に来たから、風習こそが金科玉条やねん。はいずって生きる中で、国の思い出というのは揺るがぬもんになつ

¹¹⁷ 「特集ワイド：93歳金時鐘さん 大阪コリアタウンに献詩 異郷の在日、共生の本流願ひ 文化耕した知恵、先人への敬慕」『毎日新聞』夕刊、2022年5月13日、夕刊2頁。

ここで注目すべきは、「悲しみを散らす」という金時鐘から発せられた言葉である。上の記事には書かれていないが、金時鐘は「悲しみを散らす」ことの例として、在日朝鮮人の葬式の一場面について述べた。葬式の時、亡くなった夫の妻が泣き叫び、線香一つをあげた後、すぐに来客の食事の用意をしなければならず、悲しむ暇もなかった時に、一人のおばさんがその妻に向かって冗談を言い、そこにいた人々の中で笑いがどっと起こるといった話であった。金時鐘は、「うちの国では、悲しみを一人で抱え込ませない」と述べた。このように、金時鐘は、深刻な厳しい状況の中でも笑いに変えることを「悲しみを散らす」と表現し、「悲しみを一人で抱え込ませない」在日朝鮮人同士のやりとりこそが「生理の言語」であると述べた。

続いて金時鐘は、「生理の言語」の例として、金時鐘は日本人と在日朝鮮人との赤ちゃんに対する「可愛い」という表現方法の違いについて話した。金時鐘によると、日本では可愛い赤ちゃんを見て「可愛い子やね」と言うが、「うちの国」では、赤ちゃんのほっぺたをつねりながら、「この出来損ないが！」と言うのだという。この表現は、日本における「目に入れても痛くない」と同じように、朝鮮では、「愛おしくてたまらない」という意味で使われるという。金時鐘は、「この出来損ないが！」という言葉が愛情の比喩表現であり、「かわいい」という言葉よりも優れた表現技法であると述べた。このような朝鮮の言い回しが、在日朝鮮人の生活空間においてもなお登場することが「生理」という現象であり、そこで紡がれる言葉が「生理の言語」であるのだ。

さらに、「献詩」には、カタカナで書かれている詩語が複数あることにも注目する。それは、「コリアン」、「コリアタウン」、「チョウセンジン」、「キムチ」である。その中でも、「キムチ」の「ム」が小さい文字で書かれていることに着目する。これに関し、高尾記者は、記事の中で以下のように書いている。

詩には象徴的な単語が出てくる。「キムチって書くとキムチ(気持ち)悪くなるでしょ」と、「ム」の字を小さくしたこだわりや誇りを冗談めかす。そして、在日社会に連なる継承の奥深さを強調する。世代を重ね、在日の中にも韓国語を話せない同胞も増えた。だが、言葉を超えた両親、祖父母のやりとりが身に染みついているという。「暮らしの伝承を持ち合わせている者同士、通じ合ってきた体ごと承された感覚があります。それを『生理言語』と表現したんです¹¹⁹」

上の引用にあるように、金時鐘は「キムチ」と書くと気持ち悪くなると述べている。「キムチ」はハングルで「김치」(kim-chi)と2文字で表され、読み方は「kim-chi」の2音節

¹¹⁸ 同上。

¹¹⁹ 同上。

である。従来、朝鮮語では「キムチ」の「ム」は、パッチムと呼ばれる子音であるため独立した音を持たない。金時鐘が「キムチ」の「ム」を小さい文字で表現したのは、在日朝鮮人社会で代々伝えられてきた話し言葉、つまり朝鮮語の「김치」(kim-chi)に近い方法で日本語表記することを試みたのだ。そして金時鐘は、「キムチ」のような在日朝鮮人の中で代々で伝えられた言葉を「生理の言語」と説明した。最後に金時鐘は、「生理の言語」の例をいくつかあげた後、「生理の言語」が行き交う「風俗」や「風習」を持ち得ることが「民族」であり、それを共有する人々が「同胞」であると話した。

これらを踏まえた上で、「生理の言語」の特徴を整理すると、「生理の言語」とは、言葉にできないもの、すなわち「同胞」の生活の空気感や「風俗」等の世代を超えて受け継がれるものということである。その一方で、ある状況に対する風刺や比喻等の言葉や会話のやりとりでもある。それは、在日朝鮮人の人々が生きていく糧となるような言葉の表現である。それらの「生理の言語」に共通することは、「生理の言語」を話す者同士の関係性がより重要になるという点であり、「生理の言語」を共有する者の間で共通認識、共通理解を持てるかどうかは鍵となる。言葉を文字通りに理解するのではなく、生活習慣やある一定のルールで文字の背景や意図を理解することが求められているのである。

また、「生理の言語」は、時間、場所、イデオロギーの制約から自由であり、それらを乗り越える可能性を持つ言語である。前述したように、金時鐘には植え付けられた日本語や、そのために失われた朝鮮語の存在があった。それらは、植民地主義などの時代の情勢によって生まれたり消されたりしてきた言語であった。つまり、本人の意思とは関わりないところで使用言語が日本語になったり朝鮮語になったり左右されてきた。しかし、「生理の言語」は、時代や情勢に左右されることができず、身についた伝承が基にあるから、侵されることも忘れ去られることもない言語である。さらに言えば、在日朝鮮人だけが持つ言語ではなく、誰もがそれぞれの「生理の言語」を持ち得るのだ。

以上のように、金時鐘は2000年以降、「日本語への報復」の目的を持ちながら、植え付けられた日本語から脱し、「在日朝鮮人語としての日本語」を意図的に作り上げることを試みた。その際大きな役割を担ったのが、朝鮮近代詩の翻訳作業であった。金時鐘は、翻訳を通じて朝鮮語と出会い直し、向き合いながら、朝鮮語を日本語に取り入れることによって、植え付けられた日本語から抜け出す糸口を見出したのである。そして、もう一つ金時鐘にとって重要な言語といえるものが、幼少期から皮膚感覚を通して身に付いた「生理言語」である。「生理の言語」は、父母や周囲の人々から受け継いだ言葉である。「生理の言語」は日本語の制約を少しでも乗り越える可能性を持っている。「在日朝鮮人語としての日本語」は、朝鮮語と「生理の言語」に支えられているのである。

第Ⅱ部 『失くした季節』(2010)の作品分析

第4章 2000年の体験証言以前における済州4・3の記憶

第1節 濟州4・3体験についての証言

(1) 金時鐘の証言

金時鐘の来歴を考える際の重要な出来事であり、直接的な渡日の理由となった出来事が、濟州4・3である。2000年に定められた「濟州4・3事件真相究明及び犠牲者名誉回復に関する特別法」は、濟州4・3を「1947年3月1日を起点とし、1948年4月3日に発生した騒擾事態及び1954年9月21日まで濟州道で発生した武力衝突と鎮圧過程において住民が犠牲になった事件」と定義している¹²⁰。

濟州島では、1947年3月1日に現在の濟州市にある觀徳庁で開かれた3・1節28周年を記念するための集会が開かれ、多くの島民たちが集まった。その際、軍政警察の騎馬隊が島民に向けて発砲したことにより十数名の死者を出した。この事件に対し、島民や左派勢力は米軍政警察への不満や反発が頂点に達した。そして、翌年の1948年4月3日に、左派勢力である南朝鮮労働党が漢拏山の頂上に烽火したことを合図に武装蜂起を起こした。南朝鮮労働党が武装蜂起を起こした目的は大きく2つあり、1つ目は、統一国家の建設のために朝鮮半島の南北分断を防ぐことであった。2つ目は、翌月に控えた南だけの政府のリーダーを選出するための単独選挙に反対するためであった。この武装蜂起後、米軍政警察の弾圧により、当時の島民人口の10分の1に当たる約2万5千人から3万人が犠牲になったと報告されている¹²¹。

濟州4・3が起こった1948年当時満20歳だった金時鐘は、南労党の党员になり、連絡員として活動していた。金時鐘は活動をする中で、1948年5月に郵便局事件に関わることになった。郵便局事件とは、従来中央郵便局の連絡員を担っていた2人の党员が、処刑されたことに対する復讐として、金時鐘ともう一人の党员が南労党の上からの命令で中央郵便局の爆破を実行しようとしたが、失敗に終わり、一緒に郵便局爆破を試みた仲間は、郵便局から逃げる事が出来ずに殺害され、金時鐘は生きたまま逃げる事ができたという出来事である。その結果、金時鐘は軍政警察から追われる身となり、何とか逃れるために1949年5月に濟州島を出発し、翌月6月に日本に到着した。

一方、濟州4・3が収束したのは1955年とされているが、長い間韓国において濟州4・3については公にされてこなかった。韓国政府が濟州4・3の真相究明を行おうとする動きが見られたのは、1987年の韓国民主化以降のことであった。この韓国における濟州4・3に関する動きに沿うように、金時鐘も濟州4・3に関する自身の体験を語り始め、作中にも直接的に描き始めるようになる。以下の<表4>は、2000年前後における日韓の濟州4・3をとりまく濟州4・3の動きに、金時鐘の活動内容を記したものである。

¹²⁰ 『濟州4・3事件真相調査報告書』濟州4・3真相究明及び名誉回復委員会、2003年、584頁。

¹²¹ 同上、555頁

<表 4>日韓における済州 4・3 に関する動向¹²²

韓国における済州 4・3 に関する動向	金時鐘の済州 4・3 に関する動向
1988 年 四・三事件反共遺族会発足	1987 年 「済州島四・三事件を考える会」が東京で発足。
1989 年 済州四・三研究所創設	
1993 年 道議会四・三特別委員会発足	
1994 年 済民新報済州四・三取材班『4・3 은 말한다(4・3 は語る)』が出版される(1998 年まで全 6 巻)。	1994 年 済民新報済州 4・3 取材班『4・3 은 말한다(4・3 は語る)』日本でも『済州島四・三事件』(新幹社)という題目で出版される。
1995 年 道議会、四・三被害者第 1 次報告書刊行	1996 年 金時鐘渡日後初の韓国訪問。
1999 年 「済州四・三事件の真相究明と名誉回復のための道民連帯」結成	1998 年 金時鐘渡日後初の済州島訪問。
2000 年 「四・三特別法」公布	1998 年 済州 4・3 事件 50 周年犠牲者慰霊祭が初めて大阪で開催される。
2003 年 「済州四・三事件真相調査報告書」が最終確定。盧武鉉前大統領が来島し、政府を代表して済州四・三の犠牲者遺族に謝罪	2000 年 金時鐘「済州島四・三事件 52 周年記念講演会」で済州 4・3 の体験について初めて公の場で証言する。
2006 年 済州市で第 1 次遺骨発掘事業開始	2003 年 金石範と金時鐘の対談実施。
2007 年 済州空港で第 2 次遺骨発掘事業開始	
2008 年 済州四・三平和記念館開館	
2011 年 四・三事件生存犠牲者および遺族への生活補助金支援開始	2010 年 金時鐘『失くした季節』発表。
2018 年 済州四・三追悼式に文在寅大統領参席し、謝罪	2018 年 金時鐘『背中の地図』発表、金時鐘「死者には時がない」発表、統国寺(大阪)に済州 4・3 犠牲者慰霊碑が建立される。
2022 年 「四・三特別法」改定、補償制度制定	

上の<表 4>が示しているように、2000 年の金大中政権下には、「四・三特別法」が公布され、「済州四・三事件真相糾明および犠牲者名誉回復委員会」が設立され、済州 4・3 の真相究明を政府が積極的に行う体制が整った¹²³。そして 2003 年には、調査結果について書か

¹²² 韓国における済州 4・3 の動向については、文京洙『済州島四・三事件』(岩波書店、2018)に掲載されている年表を参照した。

¹²³ 文京洙、前掲『済州島四・三事件：「島^{ダムナ}のくに」の死と再生の物語』187～189 頁。

れた『済州四・三事件真相調査報告書』が確定され、同年には、盧武鉉前大統領が韓国政府を代表して済州4・3の犠牲者遺族に対し謝罪を行った¹²⁴。このように、2000年以降、韓国国内では済州4・3についての真相究明を進める動きや、犠牲者やその遺族が少しずつ自身の体験を開けるような動きが徐々に見え始めたのである。

このような韓国における動向と重なるように、金時鐘は、1998年に渡日後初めて済州島を訪問し¹²⁵、その2年後の2000年4月15日に東京都千代田区のスペースY文化センターにて開催された「済州島四・三事件52周年記念講演会」において初めて公の場で自身の済州4・3の体験について語った¹²⁶。それを契機に、金時鐘は済州4・3を作品に書くことはもちろんのこと、自らの回想録である『朝鮮と日本に生きる』(2015)において済州4・3体験を具体的に書いている。例えば、2000年以降、初めて発表された金時鐘の第7詩集『失くした季節』(2010)には、済州4・3の記憶が直接的に描かれている。その次に発表された第8詩集『背中の地図』(2018)は、東日本大震災をテーマに編まれた詩集であるにもかかわらず、そこにもやはり済州4・3の体験が刻まれている。その他にも、済州4・3事件の70周年にあたる2018年には、済州4・3をテーマにした「死者には時がない」という作品を発表した。

さらに、文学活動以外にも済州4・3に関する動きが見られる。例えば、金時鐘は2014年に、長崎県対馬における済州4・3慰霊祭を執り行う必要性を訴え、2018年にその慰霊祭が実現した。金時鐘は自らが慰霊祭実行委員長となり、当日には犠牲者や参列者に対し追悼の辞を述べている。このように、金時鐘が済州4・3について直接的に行動し始めたのは2000年以降の金時鐘文学における大きな特徴である。ここから分かるように、2000年における済州4・3体験証言は、金時鐘にとって済州4・3の関わりを明らかにさせるだけでなく、済州島との関係性を新たに築く重要なきっかけにもなった。

この体験証言の記録は、「記憶せよ、和合せよ」という題目の記事として『図書新聞』に掲載されている。金時鐘の語りは、済州4・3当時の体験とそれを抱えたままようやく打ち明けることができた証言当時の心境が交互に語られている。記事には、10つの小見出しが付けられている。それらを整理したものが、以下の<表5>である。

<表5>金時鐘「記憶せよ、和合せよ」の小見出し

見出し番号	見出しタイトル
①	五〇年以上も語らずにきた四・三事件
②	突然「これがお前の国だ」と
③	これが私の植民地だった
④	地獄を目の当たりにして

¹²⁴ 同上、190頁。

¹²⁵ 金時鐘「年譜」前掲『朝鮮と日本に生きる—済州島から猪飼野へ』292頁。

¹²⁶ 金時鐘、前掲「記憶せよ、和合せよ」『図書新聞』1～2頁。

⑤	立ったまま地の底へめり込むような失落感
⑥	問題が熾烈化する四六年夏
⑦	郵便局事件
⑧	「 ^{バルゲンイ} 赤どもが親父を殺したんだ」
⑨	四・三事件とは何だったのか
⑩	五〇年ぶりに濟州島を訪れて

まず、金時鐘は小見出し①で、「少なくとも酷な役目を、私は今日この場で担っています。私のこれからしようと思う話は、何とも気の重い、映えない記憶の語りです¹²⁷」と述べ、現在に至るまで濟州4・3を語るができなかった理由について、以下のように説明している。

これまで日本に来て五〇年余り、四・三事件との関わりについて、私は表だって発言したことはありません。(…中略…)私は何故、五〇年以上も四・三事件について語らずに来たのか。生理感覚的に、濟州島の四・三事件にからんだ記憶が、私の胸の奥底ですっかりぎざぎざのまま凝固してしまっ、まずは濟州島を思い返したくないという思いがどうしても働いてしまうんです¹²⁸。

続いて金時鐘は、小見出し②において、「四・三事件の起点となった一九四七年三月一日の三・一事件、つまり觀徳亭広場まえの殖産銀行の石段に四、五名の射殺隊が倒れたと言う、その現場に私はおりました¹²⁹」と濟州4・3の発端となった事件の現場に居合わせていたと証言している。それに続き、「三・一事件の翌日、私は当時朝鮮人民委員会青年部の文化関係の仕事をしていましたが、その後党员拡張運動もあって、南朝鮮労働党の党员候補として入党¹³⁰」し、南労党の連絡係として活動する過程の中で追われる身となり渡日したことも証言している。

小見出し①の証言に至るまでの心境にも表れているように、金時鐘にとって濟州4・3の記憶とは、「胸の奥底で」「ぎざぎざのまま凝固」してしまっている「記憶」であった。そして小見出し④では、その現場を次のように「地獄」と表している。

地獄を目の当たりにして、日本に来てからもずっと、悪夢からは覚めやらない年月が続きました。夢をみること、いつもそのような夢です。いつでも、逃げを打ったりする夢、

¹²⁷ 金時鐘、前掲「記憶せよ、和合せよ」『図書新聞』1頁。

¹²⁸ 同上。

¹²⁹ 同上。

¹³⁰ 同上。

寝汗をかき夢です¹³¹。

濟州 4・3 は、渡日後も金時鐘も「悪夢」となり、月日経ち濟州島を離れても、生涯つきまとうトラウマとなった。

ところで、濟州 4・3 体験を公に語るができなかった理由について、金時鐘は以下のように話している。

濟州島四・三事件を圧殺した政権側は、共産党の奴らがしでかした共産暴動だといっています。共産党がしでかしたことですから、あれは法律に照らして圧殺されて、除去されるのである。すなわちしかるべきだというんですね。だが、実際に私は、末端の連絡員ではありましたが、南労党の党员としてその現場におったのです。私が口を開けば、民衆蜂起という正当さが損なわれるようで、いままで口を開くことができませんでした¹³²。

このように金時鐘は、濟州 4・3 の性格を「民衆蜂起」であったと主張している。しかし、南労党员であった金時鐘が濟州 4・3 に関わったことを証言すれば、韓国政府側が濟州 4・3 を「共産党の暴動」だと主張することの裏付けになってしまう可能性があった。そのことを金時鐘は恐れていたのである¹³³。

それでもかかわらず、2000 年に入り、金時鐘は濟州 4・3 体験を証言する決心をした。その背景には、金時鐘に濟州 4・3 について話してもらうよう説得した周囲の人々の尽力があった。それに加え、韓国の民主化が達成され、さらに金大中政権が発足したことによって、金時鐘が 1998 年に渡日後初めて濟州島を訪れることができたことが、金時鐘の気持ちに大きな変化をもたらした。金時鐘は、小見出し⑩において、その時の体験を以下のように話している。

金大中大統領の包容政策のおかげで、私は五〇年ぶりで一昨年濟州島を訪れ、父と母の墓を探しあてることができました。草むした小さい土饅頭でした。そして、四・三事件の災いを鎮めるために立てられた、火山岩を積み上げて造られた妨邪塔バンサタブに参りました。青く澄んだ空で、風が鳴っていました。その塔の積み石のすき間に小岩のいくつかを詰めながら、そのとき私ははっきりと聞きました。空耳ではありません。耳の底で私は聞いたので

¹³¹ 同上。

¹³² 同上、2 頁。

¹³³ 金時鐘は、2014 年のインタビュー録「詩が生成する時」の中でも、金時鐘は自分の妻にさえ濟州 4・3 について言えなかったと述べながら、その理由を 2 つあげている。1 つ目は、4・3 事件の南労党の党员であったことを打ち明けるといことによって、濟州 4・3 の正当性を揺るがしてしまう恐れがあることであった。2 つ目は、日本に密航してきたことが明らかとなり、出入国管理令に引っかかってしまうことであった（金時鐘、姜順喜「詩が生成する時」『論潮』第 6 号、論潮の会、2014 年、40 頁）。

す。「記憶せよ、和合せよ」と¹³⁴。

ここで金時鐘が済州島で聞いた「記憶せよ、和合せよ」とは、いかなる意味を持つのだろうか。このことを理解するためには、金時鐘にとって済州4・3がいかなる出来事であったのかを知る必要がある。済州4・3の始まりとなる4月3日の蜂起は、南労党員を中心とする済州島民の人々が朝鮮半島の分断への反発を大きな目的として行われた。その後、米軍政や軍警による島民への弾圧が強くなるが、その渦中において、金時鐘の母方のいとこの兄は、イカ釣りをしていたところ、特攻警備隊に虐殺された¹³⁵。その一方で、外戚の叔父が南労党側のゲリラに襲われて竹槍で処刑された。このことを金時鐘は、「私の味方たちによって、殺された」と吐露している¹³⁶。つまり、金時鐘の親戚の一方は軍警に殺され、もう一方はその反対勢力であるゲリラに殺されたのである。さらに、朝鮮半島勃発後に、特攻警察に殺されたいとこの兄の息子から金時鐘宛に手が届き、そこには「おじさん、お父さんを殺した敵が誰であるかがはっきりしました。赤どもが親父を殺したんだ¹³⁷」と書かれていたという¹³⁸。このような被害と加害が複雑に絡まり合っている状況は、済州4・3が村や家族の中に分断もたらしたといえるだろう。したがって、「記憶せよ、和合せよ」とは、済州4・3という悲劇を忘れることなく「記憶」し続けると同時に、済州4・3がもたらした様々な分断状況を乗り越え「和合」させるべきだというメッセージが込められているのである。

(2) 金石範との対談

2000年に済州4・3の体験告白を行った講演が開催された後、金時鐘の済州4・3体験をより深く聞く機会を設けるために、金時鐘と金石範との対談を行うことが計画された。金時鐘が2000年に至るまで済州4・3体験を語らなかつた一方、在日朝鮮人2世の作家である金石範は、『鴉の死』や『火山島¹³⁹』に代表される文学作品において、済州4・3について書き続けてきた¹⁴⁰。このような対照的な2人による対談が、2001年2月15日、16日に行われた。その対談の記録は、『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか¹⁴¹』に収録されて

¹³⁴ 金時鐘、前掲「記憶せよ、和合せよ」3頁。

¹³⁵ 同上、2頁。

¹³⁶ 同上。

¹³⁷ 同上。

¹³⁸ これに関し、金時鐘は、済州島によって命を落とした人の8割が軍警によって、残りの2割がゲリラによって殺されたと言及している(同上、3頁)。この割合は、2003年に韓国政府が発表した『済州4・3真相究明報告書』の結果とも一致している。

¹³⁹ 本稿では、金石範『火山島』第Ⅲ巻、文藝春秋、1983年を底本とする。

¹⁴⁰ これに関し、趙秀一は「虐殺の島となった済州島から多くの人々が生き延びるために旧宗主国である日本に密航してきたが、金石範は彼ら／彼女らに接することで、〈四・三〉を追体験した」と述べている(趙秀一『金石範の文学：死者と生者の声を紡ぐ』岩波書店、2022年、6頁)。

¹⁴¹ 金石範、金時鐘著、文京洙編、前掲『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか：済州島四・三事件の記憶と文学』。

いる。また、2015年には、新たな対談の内容を追記した増補版が発表された。

『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか』というタイトルは、金石範が体験していない済州4・3を描き続け、一方、済州4・3を体験した金時鐘が沈黙してきたことを意味する。対談では、進行役の文京洙が加わったことにより歴史的な観点から済州4・3が整理され、より詳細に当時の体験について語られている。様々なことが赤裸々に語られている背景には、金石範と金時鐘が同じ在日文学者として兄弟のように信頼し合う二人の関係性がある。2人の親密な関係性は、以下のやりとりからも伺うことができる。

金石範：時鐘、ここ二、三年で言いたいことみんな言ってしまえよ、そしたら目をつぶって、あの世へ逝けるよ。喋りたいことみな喋ってしまえよ（笑）。

金時鐘：こういう風に気楽に言ってるけどな（笑）。

金石範：ともかく喋らんといかんな、[心中に]あるものを¹⁴²。

このような会話に誘われて、金時鐘は南労党員としての活動から渡日するまでの体験を語り始めた。そして、金時鐘は自身の話をした後、金石範に「今度は、石範兄も喋りや¹⁴³」と話を振った。このように、対談は、二人にとって重い内容であったにもかかわらず、緊張感を持ちつつも笑いを交えながら本音で話そうという姿勢が伺える。

こうした雰囲気の中で、金時鐘はなぜ済州4・3が書くことができなかつたのかについて以下のように述べた。

石範兄は四〇年かけて四・三にこだわって書いてますが、僕は書けなかつた。むしろその記憶から離れようとしてきた。こと四・三に関わつたものは書けなかつたですね。それは、まずは、済州島という自分の育つたところが一番困難な時期、その困難さを誘引したとも言えなくはない側の末端の一人であつたにもかかわらず逃げを打つた、その逃亡者意識が負目となって、書くことより、行為の方が絶対的な使命となりましたね（…中略…）それと、言葉というのは圧倒する事実の前ではまったくの無力なものです。（…中略…）記憶というのが、ひと糸の糸すじのようなものだったら引きずり出して巻きとっていけるのにね、思い起こそうとすると固まりのまま、わっと押しあがってくるから、言葉にならない。言葉に関わりながら、言葉にしようがない¹⁴⁴。

このように金時鐘は、済州4・3が最も困難であつた時期に済州島を離れ日本へと「逃げを打つた」ことが「負目」になったと話している。このような自責の念に加え、そもそも済州4・3については書きたくても言語化できなかつたと述べている。

¹⁴² 同上、105頁。

¹⁴³ 同上、175頁。

¹⁴⁴ 同上、166～167頁。

一方、金石範も自身にとっての済州4・3とは何であるのかについて、以下のように述べている。

よく耐えてきたよ、時鐘は。一人で黙って。私にとっての現実の四・三は、骨をみたことでしかないが、身近に時鐘という「現物」がいるわけだ。最近になっていろんなことを話すようになったけどね、いつか、東京の追悼集会で時鐘が講演をして、途中で泣き出して話ができなくなったことがあったやろ。講演会としては失敗やったけど、あれが「現物」の四・三なんだよ。ちゃんと話せるようなものじゃない。生きているのよ、四・三が。骨じゃないんじや。私の場合は、現場にいないで帰ってきた。やはり私は見物人、部外者なんだよ¹⁴⁵。

ここで金石範が言及する「骨」とは、2000年以降の済州島における済州4・3の犠牲者の遺骨発掘作業に実際に立ち会って目撃した「骨」を意味する¹⁴⁶。金石範は、日本で生まれ育った在日朝鮮人二世であり、済州4・3を体験していないため、自らの済州4・3に対する立ち位置を「見物人」や「部外者」と位置づけている。それにもかかわらず、済州4・3をテーマに書くことができたのは、金時鐘という「現物」がいたからである。実際に、金石範は、「彼（金時鐘）が済州島でゲリラなんかしていた話は、その頃個人的には聞いたことがある。彼が作家だったら、時間がたったら書かずにはいられないだろう¹⁴⁷」とも述べている。このように金時鐘の済州4・3体験を直接聞いていたのだ。このように考えると、金石範は、済州4・3の体験を書くことができず、言語化すらできない状況にあった金時鐘の代わりに、体験を聞いた「部外者」の立場から創作や比喻を交えながら文学作品として書いたといえるのではないだろうか。なぜなら、金石範の『火山島』には実際に金時鐘の済州4・3での体験が土台になっている出来事が存在するからである。次に、『火山島』において金時鐘の体験がどのように描かれているのかについてみていく。

(3) 金石範『火山島』に描かれる金時鐘の体験

『火山島¹⁴⁸』は、済州4・3をテーマとした全7巻からなる長編小説である。火山島であ

¹⁴⁵ 同上、215頁。

¹⁴⁶ 金石範「私は見た、四・三虐殺の遺骸たちを」済州島四・三事件を考える会・東京編『記憶と真実：済州島四・三事件：資料集：済州島四・三事件60年を越えて』新幹社、2010年、44～62頁。

¹⁴⁷ 同上、141頁。

¹⁴⁸ 金石範は、1976年から1981年に『火山島』の前身となる「海嘯」（第1章～第9章）を『文学会』に発表した。そこに追記と題目の変更を施し、1983年に『火山島』第I巻～第III巻（全12章）として発刊された。その後、1986～1994年に続編「火山島」を『文学会』に発表し、1996年から1997年にかけて単行本『火山島』第IV巻～VII巻（第13～第28章）が発刊された（趙秀一『金石範の文学：死者と生者の声を紡ぐ』岩波書店、2022年）。

る濟州島で起こった濟州 4・3 下における当時の濟州島、ソウル、日本の状況が描かれている。

『火山島』には、金時鐘の濟州 4・3 体験をもとにして書かれたと思われるエピソードが登場する。なぜなら、そのエピソードは、2000 年以降の金時鐘の濟州 4・3 体験証言で語られた出来事の詳細と合致するからである。その出来事とは、濟州島の当時の中心地にある觀徳亭広場横の中央郵便局で起こった出来事、すなわち金時鐘が言及した「郵便局事件」である。金時鐘は「郵便局事件」に関わった当事者であり、これが原因で軍警から追われる身となり渡日することになった。ここでは、金時鐘の体験証言と『火山島』の内容を照らし合わせながら、「郵便局事件」について考察する。

まず、金時鐘が実際に体験した「郵便局事件」に関する証言をみていく。金時鐘は、2000 年の体験証言の際に初めて「郵便局事件」について詳細を話した。その後、2016 年に発表した回顧録『朝鮮と日本を生きる』においてもそのことに言及している。その事件は 1948 年 5 月末に起こったが、経緯は次の通りである。金時鐘が中央郵便局¹⁴⁹での連絡係をしていた南労党員 2 名が軍警に処刑された。そのことに対する報復として、南労党の上層部から金時鐘と党員 H に郵便局の郵便物を火炎瓶で爆破する命令が下された。当時金時鐘は、濟州島学務課の嘱託として教員養成書の事務係を担っていたこともあり、中央郵便局の出入りをよくしていた。その傍で南労党の連絡員として働いた金時鐘は、郵便局爆破計画の役目に抜擢されたのである¹⁵⁰。

金時鐘は H に火炎瓶を渡す役目で、H がその爆弾に火をつけて投げつけるという役目であった。以下は、金時鐘が「郵便局事件」について述べた箇所である。下線部は筆者による。

私と入れ違いに、火炎瓶を投げつける役目の H 君 が切手を買おうと言って入ってきます。(…中略…) 彼は火炎瓶の包みを差上げたまま、訳もわからぬ声で絶叫したものですから、局内にいた警備の警官がカービン銃を構えて駆けよってきました。逃げながら力なく放った火炎瓶はさほどの発火もせず、白い煙と臭いだけが立ちこめました。彼は一番奥のドアを走りながら押し出て、真ん中のドアは体をぶつけて表のドアにとりすがるように、さかんに叩いていました。引かなければ出られないのに、必死に押ししているのです。それこそぶし大に見開いたあの真っ白い H の眼が、まざまざと私の脳裡に焼き付きました。追ってきた警官が至近距離からカービン銃を連射し、後頭部をふき飛ばされた H はそのドアにしがみついたまま絶命しました¹⁵¹。

¹⁴⁹ この中央郵便局とは、当時の濟州島の中心街にある島で一番大きな規模であり、すぐ隣には刑務所と濟州 4・3 の起点となる 3・1 独立運動記念式典が行われた現場である觀徳庁がある。金時鐘の生家は中央郵便局の北側のすぐ後ろに位置し、出身中学である北小学校も数十メートル先の北側に位置する。つまり、金時鐘の生まれ育った場所は、濟州島の繁華街であり、南労党や軍警が活動する中心部であったということである。

¹⁵⁰ 金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる』223～224 頁。

¹⁵¹ 同上、225～226 頁。

こうして「郵便局事件」は、失敗に終わった。金時鐘は現場から逃げることができたもののその後は追われる身に、党员Hは郵便局からの逃走に失敗し、警察官に撃ち殺された。以上が、金時鐘が体験した「郵便局事件」の詳細である。

次に、『火山島』における郵便局事件の記述をみてみよう。「郵便局事件」についての叙述は、『火山島』第Ⅲ巻の第10章に描かれている。以下の〈表6〉は、『火山島』第Ⅲ巻における郵便局事件の場面を要約したものである。

〈表6〉『火山島』第Ⅲ巻における郵便局事件の場面

場面	内容	頁数
郵便局事件の場面①	主人公の李芳根が中央郵便局で事件を目撃する。	369～372 頁
事件後の場面①	ソウルから帰ってきた李芳根が梁俊午と会い、梁俊午が郵便局事件の話題をする。	456～457 頁
事件後の場面②	李芳根が妹をソウルへ送り出した後、北小学校付近で梁俊午と会い郵便局事件の青年の話を梁俊午が切り出す。	522～523 頁

ここでは、郵便局事件の場面①の郵便局事件当日に起こった出来事の描写に焦点を当てる。『火山島』の主人公である李芳根は、観徳亭の横に位置する郵便局に着いた時に、郵便局の中から逃げようとする少年2人を目撃する。そこからから郵便局事件の描写は始まる。以下は、それに該当する箇所である。下線部は筆者による。

「あけてくれ！どける！」／聞こえはしないが、たしかに若者はそう叫んでいた。／「バカ野郎、そこをどくんだ！早く、戸は外すから押すんだ、どけ、どけ、早くどくんだ！」／ガラスに遮られて互いの声が聞きとれない。外側の若者は扉の真ん中の木枠に体当たりをしながら内側へ押し開こうとするのだが、相手はその反動でいっそう必死になって押し返してくる。内側の若者はもう慌てふためいていて、郵便局の扉が外から内側へ押し開かれるようになっているのを忘れてしまっているのだ。凄まじい、同時に歯がゆいまでにバカバカしい、そして見ていながらどうともならない、針一本突き刺す瞬間もない一瞬だった。と、そのとき、後ろから走ってきた一人の男の打ち下す棍棒の一撃が若者の頭の上で炸裂するのが、ガラス越しに見えた。若者の悲鳴。二、三度棍棒が撃ち落される。キヤーッと叫ぶ女の悲鳴がガラスを貫いて聞こえてきた¹⁵²。

ここで描写されている郵便局から逃げようとする少年二人の行動は、上の金時鐘が証言

¹⁵² 金石範、前掲『火山島』第Ⅲ巻、369～370 頁。

する「郵便局事件」の内容と重なる。また、『火山島』では、郵便局から逃げた若者が、警察に追われる身となった末に渡日したことが書かれている。したがって、「外側の若者」＝郵便局から逃げ切った若者は、金時鐘であり、「内側の若者」＝郵便局から逃げきれなかった若者は、金時鐘が証言する少年Hであると推測できる。ここからも分かるように、『火山島』において、「郵便局事件」は、主人公である李芳根が事件の現場に偶然に遭遇し、事件の一部である少年たちが逃げるところを目撃するという設定で描かれているのである。李芳根は少年たちを目撃した後、郵便局員から少年2人が逃げる前の経緯について聞き、そこで少年2人が5・10 単選決死反対と叫びながらビラの束を天井に向けてまいたことを知るのである。この一連の出来事後、李芳根は自宅に帰ってからも落ち着かず、「もう一人の若者」は残された仲間の顔の表情を忘れることができないだろうと心配しながら、若者が済州島にはいられないことを案じていることが書かれている¹⁵³。

その一方で、引用文の下線で示しているように、金時鐘の体験証言と『火山島』における描写を比較すると、いくつかの相違点が見受けられる。まず、金時鐘の証言では、「H」が郵便物に「火炎瓶」を投げたという内容が、『火山島』では、「若者」が「ビラ」をまくという内容に置き換えられたという点である。次に、金時鐘の証言では、「H」が「警備の警官」によって「カービン銃」で銃殺されたという内容が、『火山島』では、「男」によって「若者」が「棍棒」で頭を割られたという内容に変更されたという点である。その他、金時鐘の証言にはなかったことが『火山島』には描かれている。少年事件最中の周囲の様子の詳細な描写、二人の会話や一連の動作、「外側の若者」＝金時鐘が、「内側の若者」＝「H」を助けようとしたという点、そこにいた一人の人物が、「外側の若者」に向かって「逃げろ！」と叫んだ点などである。このことから、金石範は金時鐘が体験した出来事を少しずつズラしながら、かつ事件当時の緊迫した様子を生々しく体感できるように物語化することを試みたことが分かる。

それでは、金時鐘は、金石範の『火山島』をどのように受け取ったのだろうか。金時鐘は、『火山島』について以下のように述べている。

石範兄の書かれた四・三事件に関わったものはいちいち読んでいますが、文学、創作されるものとね、実体験との間にはどこか隙間がいつもあって、最も身近な先輩の作品なのに、どこかそぐわない。ものを書くことで表現する者としては自己を否定するところからしか書き出せないのですから、全く論拠を持たないことなんですけど、それでも圧倒する事実が記憶となって居座っている者には、創作作品そのものが何かの操作みたいに映っちゃうのね。実際は、創作こそが、つまり虚構こそが事実を超えうるし、事実をより普遍

¹⁵³ <表6>の郵便局事件後の場面①では、郵便局事件で逃げた若者が梁俊牛の親戚の家に身を隠していること、頭を割られて捕まった若者は道立病院で入院していることが書かれている。事件後の場面②では、逃げた若者が日本に渡ったことが書かれている。この2つの場面も金時鐘の体験と重なる。

的な事実として描きだせるものなんですけどね。分かっているながら自分の小さな体験に重きを置いてしまう。僕はかなり年数を重ねて『火山島』を読み継ぎながら整理がついていったんですけど、事実というのは個人にとって圧倒するものであっても、それは球面体の一点のシミみたいなものだと思う。真上からはそのシミが大写しになってすべてのようであるけど、角度がずれると見えないものでもある。だから事実が真実として存在するためには、その事実が想像力のなかで再生産されなくてはならない。それが客体化された事実、つまり文学なんだ¹⁵⁴。

上で述べられているように、金時鐘は『火山島』に描かれている内容に違和感を覚えたという。しかし、時が経つにつれ、『火山島』で描かれているような濟州4・3の個人的な体験は、濟州4・3全体を作り上げる「球面体の一点のシミ」と捉えることができると言及した。つまり、金時鐘は2001年の時点において、濟州4・3の体験を少しずつ客体化し、自身の体験を「シミ」としてとらえることができるようになったのである。それには、『火山島』でみられるような自身の体験を他者が代わりに文字化し、長編小説の物語の中の一つのエピソードとして書き直されたものを読むという一連の過程が大きな役割を果たしたと考えられる。金時鐘は、自身の体験を「個」の記憶としてのみならず、濟州4・3の「全体」の中の一つ体験として再確認することができたと考えられる。

以上のように、金時鐘は2000年に濟州4・3体験を公に証言し、金石範と対談することによってより多角的に濟州4・3を語り始めた。さらに、金石範の『火山島』における一部の描写と金時鐘の証言との比較分析から分かることは、金時鐘が沈黙してきた濟州4・3体験の一部を金石範は既に1980年代から文学作品の中で書いてきたということである。それは金時鐘に、自らの体験を客体化させ言語化することを促す役割を果たしたのである。

第2節 『地平線』(1955)と濟州4・3

(1) 『地平線』の制作背景

金時鐘は、2000年の濟州4・3の証言以降、自らの作品に濟州4・3体験を直接書き始めるようになった。しかし、それ以前の作品に濟州4・3が描かれていなかった訳ではない。2000年以前にも、金時鐘は自らの作品に濟州4・3体験を間接的に書いていた。これについて金時鐘は、初めて濟州4・3について書いた作品が1955年に雑誌『カリオン』に掲載された「わが性と命」であったと言及している¹⁵⁵。その後も、金時鐘は第1詩集『地平線』や第3詩集『新潟』において、濟州4・3を間接的、または断片的に書いている。これらの作品

¹⁵⁴ 金石範、金時鐘著、文京洙編、前掲『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか』168頁。

¹⁵⁵ 金時鐘「<インタビュー>至純な歳月ときを生きて-『日本風土記』から『日本風土記II』のころ-」『金時鐘コレクションII』藤原書店、2018年、322頁。

は、一見濟州4・3について書かれているようには読み取れないが、その後の金時鐘の証言と照らし合わせてみると、濟州4・3に関する内容が含まれていることが分かる。ここでは、1955年に発表された『地平線』において濟州4・3を描写していると考えられる作品について考察する。

1955年に発表された『地平線』の巻頭には、5年間の成果を集めて本詩集を作成したという金時鐘の言葉が書かれている。詩集の構成は、大きく3つのパートに分かれており、最初に「序詩」が置かれ、第Ⅰ章「夜を希うものたち」に27篇、第Ⅱ章「さえぎられた愛の中で」に20篇の作品が収められている。また、金時鐘は各章の特徴として、第1章は、日本の現実を重視した日本語で作品活動を行う外国人としての作品であり、第2章は、外国人が日本語でやりうる朝鮮的な作品であったと説明している¹⁵⁶。以上ことを踏まえた上で、『地平線』において濟州4・3はどのように描かれているのかについてみてみよう。

(2) 「處分法」―虐殺現場を描く

まず、第1章に収録されている「處分法」についてみる。「處分法」には、当時大阪で進められていた埋立地工事により、そこに生きている動物や生物たちが殺されていく様子が描かれている。浅見洋子は、「處分法」について、虐殺や人間性の蹂躪というイメージの拡がりを持たせる作品であり、「處分法」の作品の背景には、濟州4・3の原体験があることを指摘している¹⁵⁷。この作品の本文は、以下の通りである。

土堤の 上から
御葬儀を 見ていた。
白昼公然の 虐殺を
この目は はつきりと 見とどけていた。
(…中略…)
私は 以前にも
このような 葬いを 知っている。
焼けた 死体は たしか 黒こげだつたのに
時代は ^{なま}生のまま、 殺し去っていた。

(金時鐘「處分法¹⁵⁸」『地平線』)

上の引用で特に注目すべき点は、最初の節で話者は「白昼公然の虐殺を／この目は はつ

¹⁵⁶ 金時鐘「私の作品の場と『流民の記憶』」復刻版『ヂンダレ』16号、不二出版、2008年、2～8頁。

¹⁵⁷ 浅見洋子、前掲『金時鐘の言葉と思想：注釈的読解の試み』83～86頁。

¹⁵⁸ 金時鐘、前掲『地平線』32～33頁。

きりと見とどけていた」という箇所である。埋め立て工事による「虐殺」を話者である「私」が「見とどけている」という描写である。それに続き最後の節には、「私は 以前にも／このような 葬いを 知っている」と続く。この「私」が知っている「葬い」についての詳しい背景の詳細については述べられていない。しかし、濟州 4・3 の殺戮現場の状況を意味すると推測することができる。

そのことから、「時代は 生のまま、殺し去っていた」とは、大阪で埋め立て工事が行われている「時代」と濟州島で濟州 4・3 が最中であった「時代」を表していると考えられる。そして、この2つの「時代」において「御葬式」や「虐殺」が行われているという事実を証言しているのである。このように、「處分法」は日本における問題を題材にしながら、濟州 4・3 で「虐殺」を見たという事実を間接的に書いた作品と解釈することができる。

(3) 「巨濟島」―腐乱した死者を描く

『地平線』の第2章に収録されている「巨濟島」においても、濟州 4・3 において起こった「虐殺」の描写と推測できる箇所がある。タイトルの「巨濟島」は、朝鮮戦争の最中の 1951 年に捕虜収容所が設置された韓国に実在する島である¹⁵⁹。この作品の本文は、以下の通りである。

一兄弟同士が傷つきあうのも悲しいのに、縁もゆかりもない者共にぶち殺されるのは
死んでも死にきれないほど怒りがこみあがる―

(…中略…)

幾重にも さえぎられた
庭があり、部屋があり

孤々に 分たれた
人らがうずく
黒いゝ屠殺場があるのです。

2

ごらんなさい、
新芽ふく 春またぎ

無数の足が 草の根をわけてのび
手足のもがれた胴体が

¹⁵⁹ これについては、以下を参考とする。「巨濟島捕虜収容所遺跡公園」公式サイト、最終閲覧：2023年5月23日、https://www.gmdc.co.kr/_pow/。

そこここに 巨体な虫のようにはいつくばっているのを

(金時鐘「巨濟島¹⁶⁰」『地平線』)

この作品の冒頭では、「縁もゆかりのない者」に殺されることに対する遺憾が書かれている。この遺憾の背景について、『地平線』が書かれた時期から考えてみると、濟州 4・3 やその後の朝鮮戦争に対する金時鐘の「怒り」を表したものと考えられる。「巨濟島」には、「屠殺場」があったことが書かれており、その情景について、「巨体な虫のようにはいつくばり」、「無数の足が 草の根をわけて伸び／手足のもがれた胴体」があると描写されている。これらの死者の描写は、どこから発想を得たものであろうか。その手がかりとなるのが、金時鐘が 2018 年の濟州 4・3 の 70 周年記念の際に創作した作品「死者には時がない」における死体の描かれ方である。以下は、この作品の本文である。

降り積もった歳月の奥から
顔があらわれ
寄りすぎた村人たちの顔があらわれ
放り出した정남정주号のたもとで放心している
やつれた母の顔があらわれ、
地面の底のくらやみに
一斉につつじの茎が首をもたげて
かず知れぬ髪のが
白い毛根に絡んでふるえている。

蛆は今もってたかってもつれて
長いしっぽを引きずって這いずり回り
(…中略…)
野ずえで立ちすくす古びた갈중의の農夫がおり、
見つめる土の底から
手が生える。
足が突き出る。
しゃれこうべが齒を剥いてあおむいている。

(金時鐘「死者には時がない¹⁶¹」)

¹⁶⁰ 金時鐘、前掲『地平線』151～156 頁。

¹⁶¹ 朝鮮語版初出：『4・3 と平和』第 30 号、濟州平和財団、2018 年 1 月。日本語版初出：『濟州四・三 70 周年在日本濟州四・三事件犠牲者慰靈際』濟州四・三 70 周年犠牲者慰靈際実行委

このように「死者には時がない」には、済州 4・3 によって犠牲になった人々が「降り積もった歳月の奥」から「あらわれ」、死者がまるで生きているかのように描写されている。

「巨濟島」の「巨体な虫のようにはいつくばっている」における「虫」、「蛆」が体集っているという描写は、「死者には時はない」の「蛆は今もってたかつてもつれて／長いしっぽを引きずって這いずり回る」という表現と重なり合う。このような死体の光景は、金時鐘が済州島で目撃した死体であったことが、以下のように語られている。

私は草叢に潜みました。そのすぐ近くに撃ち殺されて腐乱している、農夫の死体がありました。野良衣のバジの膝下に、ゲートル代わりの荒縄が巻きついたままでした。その異臭たるや、人間ってこんなにも無残に殺されて、放置された死体はなぜこんなにも汚いのでしょうか。人間の腐る臭いは、死体にたかっている蛆の凄まじさは、いかなる表現も寄りつけません。(…中略…) 人間の死体にたかる蛆というんは、しっぽが長いのです。まず眼窩から湧きだしウジャウジャともつれてたかります。殺された生命は、顔を背けずにはいられないほど損なわれた肉体をさらします¹⁶²。

金時鐘は、済州 4・3 の最中に、野良着を着ていた「農夫の死体」を直接目撃していたのである。また、「農夫の死体」の眼窩からは、蛆がたかっていたということが述べられている。この「農夫」こそ、「死者には時がない」における「갈중의 農夫¹⁶³」である。それと同時に「巨濟島」における蛆がたかっている死体の描写も、金時鐘が目撃した「農夫の死体」のイメージから描かれたものであると推測することができる。このような死者の描き方について、金時鐘は以下のように言及している。

犠牲者は決して厳かなものではありません。死体にたかる蛆は日に映えて黄金のしっぽをくねらせながら死体をむさぼり、死を強いられた死者がそこで腐っているのです¹⁶⁴。

金時鐘は、自身が目撃した死者を美化することなく、醜い状態のまま描くことの重要性について述べている。ここで述べられている金時鐘の死者に対する姿勢が、「巨濟島」やその後発表された「死者には時がない」における死者の描写にも表れているのである。

以上のように、金時鐘は、1955 年に発表された『地平線』においてすでに済州 4・3 の現場で見たと推測できるような死者の状態を作中に描写していた。つまり、1955 年当時、金時鐘はまだ済州 4・3 の体験者であることを公に明らかにしてはいないものの、作品に済州

員、2018 年 4 月 22 日。

¹⁶² 金時鐘、金石範『金時鐘、金石範済州 4・3 を語る』済州四・三事件 70 周年犠牲者慰霊祭実行委員、2018 年、436 頁。

¹⁶³ 「갈중의」については、作中の注釈で「柿しぶで染めている野良着」と説明されている。

¹⁶⁴ 金時鐘、金石範著、文京洙編、前掲『金時鐘、金石範済州 4・3 を語る』167 頁。

4・3 で目撃した死者を断片的に書いていたのである。

第3節 『光州詩片』(1983)と済州4・3

(1) 『光州詩片』の制作背景

金時鐘の第1詩集『地平線』の場合と同じように、2000年以前に済州4・3を間接的に描いた詩集として、1983年に発表された第5詩集『光州詩片¹⁶⁵』があげられる。『光州詩片』は、1980年に起こった韓国国内における民主化闘争である光州5・18をテーマに編まれたものである。この光州5・18は、金時鐘にとって、自らの済州4・3の体験を思い起こさずにはいられないものであった。そのことは、『光州詩片』のいくつかの作中にも表れており、そこには、光州5・18と済州4・3の体験が重ね合わせられながら書かれているのである。これに関して、金時鐘は2000年に行われた金石範との対談の中で、済州4・3の体験と『光州詩片』の関係性について以下のように述べている。

4・3事件の体験者の心の負目、トラウマが逆に働いて、僕が作品にできたものに『光州詩片』(一九八三年)という詩集があります。光州市民義挙を刻んだこの詩集は4・3事件との兼ね合いがなければ書けなかったものです。権力の横暴を糾弾することが主眼でなくて、その「事件」と向き合う己の、思いの底の疼きを見つめる。それを取り出していくというのが、『光州詩片』でしたので、このような方法意識を僕にもたらしてくれたものは、僕が経験した4・3事件だったと言っていいです¹⁶⁶。

ここで金時鐘は、『光州詩片』について、済州4・3体験がなければ書けなかったものであり、その体験があったからこそ書けたことであると述べている。そして、『光州詩片』を発表した目的について、「権力の横暴を糾弾」することではなく、自身が「事件」に対する向き合い方を模索するというだめであったと言及している。ここでいう「事件」とは、光州5・18はもちろんのこと、済州4・3をも意味していると考えられる。さらに金時鐘は、2019年の『朝日新聞』の回顧録において、光州5・18を初めてニュースで知った当時の様子を振り返りながら「軍が民衆に銃口を向ける姿に、済州島で目にした島民虐殺が重な¹⁶⁷」つたと言及している。ここからも分かるように、金時鐘は光州5・18の光景を目の当たりにしたことにより済州4・3下で目撃した虐殺がフラッシュバックしたのである。

『光州詩片』に関しては、すでに多くの研究者が分析を行っている。松原新一は、金時鐘

¹⁶⁵ 金時鐘『光州詩片』福武書店、1983年。韓国では、2014年に김정례の翻訳によって出版されている(김시중 지음, 김정례 옮김 『광주 시편』 푸른역사, 2014)。

¹⁶⁶ 金石範、金時鐘、文京洙編、前掲『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか』167頁。

¹⁶⁷ 金時鐘「語る一人生の贈りもの一金時鐘12 “光州の悲劇 故郷の記憶重なる”」『朝日新聞』2019年8月6日朝刊。

が「自己の関与しない歴史・出来事」である光州 5・18 に触発されて書かれた詩集が『光州詩片』であると指摘している¹⁶⁸。しかし、松原の作品分析は、1980 年代当時のもので、金時鐘の済州 4・3 の体験がまだ明らかにされていない時代であったため、済州 4・3 を踏まえた作品分析には至っていない。一方、イ・ジンギョンは、金時鐘の『光州詩片』の作品を詳細に分析しながら、金時鐘が当事者として現場にいた済州 4・3 については書けなかったことに対し、現場にいなかった光州 5・18 に関しては出来事の 3 年後に書くことができた点について指摘している¹⁶⁹。

しかしながら、『光州詩片』の作品には、済州 4・3 の体験とも理解できる描写や、済州 4・3 を描く際に用いられる共通のモチーフが見受けられる。本稿では『光州詩片』について、金時鐘の体験した済州 4・3 との関連性に焦点を当てながら解析していく。またそのことは、『光州詩片』を新たな視点から読解する作業にもなり得るだろう。

(2) 「褪せる時のなか」—出来事への不在

『光州詩片』は、本文の前に置かれている作品「扉」と第 I 章から第 III 章で構成されており、全 22 篇の作品が収録されている。この中でも済州 4・3 と関係性が深い作品 3 篇「褪せる時のなか」、「遠雷」、「冥福を祈るな」をとりあげ、金時鐘が光州 5・18 をいかに捉え、具体的にどのような描写が済州 4・3 と関連しているのかについて考察する。

まずは、「褪せる時のなか」についてみてみよう。金時鐘が光州 5・18 についてニュースで知った日の夜に書かれた「褪せる時のなか」には、金時鐘が光州 5・18 をどのように捉えていたのかが表れている。本文は、以下の通りである。

そこにはいつも私がないのである。

おっても差し支えないほどに

ぐるりは私をくるんで平静である。

ことはきまって私のいない間の出来事としておこり

私は私であるべき時をやたらとやりすごしてばかりいるのである。

(…中略…)

おぼえてもないほど季節をくらって

はじけた夏の私がないのだ。

きまってそこにいつもいないのだ。

光州はつつじと燃えて血の雄叫びである。

嘘の裏ですら痴呆ける時は白いのである。

¹⁶⁸ 松原新一、倉橋健一、上掲『70 年代の金時鐘論：日本語を生きる金時鐘とわれらの日々』77 頁。松原は、「冥福を祈るな」と「浅い通夜」で金時鐘と光州 5・18 による死者との向き合い方が描かれており、「遠雷」の中では人間の生の本質的な価値の所在が描かれていると指摘している。

¹⁶⁹ 이진경 『김시중, 어긋남의 존재론』 서울: 도서출판 b, 2019, p. 284.

三六年を重ね合わせても
まだまだやりすぎされる己れの時があるのである。
遠く私のすれちがった街でだけ
時はしんと火をかきたてて降っているのである。

* 三六年 = 「大日本帝国」が朝鮮を直接統治した植民地期間の年数¹⁷⁰。

(金時鐘「褪せる時のなか¹⁷¹」『光州詩片』)

冒頭の「そこにはいつも私がないのである」とは、韓国にいるべきであったがそうすることのできなかつた金時鐘自身の物理的な立ち位置に対する後悔の念が込められている。その後には、「ことはきまって私のいない間の出来事としておこり／私は私であるべき時をやたらとやりすぎしてばかりいるのである」と続くが、ここに示されている「私のいない間の出来事」とは、光州 5・18 はもちろんのこと、それだけに留まらない朝鮮半島における歴史的な事柄を指している。

例えば、「おぼえてもないほどの季節をくらって／はじけた夏の私がないのだ」における「夏」は、本文の注釈に「三六年」が植民地統治を意味していることが説明されていることから、植民地解放の季節であることが分かる。作中には、その解放の「夏」にも「私」は不在であったことが描かれている。金時鐘は、植民地解放を朝鮮半島の済州島で迎えた。彼は、帝国日本の植民地教育を受けた皇国少年であったため、解放は彼にとって今までの自分自身を否定されるべき出来事であった。自分は何から解放されたのかという問いを現在に至るまで自問自答している金時鐘にとって、植民地解放とは素直に喜ぶことのできるものでは到底なかつたと考えられる。だからこそ、朝鮮が植民地から解放された「はじける夏」には「私がない」のである。

このように金時鐘は、朝鮮半島を日本から傍観するしかない自らの立ち位置を出来事の不在という観点から表現した。この傍観者としての金時鐘の立ち位置は、『光州詩片』だけでなく、『失くした季節』と『背中地図』にも引き継がれることになる。これに関しては、後で詳しく述べる。

(3) 「遠雷」—出来事の連続性

次に、光州を舞台に描いていると読み取れる作品「遠雷」についてみていく。許榮善は「遠雷」について、金時鐘が済州 4・3 体験を土台にしながら書かれた作品であることを指摘し

¹⁷⁰ 注釈は、原文の中に含まれているので作品の一部と判断し、そのまま書き出した。以下に引用する作品についても同様である。

¹⁷¹ 金時鐘、前掲『光州詩片』40～43頁。

ている¹⁷²。この指摘の通り、「遠雷」は、金時鐘が自身の濟州 4・3 の直接的体験と光州 5・18 の間接的体験を同時に描かれていると考えられる。「遠雷」には、「夜更けの母」、「死を期した若者」、「私」が登場し、濟州 4・3 で闘った金時鐘と推測できる「私」と、光州 5・18 で闘った「若者」について描かれている。この作品の本文は、以下の通りである。

夜更けの母は
とりわけ寡黙でした。
炒り豆をつめながら
ただ鼻だけをすすっていました。

同じく生涯を分けたはずの夜に
死を期した若者は
洗いざらした肌着を母からもらい受け
私は母から
ひとり逃げうつ糧をもらい受けていたのです。
あの夜更けにもまた
遠雷はひきもきらずいなびかっていたのです。
(…中略…)
その夜更けにも
遠雷はにぶくどよめいていました。
見たものではありません。
白く放たれた閃光がつかぬく
白い心が聞いたのです。
がらんどうの広場でうずくまっている
ひとりの母の しわぶきを聞いたのです。

(金時鐘「遠雷¹⁷³」『光州詩片』)

上の引用にもあるように、「遠雷」は、光州の「その夜更け」と、濟州島と推測できる「あの夜更け」の2つの場面が交互に描かれている。濟州島の出来事が描かれている理由は、金時鐘の濟州島での体験談と一致する内容が書かれているからである。その該当箇所は、「死を期した若者」が「母」から肌着をもらい受けたこと、さらには「私」が「母」から「ひとり逃げうつ糧をもらい受けていた」という描写である。これに関し、金時鐘は『朝鮮と日本に生きる』で次のように言及している。

¹⁷² 허영선 『당신은 설위할 봄이라도 있었겠지만』 마음의숲, 2019년, p. 212.

¹⁷³ 金時鐘、前掲『光州詩片』20～23頁。

やっと済州島脱出の日がやってきました。父のあらんかぎりの奔走があって、五月二六日（のはずです）まずクェンタルという無人島に逃れます。（…中略…）父が連れ立ってやってきました。これはお前の母からのものだと言って、水の入った太い竹筒と炒り豆（大豆を砂糖で固めた非常食）のアルミ弁当箱を手提げにして渡してくれました。もうひとつの包みには日本の五十銭紙幣を詰めてあるというゴム水枕と、着替用の学生服が油紙に密封されてありました¹⁷⁴。

このように金時鐘は、済州島から脱出する際、父が付き添い、母から炒り豆が入った非常食の弁当箱をうけ取ったということを回想している。この金時鐘の実体験を踏まえると、「遠雷」における「夜更けの母は／とりわけ寡黙でした。／炒り豆をつめながら／ただ鼻だけすすっていました」という描写は、金時鐘が済州島から日本に脱出する際の金時鐘自身の体験に基づいて描かれたということがわかる。そうすると、作中の「私」は、済州 4・3 最中、両親の手配で日本に逃げることになった「私」、すなわち金時鐘本人であると推測できる。その一方、作中の「若者」は、光州 5・18 で闘いに行く「若者」と考えられる。このように、「遠雷」は、光州で民主化運動に参加する若者を描写しながら、金時鐘の済州 4・3 体験を間接的に書いた作品と解釈することができる。

次に、この作品の題名にもなっている「遠雷」の描かれ方に注目する。「遠雷」は、「その夜更け」と「あの夜更け」、あるいは「若者」と「私」が存在する場に共通して「鳴る」、または「見える」ものとして描かれている。また「遠雷」は、「若者」や「私」の人生の転機や大きな決断をする際に現れ、不吉な先行きを暗示する。作中において、「遠雷」は3度に渡り登場し、それぞれ異なった場面で鳴り響く。

1つ目の「遠雷」は光州で鳴り、それを「私」が見たことが書かれている。「遠雷」を見た直後、先ほど述べた済州島での金時鐘の体験を表す場面に移る。このことから「遠雷」は、金時鐘に自らの済州島での体験をフラッシュバックさせる役割を果たしていることが分かる。2つ目の「遠雷」は、「私」が直接聞いたものである。この場面は、済州 4・3 の場面と考えられるため、当時の金時鐘が聞いた「遠雷」と解釈できる。そして3つ目の「遠雷」は、光州で鳴り響く「遠雷」である。その「遠雷」は「母」の「しわぶき」を連想させるものとして描かれている¹⁷⁵。

このように「遠雷」には、光州 5・18 の出来事と金時鐘の済州 4・3 体験が描かれている。その際、「遠雷」はその2つの出来事を結ぶ役割を果たしている。金時鐘は、「遠雷」を通じ

¹⁷⁴ 金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる』229～230頁。

¹⁷⁵ 松原新一は、「ひとりの母」の「しわぶき」を「人間の生の本質的な価値の現実的な一微憑」に他ならないと指摘している。続いて松原は、金時鐘が日本から光州 5・18 と向き合う際に、「ひとりの母」の「しわぶき」を聞くことによって、損傷されてはならない生の本質的な価値の所在を探り当てたと言及する（松原新一「金時鐘論」松原新一、倉橋健一、前掲『70年代の金時鐘論』85～88頁）。

て「私」と「若者」、現在と過去、光州 5・18 と済州 4・3 を 1 つの作品世界の中に描いたのである。

(4) 「冥福を祈るな」―死者を描く

最後に、「冥福を祈るな」についてみてみよう。「冥福を祈るな」には、光州 5・18 による死者について描かれている。それだけではなく、金時鐘の光州 5・18 に対する眼差しや、朝鮮半島の情勢に対する批判的な姿勢が垣間見られる。この作品の本文は、以下の通りである。

非業の死がおおわれてだけあるのなら
大地はもはや祖国ではない。
茂みに迷彩服をひそませ
蛇の眼光をぎろつかせているのもまた
大地だからだ。
 抉られた喉は
 その下の土くれのなかでひしゃがっている。
 (…中略…)
五月を
トマトのように熟れ押し潰された死よ。
撃ち抜かれた空よ
木木のそよぎよ。
眼をおおう死にも
光だけは透けていたのか
韓国の夏よ。
 (…中略…)
記憶される記憶があるかぎり
ああ記憶があるかぎり
くつがえしようのない反証は深い記憶のなかのもの。
閉じる眼のない死者の死だ。
葬るな人よ、
冥福を祈るな。

(金時鐘 「冥福を祈るな」¹⁷⁶ 『光州詩片』)

¹⁷⁶ 金時鐘、前掲『光州詩片』74～79頁。

引用文の冒頭に、「非業の死がおおわれてだけあるのなら／大地はもはや祖国ではない」とあるように、金時鐘は光州5・18による市民の「死」が隠蔽されている状態の国は、自身の「祖国」ではないと断言し、韓国政府を痛烈に批判している。そして、光州5・18による死者たちの描写が続く。その中でも「五月を／トマトのように熟れ押し潰された死よ」という表現に着目すべきである。なぜなら、金時鐘は現在に至るまで、「トマトのように熟れ押し潰された死」について繰り返し言及してきたからである。たとえば、『新潟』には、死者の様子が以下のように描かれている。

国が
なま身のまま
等分される日。
人は
こぞって
死の白票を
投じた。
町で
谷で
死者は
五月を
トマトのように
熟れ
ただれた。
捕らえた数が
奪った命を
はるかに
上まわったとき
海への
搬出は
始まった。

(金時鐘『新潟¹⁷⁷』)

このように『新潟』には、「五月」の「トマトのよう」な状態の死者が描かれている。『新潟』は、1960年末には書き終えられていることから、この「五月」の「トマトのよう」な死

¹⁷⁷ 金時鐘『新潟』構造社、1970年、109～110頁。

者は、1980年に起こった光州5・18を背景にしたものではない。これに関して、金時鐘は『新潟』における「五月」について、注釈で以下のように説明している。

五月…一九四八年五月九日強行された南朝鮮単独選挙は、アメリカの強権による「国連臨時朝鮮委員会監視下」の暴圧であったが、祖国の永久分割化に抗した全人民の抗争は熾烈を極めた。特に同年四月三日に火の手を挙げた済州島人民蜂起事件は、鎮圧までに二ケ年を要し、アメリカ軍支援下の前近代的な大殺戮は、そのあまりに恐るべき極端さ（一人の赤色容疑者のために、村ごと焼きつくす等）のために、李承晩政権軍内部に反乱まで起きた¹⁷⁸。

この「五月」の注釈から分かるように、金時鐘にとって「五月」とは1948年の南朝鮮単独選挙を意味する月であった。そして、朝鮮半島を分断へと招く南朝鮮単独選挙に反発して起こったのが「済州島人民蜂起事件」、つまり済州4・3なのである。このように、金時鐘にとって「五月」とは、済州4・3の引き金となった朝鮮の南北分断を決定づけてしまう重要な月だった。そしてその後、1980年に光州5・18が勃発したのも5月であった。したがって、「冥福を祈るな」に出てくる「五月を／トマトのように熟れ押し潰された死よ」は、光州5・18と済州4・3による死者と考えられるのである。

それでは、「トマトのよう」な状態の死者とは具体的にどのような状態を指すのだろうか。金時鐘は、第4章第1節でも言及した2000年の済州4・3体験証言において、済州4・3の最中に「トマト」のような状態の死者を実際に目撃したと述べている。金時鐘は、当時を振り返りながら「私が話をするのに気後れてならないのは、4・3事件で地獄を、これほど惨いものを、みるべき地獄をほとんど見てしまったからです¹⁷⁹」と述べながら、済州4・3で目撃した死体の様子を以下のように述べた。

銃で撃たれて死ぬというのは瞬時のことですから、残酷さという点ではそんなに目立ちません。ですが、あの五月という済州島南端の暑い日差しの中で、澄んだ空のもとで、谷間で、仰向いて撃たれて死んだ人たちというのは、本当に顔がトマトのように熟れていました。ピンでも立てようものなら、ずるずると血が出るくらいに、火照っていました。それが二日もすればとたんに眼から鼻から蛆を放って真っ黒くなっていきます¹⁸⁰。

このように、金時鐘にとって済州4・3当時に死体を目撃したことは、70年以上経ってもなお昨日のことであるかのように鮮明に記憶されている出来事であった。その強烈な記憶が、光州5・18によって犠牲になった死者を具体的に想像させる要因になったと考えられ

¹⁷⁸ 同上、109頁。

¹⁷⁹ 金時鐘、前掲「記憶せよ、和合せよ」1頁。

¹⁸⁰ 同上、1～2頁。

る。したがって、『光州詩片』の「冥福を祈るな」における「五月を／トマトのように熟れ
押し潰された死よ」という表現は、金時鐘が直接目撃した済州 4・3 の虐殺死体のイメージ
にもとづいた表現であったと考えられる。

以上のように、金時鐘は『光州詩片』において光州 5・18 を描きながら、同時に自らの済
州 4・3 の体験も描いていた。金時鐘にとって、光州 5・18 とは、済州 4・3 の記憶を蘇らせ
る出来事であった。光州の市民たちの死は、済州 4・3 で命を落とした家族や仲間を連想さ
せるものであったに違いない。それでも、金時鐘が光州 5・18 を主題にした詩集を発表した
理由は、金時鐘が「在日朝鮮人」として、朝鮮半島と日本の「はざま」に存在するが故に、
見えるものがあり、発すべき言葉があると感じたからではないだろうか。『光州詩片』は、
光州 5・18 に対する金時鐘の応答であった。

これまで、金時鐘が 2000 年以前に発表した『地平線』と『光州詩片』における済州 4・3
体験の描かれ方について考察した。それでは、2000 年以降の作品において済州 4・3 はどの
ように描かれているのだろうか。次に、済州 4・3 体験証言後に初めて出された『失くした
季節』についてみてみよう。

第 5 章 済州 4・3 体験証言後の初詩集『失くした季節』

第 1 節 『失くした季節』の構成と季節観

(1) 『失くした季節』の制作背景

金時鐘は、済州 4・3 体験証言の後の 2010 年に第 7 詩集『失くした季節』を発表した。
『失くした季節』には大きく二つの特徴がある。1 つ目は、金時鐘が初めて済州 4・3 を直
接書いた作品が収められている点である。2 つ目は、金時鐘が独自の抒情を作品で表現した
という点である。この 2 つの特徴は、相互に密接に関係している。皇国少年であった金時鐘
にとって、季節観とは俳句や短歌の抒情がその根底に存在していた。一方で、金時鐘が体験
してきた済州 4・3 のような出来事は、彼の独自の季節の概念を作り上げる大きなきっかけ
となった。このことは、本稿の第 2 章で述べた植え付けられた抒情の否定の概念にも繋がる
のである。鶴飼哲が、金時鐘の独自の季節観を短歌や俳句の「国民」的隆盛を支える「共感
の共同体」を逆撫でするものであると指摘したように¹⁸¹、金時鐘は、従来の季節観を壊しな
がら、彼の体験に基づいた新たな季節の作品を作ることを実践しようとしたのである。

金時鐘は『失くした季節』をあとがきで抒情の問題について以下のように言及している。

気はずかしくて止めたが、思いとしては「金時鐘抒情詩集」と銘打ちたかった詩集であ
る。日本では特にそうだが、抒情詩といわれるものの多くは自然賛美を貴重にしてうたわ

¹⁸¹ 鶴飼哲「金時鐘の詩と日本語の『未来』」、三浦信孝、糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』
藤原書店、2000 年、371 頁。

れてきた。いわば「自然」は、自己の心情が投影されたものなのだ。「抒情」という詩の律動もそこで流露する情感を指していわれるのが普通で、抒情と情感の間にはいささかのへだたりもない。情感イコール抒情なのである¹⁸²。

ここで、金時鐘は詩集のタイトルを「金時鐘抒情詩集」と名付けたかったと述べ、「抒情」や「自然」が日本では「情感」として心情的なものとされていることを指摘している。この状況について、金時鐘は以下のように批判的に捉えている。

この詩集も春夏秋冬の四時を題材にしているので、当然「自然」が主題を成しているようなものではあるが、少なくとも自然に心情の機微を託すような、純情な私はとうにそこからおさらばしている。つもりの私である。植民地少年の私を熱烈な皇国少年に作り上げたかつての日本語と、その日本語が醸していた韻律の抒情とは生あるかぎり向き合わねばならない、私の意識の業のようなものである¹⁸³。

このように、金時鐘にとっての「抒情」とは、「自然」に「心情の機微を託す」ような「情感イコール抒情」ではなく、「情感」から切り離さないといけないと述べている。また、「日本語が醸していた韻律の抒情」と向き合い、そこから脱することを試みたということが分かる。また、金時鐘がいかに従来「抒情」から脱しようとしたのかについては、『失くした季節』における「四時」に対する考え方によく表れている。以下は、金時鐘が自らの季節観について言及している部分である。

日本の近代抒情詩の影響を強く受けて育った私なので、四季への関心もまた人一倍つよかった。それだけに季節や自然は私の抒情の質を明かす検証物ともなって今に至った。持ち越した課題の答えを今、おずおずと差し出している私でもある¹⁸⁴。

上の引用で述べられている通り、金時鐘にとって近代抒情詩に含まれる「抒情」や「四季」に対する概念をいかに乗り越えていくかが課題であった。

これに関して、細見和之は、朝鮮近代詩の翻訳が金時鐘の「抒情」の問い直しを行う上で重要な役割を果たしたということを踏まえ、『失くした季節』についても、済州4・3のような政治的な問題と、個人的な表現の問題である抒情の問い直しが絡み合っていると述べている¹⁸⁵。細見が指摘しているように、いかに植え付けられた抒情を剥ぎ取るのかということが、『失くした季節』の大きなテーマなのである。以上のことを踏まえ、本稿では、『失く

¹⁸² 金時鐘、前掲『失くした季節』175～176頁。

¹⁸³ 同上、176頁。

¹⁸⁴ 同上、177頁。

¹⁸⁵ 細見和之、前掲『失くした季節—金時鐘四時詩集』を読む『ディアスポラを生きる詩人金時鐘』221～222頁。

した季節』において季節が金時鐘の過去の体験と関連しながらどのように描かれているのかについてみていく。

『失くした季節』は、「夏」、「秋」、「冬」、「春」の全4章から構成されており、「四季」それぞれに纏わる詩が各8編ずつ収められている。金時鐘は、『失くした季節』において独自の季節観を作り上げようとした。そのことが端的に表れているのが、詩集の構成が「夏」に始まり「春」で終わっている点である。以下では、各章における季節の描かれ方について考察する。

(2) 「夏」章—解放

まず、「夏」章についてみてみよう。作品「夏」には、夏がいかなる季節であるのかについて様々な表現を用いながら書かれている。この本文は、以下の通りである。

声を立てず
立てるべき声を
底びからせている季節。

思うほどに眼がくらみ
しずかに^{つば}瞋るしかない
奥底の季節。

誰であるかは口にもせず
ひそと胸にかい抱く
追慕の季節。
(…中略…)
うすれて記憶が透かされているとき
汗みどろにむれてくる
戦火の季節。

(金時鐘「夏¹⁸⁶」『失くした季節』)

上の引用にもあるように、冒頭で夏は「声を立てず／立てるべき声を／底びからせている季節」と書かれている。これに関して、他の作品に「「八月」はぎらつく解放（終戦）の白昼夢の月である¹⁸⁷」ことが説明されているため、ここでの夏は、植民地解放の体験が根底にあると考えられる。また本文の「底びからせている」は、「底びかり（光り）」を「底びかり」

¹⁸⁶ 金時鐘、前掲『失くした季節』22～25頁。

¹⁸⁷ 同上、167頁。

に変形させた詩語であり、「ひからびる(干からびる／乾涸びる)」という意も連想させる¹⁸⁸。このことと、金時鐘のライフヒストリーを考えると、解放の夏に「声」を「底ぴからせている」という状況は、解放を迎えても皇国少年であった金時鐘が、声を立てて喜ぶことができなかった体験を表している。

一方、「底ぴかり」に表される植民地解放の後には、夏が「眼がくら」む「奥底の季節」であることが書かれている。金時鐘は、<光>＝植民地解放の瞬間と<影>＝解放後の世界という二項対立を利用しながら、自らが<影>の世界に存在することを描いているのである。

この植民地解放を体験した金時鐘のその後の行く末が描かれていると考えられる作品に、「牙」があげられる。この作品は、6連で構成されており、動物が変身していく様子が描かれている。この作品の本文は、以下の通りである。

外れたものは
マンダースになる。
マンダースは
捨てられたものの成り変わりだ。

都合に合わせて飼い馴らし
嵩めばすぐさまおっぼりだされて
蛇一匹乾いた街では巡り会えない。
いよいよ瘠せたハイエナになってゆく。
(…中略…)

外れたものの
犬歯は尖る。
均衡からはみ出たものはすべて
唸りをひそめた
牙になる。

(金時鐘「牙¹⁸⁹」『失くした季節』)

この本作品では、「捨てられたもの」が「マンダース」に変身し、「都合に合わせて飼い馴らし」され、「おっぼりだされ」た後、さらに「ハイエナ」に変身する過程が描かれている。

¹⁸⁸ これに関し、藤石貴代は、「底ぴかり」には、擬態語「ぴかり」と朝鮮語「ピッ／兎(光)」、そして一九四五年八月一五日の「光復」(祖国の独立回復)が重ね合わされている可能性を指摘している(藤石貴代「“魂”を生きる日本語—金時鐘の詩の言葉とリズム—」『論潮』第6号、論潮の会、2014年、109頁～147頁)。

¹⁸⁹ 同上、17～21頁。

二度捨てられ、その度に変身が起こるのだ。この出来事を金時鐘のライフヒストリーと照らし合わせて考えてみると、濟州島を追われる身になった金時鐘の体験が、1度目に捨てられた出来事として考えられる。その後、在日朝鮮人組織下で活動し、組織に「飼い馴ら」された後、組織から批判を受け、「統制と規制の均衡から」「外された」身になったことが2度目に捨てられた出来事として考えられる。つまり、「行き場のない生」というのは、濟州島にも在日朝鮮人組織にも外され、行き場を失い1人で何がなんでも生きていかないとけなかつた状況を表している。その時の自身の状況を「牙」を持つ「マングース」や「ハイエナ」のようにお腹を空かせながら「喘いで」「唸り」を潜める肉食動物に喩えているのである。

しかし、そのような過去の自分にとって「いま」の「私」は「肥えた代物」であり、「襲われる瞬間を待つ」存在となってしまっている。また、「均衡」を失っていた過去とは反対に、いまの「私」は「均衡の秩序深く」、自分の思想にも怯えるほどになったということも描写されている。

このように、作中の登場人物は、体験や時間の経過を経ながら「マングース」から「ハイエナ」に変身した過去の自分と、「いまの私」の対立構造が成り立っていると理解することができる。それらは、金時鐘自らの体験を土台にして描いたものであり、金時鐘が過去を振り返りながら現在の自らの姿を批判的に捉えていると解釈できるのである。

この「いまの私」の批判は、「夏」章の最後に収められている作品「失くした季節」において、「夏」の記憶が忘れられていくことに対する批判へと繋がる。この作品の本文は、以下の通りである。

われらの季節はとっくに失くして久しいのだ。

(…中略…)

夏のあのどよめいた回天の記憶は

露ほども誰かに伝わった痕跡がない。

跡形もない夏がただ、今を盛りにぎらついているばかりである。

(…中略…)

六・二五^{キオ}で追い込まれた釜山から闇船にひそんだときの
蒸れにむれたあのまっ暗い暑さのことだ。

じっとり汗ばんで、ようやく夏が顔をのぞかせてくる。

硝煙をついて北へ行ったのは金億^{キムオク}や姜処重^{カンチョジュン}らの
思いいっぱいの人たちだった。

その彼らが跡形もなく消えたのもまた

うだるさ中の夏のことだ。

いつもと同じ露路の工場の奥で肩をすぼめ

扇風機にあおられる夏の風のように夏が消えてゆくだけだ。

(金時鐘「失くした季節¹⁹⁰」『失くした季節』)

この作品には、「夏のあのどよめいた回天の記憶は／霧ほどにも誰かに伝わった痕跡がなく、「夏の風のように夏が消えてゆくだけ」であるとあるように、「夏」の記憶が、「痕跡」や「跡形」忘れ去られているという危機感について描かれている。そして、ここでの忘れられた記憶として、朝鮮戦争を意味する「六・二五」にまつわる人々があげられている。その人々とは、「閤船」に乗った人々、韓国から北朝鮮に渡った金億や姜処重であることが書かれている。この2人の人物には注釈が付けられており、金億はフランス象徴派の詩人の作品を翻訳した人物として、姜処重は尹東柱の多くの遺稿保管し世に送り出した人物であることが説明されている。これらの人物を作中でとりあげることは、金時鐘が2000年に入り朝鮮詩の翻訳作業を行ったということと無関係ではない。金時鐘自らも金億や姜処重のように、日本で朝鮮詩の翻訳作業を行うことによって、彼らの意志を受け継ぎ、生きた証を記すことを意図していたと考えられる。

このように、金時鐘にとって「夏」とは、植民地解放や朝鮮戦争の記憶で満たされた季節であり、それらの過程で朝鮮半島の分断によって引き裂かれた人々を思い起こす季節なのである。

(3) 「秋」章—沈黙

次に、「秋」についてみていく。「秋」章の初めに収められている作品「旅」には、濟州島へ旅する様子と書き手の心情が描かれている。作中の「濟州島」には注釈が付けられており、そこには以下のように記されている。

韓国最南端の旧火山の島で、韓国切っでの観光地としても知らされている。その反面「四・三事件」という、解放（終戦）直後の悲惨な島民殺戮の暗黒史を秘めている、島でもある¹⁹¹。

この引用からも分かるように、金時鐘は観光地として開発された現在の濟州島現状と濟州4・3で殺戮が起こった現場としての濟州島の両側面について記している。さらに作品には、現在の濟州島の姿を見ながらも濟州4・3当時の様子を見ている場面がいくつも登場する。例えば、竹林を見ながら殺戮現場を思い起こす場面、バスガイドの話聞きながらもバスのタイヤに「茶褐色の汁」が滲む場面が描かれている。これらの場面は、濟州島が濟州4・3の現場でない所がないと言われる程、至る所で殺戮が行われていたということを意味している。

このように、この作品には現在と過去における濟州島が描かれており、濟州4・3で金時

¹⁹⁰ 同上、40～46頁。

¹⁹¹ 同上、54頁。

鐘が体験した内容の断片が描かれている。しかし、作中には登場人物が不在であり、誰が濟州 4・3 を目撃したのかについて記されていない。また、書き手である金時鐘と濟州 4・3 の関係性についても書かれていないことが特徴的である。この理由については、次に続く作品「蒼い空の芯で」で明らかになる。この作品の本文は、以下の通りである。

ぼくは声を持ちません。
声を上げるだけの寄り場が
ぼくにはありません。
くぐもってばかりで
声はぼくの耳でだけ鳴っています。
(…中略…)
言えずじまいの言葉が
無数の目に囲まれて
口ごもっています。
ぼくはまだ告白を知りませんし
願いを適える言葉もまた
いまだ知りません。

耳をつんざいて轟音は噴き上がり
声は中空で浮塵子^{うじんこ}のようにたかっています。
いまに群雀が群れ
空が払われて
冬がきましょう。

言葉がそこらで降り敷いています。
耳をそばたてて
ぼくがいます。
空の芯ではじけている
何かたしかにあるのです。
変わらないぼくを
愛してください。

(金時鐘「蒼い空の芯で¹⁹²」『失くした季節』)

¹⁹² 同上、55～59 頁。

この作品は、「ぼくは声を持ちません」から始められるように、登場人物の「ぼく」が「声」、
「声を上げるだけの寄り場」を持たないことが書かれている。その「ぼく」の「声」は、「ぼ
く」の耳だけで鳴り、空中に舞い、そこらで降り積もっている状況が描かれている。つまり、
「ぼく」は「願いを適える言葉」を知らないために、「ぼく」の「声」は誰にも届かないの
である。このような状況は、金時鐘が濟州4・3の体験を「告白」できる「言葉」を持ちえ
なかったことを表していると考えられる。その「言葉」になり得ない確かな体験があるにも
かかわらず、それを発する適切な「言葉」や聞き手がいなかったということを書いているの
である。

このことは、作品「鳥語の秋」でより明らかにされる。この作品の本文は、以下の通りで
ある。

街なかの秋はショーウインドーの中でだけ
色づいていく。
得体の知れない鳥が
キョトンと首をかしげたままで。
なぜか秋の鳥はさえずりがない。
(…中略…)
里も故も失くした鳥が
ごみしか漁れない日本で
私の言葉を餌に生き延びている。
キーンとしか叫べない鳥に
私もだんだんなくなっていつている。
今に真赤に口が染まりもするだろう。

黙りこくっている鳥を私が見上げ
黒い影が あの日のままに
見返すともなく私を見ている。
声を上げられないものはやはり
光の中で 黒くなる。

(金時鐘「鳥語の秋¹⁹³」『失くした季節』)

この作中の「秋の鳥は囀りがない」という表現からも分かるように、「鳥」は声と言葉
を持たない存在とされている。そして、その「鳥」が「私の言葉を餌に生き延びて」おり、「私」

¹⁹³ 同上、60～65頁。

も「鳥」のように言葉を話せなくなっている状況を描かれている。

これに関して、金時鐘は済州4・3の体験を言語化する際の心境について、言葉が文字として出るのは記憶が熱いうちは言葉にならず、言葉が文字として出るのはなかなか言葉にならないと話している¹⁹⁴。さらには、金時鐘が朝鮮語で自身の心情を言葉や声にできなかったという背景や、日本に来た後にも組織との確執があり、自由に文学活動を行えずに沈黙を強いられた状態が約10年続いたということも自らの言葉で自由に体験や思いを表すことが出来なかった理由として考えられる。これに加え、金時鐘の声や言葉を持たないものについて書くことは、金時鐘は『地平線』から引き継がれるテーマであると考えられる。『地平線』の作品「遠い日」には、「声すらたてないもの」や、声を出さない「啞蟬」が登場する。

このような「声」や「言葉」を持たないものの行く末について書かれた作品に、「錆びる風景」があげられる。この作品の本文は、以下の通りである。

ビルの乱反射や
生命保険の元帳よりも
時間はよりここで濃く
日々をくまどって押し黙っている
(…中略…)
今まさにつぐみが一羽
点と消え
今に垂直に
ついぞ誰ひとり聞くこともなかった
沈黙の固まりが突きささって墮ちる
錆びている私の
時間のなかを

(金時鐘「錆びる風景¹⁹⁵」『失くした季節』)

この作品には、「押し黙っている」「時間」があることが書かれ、「声」や「言葉」を持たないものは、長い時間を経て「沈黙の固まり」になったことが描かれている。そして「沈黙の固まり」が「錆びている私」の「時間」の中を突きささって墮ちる。この状況は、「沈黙の固まり」が「私」に向かって攻撃していると捉えることができる。ここからは、金時鐘が自らの体験について「声」をあげられなかったこと、つまり「沈黙」してきたことの重圧に耐えられないという心境が読み取れる。

¹⁹⁴ 金石範、金時鐘著、文京洙編、前掲『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか：済州島四・三事件の記憶と文学』167頁。

¹⁹⁵ 金時鐘、前掲『失くした季節』78～83頁。

このことから、金時鐘にとって「秋」は、「声」や「言葉」が発することができない沈黙季節であるということが分かる。このように、解放の「夏」の後に「沈黙」の「秋」を描くことは、金時鐘の体験に基づいたものである。とりわけ、金時鐘が濟州4・3の体験を長い間打ち明けることができなかつたことに大きく関連している。この沈黙の状態を、声にならない「声」や「言葉」を持たないものを作中に描くことによって可視化することを試みたと考えられる。

(4) 「冬」章—再生

次に、「冬」についてみていく。「冬」章には、植物や生き物が頻繁に登場し、植物と「ぼく」の物語が描かれている。例えば、作品「一枚の葉」では、土に帰れず飛びたくても飛べない「あまたの葉」が登場する。作中の登場人物である「ぼく」は、「葉をつかんで声を上げ」という場面が描かれている。そして、「ぼく」は一枚の「葉」に頬を寄せて空中に放つという内容でこの作品は締め括られる。ここから、「秋」章において、声を持たない「ぼく」が、この作品では声を上げたということが分かる。

そして、「ぼく」が「葉」を放った後の内容が、次の作品「跳ぶ」に繋がっていく。この作品の本文は以下の通りである。

梢^{こずえ}の向こうで日差しがささくれている。
地肌をさらした里山^{さとやま}が凍え
首をもたげたショベルカーが
剥いた歯先で風をしならせている。
崖にまで迫った幾本かの雑木^{ざうぼく}が
せめて朽ちて土に戻っていかねばと
根ごと引っこ抜かれて煙になるより
なんとか倒れてこの地に埋もれていかなければと
じりじり待つまでもない春に焦れながら
去るのだ、芽吹くより
種となって風に乗るのだ
と果てた声でこの俺に催促してくる。
今によきによき暮らしが生えるだろう。
あたり一面^{きのこ}茸^{きのこ}がはびこって
俺は食卓で思案げにためらっているだろう。
そのうち干からびて
飢えた精霊たちが下りてくるのだ。
そうして無慈悲な殺生が
春の走りに繰り返されていくのだ。

このすげなさを祝福してか
早くも街は色めいてきている。
芽吹いても詮^{せん}無い街路樹に
それでも風はまといついて
待つほどの時節はとうに壊れてしまったと
死んだ者たちがまだらな日陰で笑っている。
跳ばねば！ とにもかくにも
割れ目の
帰り着けない
種よ。

(金時鐘「跳ぶ¹⁹⁶」『失くした季節』)

この作品には、「雑木」が土に戻らねばという意味を持ちつつも、「俺」に「去るのだ、芽吹くより／種となって風に乗るのだ」と催促する場面が描かれている。この場面は、「無慈悲な殺生が／春の走りに繰り返されていく」と書かれていることから、済州 4・3 が背景にあると考えられる。このことから、この「雑木」は、金時鐘の両親であり、「俺」は過去の金時鐘自身と読み取れることができる。つまり、金時鐘の両親が済州島にいらなくなった息子をそこから逃げ出せるよう手配をし、日本へ送り出したという自身の体験に基づいていると解釈できる。

そしてこの内容を受け、作品は「跳ばねば！ とにもかくにも／割れ目の／帰り着けない／種よ」で締め括られる。これは、現在の金時鐘が済州島から日本へと移動した当時の自分に投げかける言葉と捉えることができる。そして、「割れ目の／帰り着けない／種」とは「故郷」である朝鮮半島と定住している日本の「割れ目」、すなわち「故郷」をなくした彼の立ち位置を表しているといえる。

また、「雑木」が「種」となって「跳ぶ」ということは、「帰り着けない」「死者たち」が本来いるべきだった場所へと「跳ぶ」という意味が込められていると解釈することもできる。作中には、開発によって「雑木」が抜かれる場面が描かれている。この背景には、この作品が書かれた同時期の 2006 年に済州島で行われた、済州 4・3 犠牲者の遺骨発掘作業が関連している可能性がある。この遺骨発掘事業により、済州 4・3 当時に虐殺されたと思われる遺骨が多数発見された¹⁹⁷。このことから、金時鐘は開発のために「雑木」が抜かれる情景と

¹⁹⁶ 同上、102～105 頁。

¹⁹⁷ 文京洙によると、済州島における遺骸発掘事業の第一段階は、2006 年 11 月から済州市禾北洞一帯で行われ、完全遺骸 10 体、部分遺骸 80 点余りが収拾された。2007 年 1 月には 4・3 特別法の改定法が成立して「集団虐殺地、暗葬地の調査及び遺骸発掘収拾に関する事業」として済州国際空港南北滑走路の西北側地点での発掘が着手された（196～197 頁）。その後、2009 年まで済州国際空港の北西側、東北側で発掘が行われ、合計 405 体の遺骸が発掘された（「済州

濟州 4・3 当時に「殺生」された人々の遺骨が掘り起こされることを重ね合わせながらこの作品を書いた可能性があると考えられる。

このように、「冬」の章では、「ぼく」が「葉」を空中に放したことをきっかけに、金時鐘が濟州島から日本に渡るまでの体験が描かれているのである。この「冬」に「葉」が空に解き放たれる様子や、「木」が土に返ろうとする様子を描くということは、新しい何かへの生まれ変わりを意味している。

その他にも作品「冬の罅」には、「木」が倒れ、「男」が村から走り出す様子や、「ハイエナ」が目覚めて動き出す様子が描かれていることから、金時鐘にとっての「冬」が、植物や人が再生する季節であることが分かる。

これらをまとめると、「秋」章が沈黙の季節なのとは対照的に、「冬」章では、作中の登場人物が交渉し、対話する様子が頻繁に描かれている。このことから、沈黙の時間が過ぎ、「冬」により自身自身の過去を語り始めることができるようになったと解釈することができる。

(5) 「春」章—殺戮

最後に、「春」についてみていく。金時鐘にとって「春」がいかなる季節であるのかについて端的に表わされている作品として、「四月よ、遠い日よ。」があげられる。以下は、この作品の本文である。

ぼくの春はいつも赤く
花はその中で染まって咲く。

蝶のこない雌蕊めしべに熊ん蜂くまのちゅうが飛び
羽音をたてて四月が紅疫こうえきのように萌えている。
木の果てるのを待ちかねてもいるのか
鴉からすが一羽
ふた股の枝先で身じろぎもしない。

そこでそのまま
木の瘤こぶにでもなっただろう。
世紀はとうに移ったというのに
目をつぶらねば見えてもこない鳥が
記憶を今もってついばんで生きている。

永久に別の名に成り変わった君と

4・3 犠牲者の遺骨 12 柱、約 70 年ぶりに確認」『ハンギョレ』、2020 年 1 月 21 日、
<http://japan.hani.co.kr/arti/politics/35534.html>、最終閲覧日：2023 年 5 月 28 日)。

山手の追分を左右に吹かれていってから
四月は夜明けの^{のろし}烽火となって嘖き上がった。
踏みしだいたつつじの向こうで村が燃え
風にあおられて
軍警トラックの土煙が舞っていた。
^{あや}緩なす^{せんだん}緑の梅檀の根方で
後ろ手の君が顔をひしゃげてくずおれていた日も
^{つちぼこり}土埃は白っぽく杏の花あい^いで立っていた。

うっすら朝焼けに^{もも}靄がたなびき
春はただ待つこともなく花を咲かせて
それでもそこに居つづけた人と木と、一羽の鳥。
注ぐ日差しにも声をたてず
降りそぼる雨にしずくりながら
ひたすら待つことだけをそこにとどめた
木と命と葉あいの風と。

かすれていくのだ。
昔の愛が血をしたたらせた
あの辻、あの角、
あのくぼみ。
そこにいたはずのぼくはあり余るほど年を^は食んで
れんぎょうも杏も同じく咲き乱れる日本で、
^{かたよ}偏って生きて、
うららに日は照って、
四月はまたも視界を染めてめぐってゆく。

木よ、自身で揺れている音を聞き入っている木よ、
かくも春はこともなく
悔悟を散らして甦ってくるのだ。

*筆者に「四月」は四・三事件の残酷な月であり、「八月」はぎらつく解放（終戦）の白
昼夢の月である。

(金時鐘「四月よ、遠い日よ。¹⁹⁸」『失くした季節』)

この作品の注釈には、金時鐘にとって4月は済州4・3が起こった月であることが説明されている。さらに、作中の「四月は夜明けの烽火となって噴き上がった」でより済州4・3の描写は具現化される。これは、1948年4月3日に「武装隊」が烽火をあげた、いわゆる「武装蜂起」を行った瞬間を指している¹⁹⁹。この後作中には、「軍警トラック」が「武装蜂起」を鎮圧するために出動する様子が描かれている。これに関し、後に金時鐘は、自らを「蜂起した側の一人」とあると言及している²⁰⁰。この「武装蜂起」の後、軍警による島民虐殺がなされ、金時鐘は1949年に済州島から日本へ渡ることになる。

これらのことを踏まえると、この作品には、「そこ」＝済州島に居続けてきた人・動物・植物と、居続けることができなかった「ぼく」＝金時鐘が対立する形で成り立っていることが分かる。この対立構造は「ぼく」の現在の心境を描いたものであり、それは「そこ」にいたはずの「ぼく」が日本で悔悟しながら生きているということである。

このように、金時鐘にとっての「春」とは、済州4・3の季節である。この作品以外にも、「春」が済州4・3を思わせる殺戮の季節であることを表す作品として、「春に来なくなったものたち」があげられる。作品の本文は、以下の通りである。

蘇える季節に

来るものがこない。

咲くものが咲かない。

めったには舞い飛ぶものも訪れてはこない。

寝覚めをそやした 軒端すずめ。

そつとのぞいていたキキョウ、キンラン

フデリンドウ。

野路を楽しませたオギョウにワラビ。

ありふれて気にすらかけなかった

身近なものたち。

消費にあおられる暮らしのかげで

いなくなっているいたいけなものたち。

母よ、

¹⁹⁸ 金時鐘、前掲『失くした季節』162～167頁。

¹⁹⁹ この武装蜂起に関して、金時鐘は「人民蜂起」と呼ばれていたことを述べながら、蜂起を起こした人々を「山部隊（サンブデ）」と呼び、済州島民たちの思いを晴らしてくれる「救いの兵士」のように親しみを抱いていたと言及している（金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる』197～198頁）。

²⁰⁰ 2023年4月29日の「コリアタウン歴史資料館」の開館記念品として特別販売された中にあ
る金時鐘のプロフィールに記載されている。

帰ることのない息子を待ちとおして
老いさらばえたあなたを思います。
ひとり置き去られた国元で
ひっそり消えていったあなたが
目につかなくなったものたちとともに見えています。
芽吹く恵みにすぎたであろう荒れた手が
瘠せた大地のひび割れのように見えています。

それでもうららに風はわたり
絶えていっている何か それでも
春がすみの向こうでかげろうている。
こうして私たちは
毎日何かを失っていつている。
けっしてかすかにではない。
遠とおめ目にたしかに
終わっていくものが見えている。
まぎれて浮かれて
花びらが 舞って
ああこの風とともに
私たちの運命が吹いてくる。

*この二行はリルケの詩「春風」の一節。

(金時鐘「春に来なくなったものたち²⁰¹」『失くした季節』)

この作品からは、一般的に考えられる「春」が生命の息吹を感じ、「蘇える季節」である季節であることと相反する「春」の概念がみられる。ここには、「春」に咲くものが咲かず、来るものが来ず、「何かを失っていつている」季節であることが書かれている。この描写からは、濟州4・3は未だ終わっておらず、金時鐘は現在も濟州4・3の最中を生きていることが読み取れる。そして、この作品最後の「風」とともに「運命が吹いてくる」という詩句からは、自らの過去とこれからの先の人生を「風」に身をまかしながら、「運命」として受け入れるしかないことを表している。

以上のように、『失くした季節』からみられる金時鐘の季節観についてまとめると、「夏」は解放の季節であり、「秋」は沈黙の季節である。そして、「冬」は沈黙が解き放たれ、自身

²⁰¹ 金時鐘、前掲『失くした季節』168～173頁。

の生い立ちを植物や「ぼく」のストーリーに喩えながら打ち明けることができる再生の季節である。そして最後の「春」は、済州 4・3 の季節である。このように、「夏」から始まり「春」に終わるという金時鐘の季節観は、彼の体験やそれに基づく記憶によって形成されているのである。

第2節 尹東柱作品との比較からみる『失くした季節』

(1) 「序詩」からみる金時鐘の翻訳方法

前節で述べたように、金時鐘は『失くした季節』において、独自の抒情や季節観を創作で表現した。それは、従来の抒情や季節に対する考えを解体する試みであった。この抒情の解体を行う際に重要な役割を果たしのが、金時鐘は 2000 年以降における翻訳作業であった。第2章でも述べたように、金時鐘が尹東柱作品を翻訳したことは、朝鮮語と出会い直す契機となった。それだけでなく、尹東柱から詩的技法や題材も受け継いだと考えられる。このことを踏まえた上で、金時鐘が尹東柱作品をいかに翻訳したのかを考察し、翻訳作業が『失くした季節』にどのような影響を与えたのかについてみていく。

尹東柱の『空と風と星と詩』は、様々な訳者によって翻訳されている。その中でも「序詩」は、『空と風と星と詩』の初めに収録されている最も有名な作品の一つである。大村益夫は、「朝鮮文学の翻訳—尹東柱『序詩』の翻訳を中心に²⁰²」において、複数にわたる「序詩」の訳について、その特徴や背景について比較検討している。ここでは、大村の論考を参考にしながら、「序詩」の金時鐘訳とその他の訳がどのように異なるのかについて考察する。

大村によれば、2013 年時点で尹東柱の翻訳を公表しているのは、伊吹郷、日本基督教団出版局編、上野潤、宇治郷毅、金時鐘である。その中から、原文と金時鐘訳、そして金時鐘訳との違いがよく表れている伊吹郷訳と宇治郷毅訳をとりあげて比較検討する。尹東柱の「序詩」の原文は、以下の通りである。番号と下線部は筆者による。

尹東柱 「서시」 ²⁰³
① <u>죽는 날까지 하늘을 우러러</u> 한점 부끄럼이 없기를、
② <u>앞새에 이는 바람에도</u> 나는 피로워했다。
별을 노래하는 마음으로
③ <u>모든 죽어가는 것을 사랑해야지</u> 그리고 나한테 주어진 길을

²⁰² 大村益夫「朝鮮文学の翻訳—尹東柱『序詞』の翻訳を中心に」徐勝、小倉紀蔵編『言葉のなかの日韓関係：教育・翻訳通訳・生活』明石書店、2013年、146～159頁。

²⁰³ 윤동주、前掲『하늘과 바람과 별과 시』p. 3.

걸어가야겠다。

④오늘밤에도 별이 바람에 스치운다。

「序詩」を比較するにあたって、以下の4ヶ所に注目する。第1は、①「죽는 날까지 하늘을 우러러」の「하늘」を「空」と「天」のどちらかで訳すのかという点である。第2は、②「잎새에 이는 바람에도 / 나는 괴로워했다」における「잎새에 이는 바람에도」をどのように訳すのかという点である。第3は、③「모든 죽어가는 것을 사랑해야지」における「모든 죽어가는 것」という「すべての死んでいくものたち」をどのように訳すのかという点である。そして第4は、④「오늘밤에도 별이 바람에 스치운다」における「星」と「風」のイメージをいかに認識し、表現するかという点である。

これらの箇所について、伊吹郷と宇治郷毅がどのように訳しているのか見てみよう。以下は、「序詩」の伊吹郷訳と宇治郷毅訳の本文である。引用中に記されている番号と下線部は筆者による。

伊吹郷訳「序詩 ²⁰⁴ 」	宇治郷毅訳「序詩 ²⁰⁵ 」
① <u>死ぬ日まで空を仰ぎ</u> 一点の <small>はじ</small> 恥辱なきことを、 ② <u>木の葉にそよぐ風にも</u> <u>私は心痛めた。</u> 葉あいにそよぐ風にも わたしは心痛んだ。 星をうたう心で	① <u>死ぬ日まで空を仰ぎ慕い</u> すこしも恥じることなく、 ② <u>葉の間におこる風にも</u> <u>わたしは心をいためる。</u> 星を歌う心で
③ <u>生きとし生けるものをいとおしまねば</u> そしてわたしに与えられた道を 歩みゆかねば。	③ <u>すべて死にいくものを愛するでしょう。</u> そして 私に与えられた道を 歩いていくでしょう。
④ <u>今宵も星が風に吹き晒られる。</u>	④ <u>今宵もまた 星が風をかすめて通りすぎ</u> <u>る</u>

まず、①については、伊吹と宇治郷は「하늘」を「空」と訳している。②については、伊吹は「木の葉にそよぐ風にも」と、宇治郷は「葉の間におこる風にも」と訳している。

次に、③について詳しくみると、伊吹郷の訳をみると、③「生きとし生けるものをいとおしまねば」と訳している。ここからは原文「全ての死んでいくもの（筆者訳）」を「生

²⁰⁴ 尹東柱著、伊吹郷訳『尹東柱全詩集 空と風と星と詩』影書房、1984年。

²⁰⁵ 大村益夫、前掲「朝鮮文学の翻訳—尹東柱「序詞」の翻訳を中心に」156頁。

きとし生けるもの」へと大幅に意識していることが分かる。これに対し宇治郷は、③「すべて死にいくものを愛するでしょう」と訳している。原文の「~해야지」は、「~すべき」という義務を表す意味と、「(~してもしなくてもよいが) ~しないとね」という自分自身や相手に確認を促す意味を持つ。その他の訳者がこの箇所を義務表現で訳す一方で、宇治郷は「愛するでしょう」と尹東柱が自分自身に意志確認を行う場面として解釈していることが特徴的である。

最後に④について詳しくみると、伊吹は④「今宵も星が風に吹き晒らされる」と訳し、「星」が「風」に吹かれる情景を表している。これに対し宇治郷は、④「今宵もまた星が風をかすめて通りすぎる」と訳し、「星」が「風」に擦れるイメージ、つまり流れ星を連想させる表現を採用している²⁰⁶。

これらの訳詩を踏まえて、金時鐘の訳について見ていくことにする。以下は、「序詩」の金時鐘訳である。番号と下線部は筆者による。

金時鐘訳「序詩 ²⁰⁷ 」
① <u>死ぬ日まで天を仰ぎ</u> 一点の恥じ入ることもないことを、
② <u>葉あいにおきる風にさえ</u> <u>私は思い煩った。</u> 星を歌う心で
③ <u>すべての絶え入るものをいとおしまねば</u> そして私に与えられた道を 歩いていかねば。
④ <u>今夜も星が 風にかすれて泣いている。</u>

金時鐘は先の4ヶ所について、①「死ぬ日まで天を仰ぎ」、②「葉あいにおきる風にすら／私は思いわずらった」、③「すべての絶え入るものをいとおしまねば」、④「今夜も星が 風にかすれて泣いている」と訳した²⁰⁸。

金時鐘は①の「하늘」を「天」を訳した。これに関し金時鐘は、その他の尹東柱作品に頻

²⁰⁶ これに関連し、李建済も宇治と同様に、「星」を流れ星のイメージとして解釈できると言及している (이건제 『한국근현대문학의 모더니티』 선인, 2015, pp. 196~197)。これらの違いは、「스치운다」を「스치다」の受身形と解釈するか、「스치다」に補助語である「우」を付け加えたものと解釈するかによって発生するものである。尹東柱は、動詞の語幹に補助語である「우」を付け加える習性があったとされている (윤동주 『하늘과 바람과 별과 시 - 원본 대조 윤동주 전집-』 연세대학교출판부, 2005, p.39)。

²⁰⁷ 尹東柱著、金時鐘訳、前掲『空と風と星と詩』9頁。

²⁰⁸ 同上、9頁。

出する「하늘」の訳を「空」の場合と「天」の場合に訳し分けるべきだと述べ、「序詩」の「하늘」を「天」と訳す理由について以下のように語っている。

朝鮮語ではたしかに空も天も「ハヌル」とはいいます。文化を共有するという事は、書いた人の生活実態も考慮に入れなくてはならない。「死ぬ日まで空を仰ぎ」では間違いなんですね。なぜならユン・ドンジュは敬虔なクリスチャンでありました。一家もそうでありましたから。「死ぬ日まで天を仰ぎ」なんです。平俗な仕草であっても、自分を見つめ直すとき仰ぎ見るのは「天」という概念につきうごかされているときです²⁰⁹。

このように、金時鐘は尹東柱の生活やキリスト教の思想を持っていたことを考慮しながら、「天」と訳したことが述べられている。

次に、金時鐘は②を「葉あいにおきる風」とし、複数の葉の隙間に「風」が「おきる」と訳した。ここで注目すべきは、「이는 바람」を「おこる風」と原文通りに訳さずに、「おきる風」と表現した点である。「おこる」は自然発生する出来事に対して使われるが、「おきる」は人や動物などの生物が主語の場合に用いられる。このことから、金時鐘は「風」を主体的な存在として捉えていることが分かる。

このような訳し方の差異は、③においてより明確にみられる。ここで注目すべきは、「죽어가는 것 (死んでいくもの)」を「絶え入る」と訳した点である。「絶える」には、生物が息を「絶える」という意味と、無生物が「絶える」という意味が含まれる。尹東柱の作品「별세는 밤 (星を数える夜)」には、創始改名によって従来の名前を失った後に、再び名前が甦るイメージが描かれている。「序詞」も同時期に書かれた作品であるため、「序詩」における「絶え入るもの」の一つとして「名前」も含まれると考えられる。このように、金時鐘は生物と無生物が「絶え」、そしてまた再生するイメージを表現したといえる。

最後に、金時鐘は④を「星が 風にかすれて泣いている」と訳した。しかし、原文から「星」が泣いているという意は読み取れない。それにもかかわらず、金時鐘が「泣いている」と訳した理由として、「스치운다」を「스치다」と「울다(泣く)」と解釈した可能性があったと考えられる²¹⁰。あるいは、金時鐘は「星」が意志を持って「泣く」様子を描くために意図的に意識を行った可能性もある。

このように「序詩」において、金時鐘は「죽어가는 것」を「絶え入るもの」と訳し、生物と無生物を「絶え入る」対象であることを表した。また、作中の「風」を自然発生的な現象と捉えるのではなく、意志を持つ対象とした。さらに、「星」が「泣く」という訳からは、

²⁰⁹ 金時鐘、細見和之、藤井たけし他、前掲「日本語の未来、詩の未来」59頁。

²¹⁰ 「스치다」は「国立国語院標準国語大辞典」によると、①相互にそっと触れて過ぎていく。②ある感情、考え、表情等がふっと浮かんですぐに消えていくという意味である。また、「かされる」は『日本国語大辞典』によると、①軽く触れて過ぎる。②はっきりと目に見えていたものがかすかになる。また、消えかかった状態になるという意味を持つ。

「星」に何か別のものを対象化させて描かれていることが分かる。第2章で述べたように、金時鐘は尹東柱を「考えていることや思っていることを目に映るように描き出す」現代詩人と評価している。そのことを翻訳作品に反映させることによって、既存の翻訳にはなかった新しい訳を生み出したのである。

(2) 共通する詩的イメージと自己の相対化

次に、金時鐘が尹東柱の翻訳作業を通して受けた影響が『失くした季節』においてどのように表れているのかについてみていく。『失くした季節』の作品には、尹東柱の作品と共通する詩的イメージや主題が見受けられるものがある。以下では、『失くした季節』において尹東柱との影響が見られる作品をとりあげ、金時鐘作品と尹東柱作品の相違点をテーマごとにみていく。

① 共通する詩的イメージ—「風化する骨」

尹東柱の「序詞」に描かれている「星」が「風にかすれる」というイメージは、『失くした季節』においても同様にみられる。例えば、「春」章に収められている作品「四月よ、遠い日よ。」には、「木と命と葉あいの風と。／かすれていくのだ」と書かれている。この作品には、済州 4・3 からそのままの形で存在し続けている木と命と葉が「風」に「かすれていく」様子が描かれている。つまり、過去の済州 4・3 の記憶が徐々に「かすれて」消えていくことを暗示している。

ここから分かるように、金時鐘と尹東柱にとって「風」とは作品の重要なモチーフである。そのことがよく表れている作品に、尹東柱「또 다른 故郷 (また別の故郷)」と金時鐘「雨の奥で」があげられる。以下では、この2つの作品を比較しながらみていく。

まず、尹東柱の「また別の故郷」は、「私」が故郷に帰った夜、白骨がついてきて部屋に横になった際の心境について描かれた作品である。「また別の故郷の」の尹東柱原文と金時鐘訳は以下の通りである。下線部は筆者による。

尹東柱「또 다른 故郷 ²¹¹ 」	金時鐘訳「また別の故郷 ²¹² 」
故郷에 돌아온 날 밤에 내 白骨이 따라와 한방에 누었다。	故郷に帰ってきた日の夜 私の白骨がついてきて同じ部屋に寝そべった。
어둔 房은 宇宙로 通하고 하늘에선가 소리처럼 바람이 불어온다。	暗い部屋は宇宙に通じており 天のどの果てからか 声のように風が吹き込んでくる。

²¹¹ 윤동주, 前掲『하늘과 바람과 별과 시』 pp. 34~35.

²¹² 尹東柱著、金時鐘訳、前掲『空と風と星と詩』 28~29 頁。

<p><u>어둠 속에서 곱게 風化作用하는</u> <u>白骨을 드러다 보며</u> 눈물 짓는 것이 내가 우는 것이나 白骨이 우는 것이나 아름다운 魂이 우는 것이나</p> <p>志操 높은 개는 밤을 새워 어둠을 짓는다。</p> <p>어둠을 짓는 개는 나를 쫓는 것일게다。</p> <p>가자 가자 쫓기우는 사람처럼 가자 白骨 몰래 아름다운 또 다른 故郷에 가자。</p>	<p><u>くらがりのなかできれいに風化していく</u> <u>白骨をのぞき見ながら</u> 涙ぐむのが私なのか 白骨なのか 美しい魂がむせんでいるのか</p> <p>志操高い犬は 夜を徹して闇を吠える。</p> <p>くら闇で吠えている犬は 私を逐っているのであろう。</p> <p>行こう 行こう 逐われる人のように行こう 白骨に^け気取られない 美しいまた別の故郷へ行こう。</p>
---	--

上の下線部にあるように、作中には「風化作用」する「白骨」が登場する。原文では「風化作用하는 白骨」であるが、金時鐘は「風化していく白骨」と訳した。ここでは、「私」から分裂した「白骨」が、その「白骨」が消えてなくなっていく様子を表している。そして作品の最後には、「私」が「魂」だけでも「故郷」に行こうと決心することで締め括られている。この「白骨」が「風化」することによってその存在が消滅し、「魂」のみ残されているという「私」の分裂と消滅のイメージは、植民地下の朝鮮で生まれ育ち、東京や京都で留学生生活を体験していた尹東柱の心境を描いていると考えられる。

一方、金時鐘「雨の奥で」においても、「風化する」「骨」が描かれている。それは、雨の中に見える置かれたままの椅子について説明する文脈で出てくる。下線部は筆者による。

梅雨ににじんで見えるのは
置かれたままの椅子である。
私から外れた私の居場所のようであり
在ることすらも失くしてしまった
風化さ中の骨のようでもある。
たぶんそれはそこのところで待つしかない何かだ。
去ったあとではけっしてなく
そこで^{ひまつ}飛沫をあげて

誰ともない声がかぐもっているのだ。
行き届いた圃のまさにその茂みの奥で
滴^{した}っても洗われはしない新緑が息吹いている。
もはや雨は自らが洗われたいために降り続くのである。
だからこそ梅雨のなかでは誰ひとり肩を反らさない。
見えてても見えない
ぬかるむ国の田畑が見えないで
そこで濡れそぼっている声が見える。
つくねんとしぶきにはげながら
白い椅子が梢^{こずえ}の向こうでもやっている。

(金時鐘「雨の奥で²¹³」『失くした季節』)

上の下線部にあるように、「風化さ中の骨」は、「茂みの奥」に置かれている「白い椅子」から連想されるイメージとして用いられている。また「椅子」が置かれている「茂みの奥」には、新緑が芽吹き、「誰ともない声」が雨に濡れている様子が描かれている。このように、作中には、「私」が「茂みの奥」の「椅子」—「骨」—「声」を見たことが描かれている。このことから「風化さ中の骨」とは、忘れられた「声」の持ち主のものと考えられる。また、作品の背景は、「梅雨」の季節であることから、「骨」や「声」の持ち主が朝鮮戦争の被害にあった人々と推測できる。その人々が、茂みの中で見つけてもらうために留まり続けるものの次第に「風化」していく様子、つまりは忘れられて「もやっている」状況を描いているのだ。

このように、尹東柱「また別の故郷」と金時鐘「雨の奥で」において、「風化」する「骨」というモチーフが共通して使われたことを確認できた。具体的には、「風」がある対象物を破壊、崩壊させる「風化」の作用を持つということである。その対象物とは「骨」であり、「骨」は尹東柱の場合であれば、「私」の分身を表し、自己が消滅してしまうことを暗示する。一方、金時鐘の場合「骨」は、亡くなった人々を表し、その人々の存在が忘れられ、失くなってしまふ状況を「風化」という表現を用いることで示している。両者には差異はあるものの、「風化する骨」は金時鐘が尹東柱作品を翻訳するにあたって受け継いだ詩的イメージであると考えられる。

②自己の相対化—尹東柱の分裂と金時鐘の分身

次に、両者の作品の創作方法に共通している点についてもみてみよう。第2章で述べたように、金時鐘は尹東柱作品に通じる主題を「自己への問い返し」とし、「自分も見つめられ

²¹³ 金時鐘、前掲『失くした季節』26～28頁。

る対象の「物」に客体化させてしまう方法、つまり書き手の思念すら読み手の目に見て取れる映像として描きだされた詩である²¹⁴」と言及した。この「自己への問い返し」は、金時鐘の作品においても同様に用いられている。このことがよく表れている尹東柱「길(道)」と金時鐘「待つまでもない八月だと言いながら」があげられる。以下では、この2つの作品を比較しながらみていく。尹東柱「道」には、「こちら側」にいる道を歩く「私」と石垣をはさんで向こう側にいる「私」が描かれている。この作品の本文は以下の通りである。

尹東柱「길 ²¹⁵ 」	金時鐘訳、尹東柱「道 ²¹⁶ 」
<p>잃어 버렸습니다。 무얼 어디다 잃었는지 몰라 두 손이 주머니를 더듬어 길에 나아갑니다。</p>	<p>失くしてしまっただです。 何をどこで失くしたのかも知らないまま 両手がポケットをまさぐり 道へと出向いていったのです。</p>
<p>돌과 돌과 돌이 끝없이 연달아 <u>길은 돌담을 끼고 갑니다。</u></p>	<p>石と石と石とが果てしなくつらなり <u>道は石垣をたばさんで延びていきます。</u></p>
<p>담은 쇠문을 굳게 닫아 길 위에 긴 그림자를 드리우고</p>	<p>垣根は鉄の扉^{とびら}を堅く閉ざし 道の上に長い影を垂らして</p>
<p>길은 아침에서 저녁으로 저녁에서 아침으로 통했습니다。</p>	<p>道は朝から夕暮れへと 夕暮れから明けがたへと通じています。</p>
<p>돌담을 더듬어 눈물 짓다 처다보면 하늘은 부끄럽게 푸릅니다。</p>	<p>石垣を手さぐっては涙ぐみ 見上げれば空は気恥ずかしいぐらい青いのです。</p>
<p><u>풀 한포기 없는 이 길을 걷는 것은</u> <u>담 저쪽에 내가 남아 있는 까닭이고、</u></p>	<p><u>ひと株の草もないこの道を歩いていくのは</u> <u>垣根の向こうに私が居残っているためであ</u> <u>り、</u></p>
<p><u>내가 사는 것은、다만、</u> <u>잃은 것을 찾는 까닭입니다。</u></p>	<p><u>私が生きているのは、ただ、</u> <u>失くしたものを探さねばならないからで</u> <u>す。</u></p>

²¹⁴ 金時鐘『原野の詩：集成詩集 1955～1988』立風書房、1991年、174～175頁。

²¹⁵ 윤동주、前掲『하늘과 바람과 별과 시』pp.36～37.

²¹⁶ 尹東柱著、金時鐘訳、前掲『空と風と星と詩』29～31頁。

作中の下線部にあるように、「私」は何かを失くしてしまって途方にくれているが、「石垣」を隔てた向こう側には居残った「私」の存在があるため、そして「失くしたもの」を探すために「私」は歩き続けることが描かれている。この「私」がこちら側にもあちら側にも存在していることは、「私」が分裂している状態を意味する。先にとりあげた「また別の故郷」においても「私」の分裂が描かれている。これらの「私」の分裂は、植民地主義に直面しながら「日本人」に同化させられていく現実と、朝鮮人としてあり続けたいという理想との間で自己が引き裂かれる尹東柱の心境を表している。

一方、金時鐘が「自己への問い返し」を描いた作品「待つまでもない八月だと言いながら」には、「ぼく」と「彼」が対峙する様子が描かれている。この作品の本文は、以下の通りである。

夏が煌めくことはもうないと言いながら
すっかり透けてしまった年月だから
なおのことときめくことはもう夏にはないと言いながら
それでも彼は素知らん顔でひとりの時のぼくをうかがう。

(…中略…)

ために消せない夏もあるのだ。
待ちとおした拳句の彼のあがきが
ぼくの穏当な精神を逆撫でてやまない
彼のその居直りが
性懲りもなく今もってつよがって見せるほど
ぼくの諦めも色をなして口をとがらせる。
まだまだ夏は疼きの内にあるのだと
このぼくがやたらとむきになっていく。

(…中略…)

白む間もなく夏は明けてしまうので
ようやく寝付いた妻の寝息に
ぼくもついて眼をしばたきながら
空咳まじりに
故もなくこみ上がってくるのを嘸みくだしながら
しのめにはほの白くかすんでしまっている眼で
そう、夏はまだ咽んでいと
そっぽを向いている彼に重ねて返してやったのだ。

(金時鐘「待つまでもない八月だと言いながら²¹⁷」『失くした季節』)

上に引用した本文冒頭の「夏の煌め」きや「ときめ」きとは、朝鮮の植民地解放を迎えたことを意味していると考えられる。その植民地解放の「夏」を口先では過ぎ去った輝かしい遠い昔の出来事として捉えようとする「彼」と「穏当な精神」の持ち主である「ぼく」との対峙が描かれている。「ぼく」は「彼」に見つめられることによって、「夏」の記憶を呼び起こされるが、「ぼく」はまだその記憶を克服することができていないことを確認する。そして作品の最後には、「ぼく」は「彼」に「夏はまだ咽んでいる」ことを「重ねて返」していると書かれていることから、「ぼく」と「彼」の間で対話がなされたことが分かる。

この作品を金時鐘のライフヒストリーと照らし合わせて考えると、「彼」と「ぼく」は金時鐘の心境を物語っていると考えられる。具体的には、「ぼく」は現在を生きる金時鐘であり、「彼」は過去の出来事を問い続け、立ち止まるもう1人の金時鐘を表しているといえる。つまり、「夏」の記憶を巡って葛藤する心境を「ぼく」と「ぼく」の分身である「彼」の構図を用いて描いたと解釈できるのである。

このように、金時鐘と尹東柱の作品からは、作中の「私」、「ぼく」が自分は何者であるのかという問いに対し、「私」、「ぼく」から分裂、または分身した「私」、「彼」が答えるという構図がみられた。つまり、両者の作品には、「私」と「私」の分身、分裂したもう1人の「私」の対立構造をもって自己の複雑な心境を表し、ある時には対峙し、ある時には交渉するという手法が用いられているのである。

③それぞれの故郷—尹東柱の「제고장」と金時鐘の「己の在所」

金時鐘と尹東柱が「自己」の分裂／分身という技法を用いながら「自己への問い返し」を行なった理由には、両者が故郷から遠く離れた状態に置かれていたことと密接な関係があると考えられる。そこで、金時鐘と尹東柱が故郷をどのように描かれているのかについて比較しながらみる。ここでは、両者の故郷に対する考えがよく表れている作品として、尹東柱「흰 그림자 (白い影)」と金時鐘「帰郷」をとりあげる。尹東柱「白い影」には、「私」と「故郷」の関係について書かれている。この作品の本文は、以下の通りである。

尹東柱「흰 그림자 ²¹⁸ 」	金時鐘訳「白い影 ²¹⁹ 」
괴로워하던 수많은 나를 하나, 둘 제고장으로 돌려보내면 거리모퉁이 어둠속으로 소리없이 사라지는 흰 그림자,	悩んできた多くの私を ひとつ、ふたつと己の在所に送りせば 街角の暗がりの中へ 音もなく消えてゆく 白い影、

²¹⁷ 金時鐘、前掲『失くした季節』35～39頁。

²¹⁸ 윤동주、前掲『하늘과 바람과 별과 시』pp. 44～45.

²¹⁹ 尹東柱著、金時鐘訳、前掲『空と風と星と詩』37～38頁。

上の引用にあるように、作中には「悩んできた多くの私」を「己の在所」に戻すと「白い影」が消える様子が描かれている。この引用の後には、「白い影」が消え後に「私」は「自分の部屋」に帰って羊のように草を摘むという内容が続く。この作品は、尹東柱が日本の留学中に書かれたことから、「私」の一部を故郷に送る一方で、現実の「私」は自らの部屋に帰り、羊が草を摘むように日本で勉学に励もうという決意表明を表している。そのため、故郷を表す「己の在所」とは、「私」の魂を意味する「白い影」を浄化してくれる理想的な場であると読み取ることができる。尹東柱の場合、それは生まれ育った北間島と推測できる。

一方、金時鐘「帰郷」にも「在所」という詩語が用いられながら故郷に対する考えが書かれている。この作品の本文は、以下の通りである。

故里^{ふるさと}が

帰り着くところであるためには

もう一度ダムに沈む在所^{ざいしょ}を持たねばならない。

(…中略…)

故里が

帰り着く国にあるためには

遠く葬る故郷をもう一度持たねばならない。

(金時鐘「帰郷²²⁰」『失くした季節』)

本文の下線部にあるように、作中には故郷にまつわる詩語が「故里^{ふるさと}」、「在所^{ざいしょ}」、「故里」と多様に用いられている。また、「故里」に帰るところ、または国として捉えるためには「ダムに沈む在所」や「遠く葬る故郷」を持たなければならないことが書かれている。このことから、金時鐘は、「在所」を否定すべき対象として描いていることが分かる。金時鐘は生まれ育ったふるさとの情緒的なイメージを持つ「故里」と差異をつけるために、あえて「在所」という詩語を選択した可能性が考えられる。

これらを踏まえて、もう一度尹東柱「白い影」における「고장」と金時鐘「帰郷」における「己の在所」を比較検討すると、尹東柱の「제고장」は「私」の分身を送り帰す場所であり、理想的な場所を意味する。その一方、金時鐘の「在所」は、否定すべき場所を意味するのだ。この金時鐘の故郷を否定的に捉える視点に関しては、次節で詳しく論じる。

このように、金時鐘と尹東柱の故郷の描き方の相違点を確認できる。それに加え、ここでは金時鐘は尹東柱から「고장」、つまり「在所」という詩語を受け継いだという点についても注目したい。これに関し、金時鐘が故郷を表す原文「제고장」を「己の在所」と翻訳した。

²²⁰ 金時鐘、前掲『失くした季節』134～138頁。

国立国語院標準国語大辞典によると、「제고장」とは生まれ育った地や幼い頃から住んできた地を意味する²²¹。また、「고장」は、漢字語ではなくハングルのみで表記される固有語であるため、ハングルから漢字にそのまま置き換えることができない。そこで、金時鐘は一人称の所有格を表す「제」を「己の」に、「고장」を「在所」に分けて訳出する方法を選択したと考えられる。

ところで、尹東柱作品には、「白い影」意外にも故郷に関する詩語が出てくる。以下の<表7>は、尹東柱作品における故郷にまつわる詩語の原文と金時鐘の翻訳、そしてその使われ方を表にまとめたものである。

<表7>尹東柱作品における故郷にまつわる詩語

作品	原文	金時鐘訳	使われ方
「また別の故郷」	故郷	故郷	美しいまた別の故郷へ行こう。
「白い影」	제고장	己の在所	ひとつ、ふたつと己の在所に送り帰せば
「月を射る」	故郷	ふるさと	幼いころの未練が残っているふるさとへの郷愁もわるくはないが、

上の<表7>からも分かるように、尹東柱は「白い影」においてのみ「제고장」を用いることで故郷を表現した。金時鐘はその「제고장」を「故郷」や「ふるさと」ではなく、あえて違いをつけるために「己の在所」と訳した。

その他にも、金時鐘は金素雲『朝鮮詩集』の再訳を行う際、「고장」を「在所」と訳している。以下の<表8>は、『朝鮮詩集』における故郷にまつわる詩語の原文と金時鐘の翻訳、そしてその使われ方を表にまとめたものである。

<表8>『朝鮮詩集』における故郷にまつわる詩語

作品	原文	金時鐘訳	使われ方
金東鳴「芭蕉」	祖国	故国	故国をいつ離れたのか
鄭芝溶「故郷」	故郷	故郷	故郷に 故郷に 帰ってきても
	제고향	自分の故郷	心は自分の故郷に抱かれることもなく
朴龍喆「故郷」	고향	故郷	故郷を求めて なんとしよう
毛允淑「月のない夜にも」	고향	故郷	真っ青な思想の故郷へと歩む。

²²¹ 『小学館韓日辞典』（小学館、2018年）によると、「고장」とは、①（人が住む）一定の土地、地方、地元、②出身地、ふるさと、故郷、③本場、産地を意味する。

李陸史「青葡萄」	내 고향	わが在所	わが在所の七月は
柳致環「東海岸にて」	나의 無聊	私の在所なさ	太陽は中天にかかって私の在所無さと連なり

上の<表 8>にあるように、金時鐘は李陸史の作品「青葡萄」の原文に出てくる「내 고향」を「わが在所」と訳している²²²。その他にも柳致環「東海岸にて」の「나의 無聊」を「私の在所なさ」と訳していることを除けば、他の故郷表現は、「故郷」や「故国」と訳している。したがって、尹東柱作品の翻訳以降、金時鐘にとって朝鮮語の「고장」に対応する日本語訳は「在所」であるということが分かる。

この「在所」は、金時鐘にとってどのような意味を持つのだろうか。そのことを考える際に手がかりになるのは、金時鐘が自らのエッセーや講演において言及している「在所」の用いられ方である。金時鐘は、2000年の体験証言「済州島四・三事件 52 周年記念講演会」の中で、解放後に朝鮮人としてのアイデンティティを取り戻すために「チェコジャンチャッキ運動（自分の在所運動）」を行ったと述べた²²³。この運動は、朝鮮人になるために農村の小作農を訪ね歩く農村工作文化運動である。金時鐘は、ここで崔賢先生に出会いハングル文字や朝鮮文学について教わったと回想している²²⁴。つまり、金時鐘にとってこの運動は、故郷としての朝鮮を探るとりくみであった。金時鐘は、この運動をカタカナ表記で「チェコジャンチャッキ」と表している。これは朝鮮語の「체고장 찾기」の読みをカタカナで表したものである。それを金時鐘は日本語で「自分の在所」と訳している。さらに、金時鐘は『朝鮮と日本に生きる』においも「自分の在所探し運動」について言及しており、その際も朝鮮語のカタカナ表記のルビを用いて「コジャン」が「在所」であることを示している²²⁵。

以上のように、金時鐘にとって「在所」の背景には、尹東柱の「고장」や「チェコジャンチャッキ運動（自分の在所運動）」の存在があることが確認できる。つまり、「고장」の朝鮮語のカタカナ表記として「コジャン」があり、その翻訳として金時鐘は「在所」という言葉を選びだしたのである。そして、「在所」の意味を「チェコジャンチャッキ運動」と関連を持つものとして捉える場合、単なる「故郷」だけではなく、日本の植民地によって損なわれ、失われた故郷、または本来あるべきであり、本来自分がそこにいるべき場所と読み取ることができる。

以上のような金時鐘と尹東柱の作品を比較分析からは、いくつかの共通するテーマや詩語を発見することができ、金時鐘が受けた尹東柱からの影響を確かめることができた。さらに、金時鐘が尹東柱から受け継いだ作品全体に関連する大きなテーマが「失くしたもの」を探ることであったと考えられる。これに関して、前に言及した尹東柱の作品「道」には、「失

²²² 金素雲は、同作品の同箇所を「わがふるさと」と翻訳した（金素雲訳編『朝鮮詩集』岩波書店、1954年初版、2010年第12刷、189頁）。

²²³ 金時鐘、前掲「記憶せよ、和合せよ」2頁。

²²⁴ 同上。

²²⁵ 金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる』87頁。

くしたもの」を探ることが生きる目的であると書かれていた。しかし、この作品を書いた約4年後の植民地解放の直前に尹東柱は福岡の刑務所で息絶えた。尹東柱の「失くしたもの」は植民地主義に起因するものであるため、彼は人生の最後までそれを見つけることはできなかった。一方、朝鮮の植民地解放から65年後に出された『失くした季節』も尹東柱と同様に、「失くしたもの」を探ることが主題になっている。尹東柱の意志を金時鐘が受け継ぎ、「失くしたもの」が如何なるもので、なぜ失くしてしまったのかについて問題提起し、「失くしたもの」を探し続けること、そしてその結果を『失くした季節』にまとめることによって、金時鐘は尹東柱からのバトンを受け取ったといえるのである。その「失くしたもの」こそ、「己の在所」つまりは自らの故郷であったといえる。次に、『失くした季節』において金時鐘がどのように故郷を見つけようとしたのかについてみる。

第3節 『失くした季節』における故郷探し

(1) 作品からみる故郷観

前節では、金時鐘が尹東柱から作品の制作技法や詩的イメージ、そして故郷に関する詩語を受け継いだということについて考察した。とりわけ、両者の故郷に対する考え方には違いが見られたものの、金時鐘の作品にみられる「在所」という詩語は尹東柱の作品や「チェコジャンチャッキ」の「고장」に由来していることを指摘した。この「在所」という詩語は、『失くした季節』において初めて金時鐘の創作詩に用いられるようになった。また、『失くした季節』には、2000年以降における金時鐘の故郷に対する考え方が反映されている。そこで、ここでは『失くした季節』における故郷の描かれ方に着目する。

金時鐘は、故郷を様々な詩語を用いて表現してきた。彼の初期詩集『地平線』(1955)や『日本風土記』(1957)では、「故郷」、「祖国」という詩語が多く用いられているが、『新瀉』(1970)では、「家郷」が加わり、『失くした季節』(2010)では「在所」、「故里」という詩語が使われている。『失くした季節』には、「故郷」についての定義や概念についても言及した作品が収められている。以下の<表9>は、『失くした季節』において、故郷に関する詩語である。

<表9> 『失くした季節』における故郷に関する詩語

作品	詩語	使われ方
「空」	家郷	捨て置いた墓と／うすれた家郷と
「空隙」	在所	海を渡っても在所が切れず
「帰郷」	故里	故里が／帰り着くところであるためには／もう一度ダムに沈む在所 を持たねばならない。
	在所	
	故里	故里が／帰り着くところであるためには／遠く葬る故郷をもう一度 持たねばならない。

上の〈表 9〉から分かるように、「故郷」を表す詩語としては、「家郷」、「故里」^{ふるさと}、先にも述べた「在所」が使われており、状況に応じて「故郷」を多様な詩語で表現している。また、「故郷」の描かれ方については、「うすれた家郷と／ともに背いた年月は／それはそれで遙かなことであっていいのだ」（「空」）、「故里（ふるさと）が／帰り着くところであるためには／もう一度ダムに沈む在所^{ざいしょ}を持たねばならない」（「帰郷」）という表現があるように、「故郷」が否定すべき対象として描かれていることが特徴的である。そこには、金時鐘が濟州4・3から逃げるような形で濟州島から渡日し、在日朝鮮人として生きていかざるを得なかった心境、すなわち「居着こうにも居着けなかった人と／そこでしかつなぎようがない命」（「村」）と表される彼の体験が投影されている。このような、故郷表現の多様化や故郷を批判的に捉えようとする視点は、金時鐘の故郷喪失の体験に起因していると考えられる。

このことがよく表れている作品として、同章第1節で言及した『失くした季節』の「冬」章に収められている「跳ぶ」があげられる。そこでは、作中の「割れ目の／帰り着けない／種よ」という詩句が、金時鐘の故郷喪失者としての立ち位置を表していると言及した。またそれと同時に、この作品が同時期に濟州島で行われた濟州4・3犠牲者の遺骨発掘作業と重ね合わせながら書かれた可能性があることを指摘した。このように、金時鐘は『失くした季節』において、当時の濟州島における動向を踏まえながら故郷を描いていたと考えられる。

この他にも、金時鐘が2000年以降に実際に濟州島で見たものや、体験したことが作品に描かれている例として、『失くした季節』の「秋」章に収められている「旅」があげられる。「旅」は前節でも述べたように、2007年に金時鐘が濟州島を訪問したことが土台になって創作されたと考えられる。本文は、以下の通りである。

心の地平では
へだたりはせせらぎほどで
年月はそよぐ木の葉のようで
時空は時計の文字盤ぐらいだ。
日にちは部厚い時刻表に綴じられていて
予定はいつも空港の待合室でくたびれている。

心の地平では
祖霊の地と濟州島*とが
在日と溶け合って澄んでいる。
殺戮はいつからか竹林になっていて
竹の子がきりもなく黒く芽生える。
孟宗竹^{もうそうちく}の旨い炊き方^たを
バスガイドはくどくど語り
茶褐色の汁がタイヤの痕^{あと}からじどつと滲^{にじ}む。

心の地平では
旧火山すらむくむく 生きている。
噴煙を噴き上げても誰ひとり逃げもしない。
次つぎと洞窟から村人が現れて
あれは夢だったのだと
禍いを焦がす山を見ている。

うねって流れて駐屯地を呑みつくし
偉大な銅像にも溶岩は迫って
歪んだ顔が折れかかっている。
横暴な一切が覆り 沸き立っても
心の地平ではすべてが静かだ。
いつもと変わらぬ夕日が映えて
色づいた葛^{かづら}が軍事境界の金網を這い上がっている。

心の地平では
町は蟻塚で
国は蜃気楼^{しんきろう}で
年月は さざ波程度に吹き過ぎる。

*済州島＝韓国最南端の旧火山の島で、韓国切っただけの観光地としても知られている。その反面「四・三事件」という、解放（終戦）直後の悲惨な島民殺戮の暗黒史を秘めている、島でもある。

（金時鐘「旅²²⁶」『失くした季節』）

この作品の「心の地平では／祖霊の地と済州島とが／在日と溶け合っただけ澄んでいる」という描写は、金時鐘の両親のクツ（祭礼）を体験したことに基づいた発想であったといえる。実際、金時鐘は2007年に済州島を訪れた際、生まれて初めて両親のクツを行った。その時の様子は、NHK キュメタリー番組『海鳴りのなかを～詩人・金時鐘の60年』で放送された。以下は、金時鐘、金石範、文京洙が対談の中でその時の心境について話し合った内容である。

文京洙：NHKで『海鳴りのなかを一詩人・金時鐘の60年』が放映されたのが、2007年

²²⁶ 金時鐘、前掲『失くした季節』50～54頁。

9月ですが、金時鐘先生が濟州に行かれて、親戚の方とお墓参りをされ、神房^{シンバン}と呼ばれクッ（祭礼）で供養される場面が大変印象的でした。

金時鐘：私は、唯物史観を世界観としている人間ですので、濟州島の迷信めいた巫女^{みこ}の神房^{シンバン}というのがずっと嫌いでした。ところが、潜伏中のある日、石垣の隙間から垣間見た神房のクッの光景は、記憶に食い込んで絵のように船名に思い出すんです。

（…中略…）

金石範：だけど、神房して気持ちがちょっとは晴れたやろ。

金時鐘：晴れたって、本当に救われた。神房は六時間くらいかけてやるんだ。うちの母方の親戚もほとんど来て、その叔父貴の長男の兄貴も一家挙げて来てくれていた。祭礼の儀式が終わったあとに声をかけてくれたんや。それに救われた。僕の手を握って「シジョンイタスンアニナン（時鐘のせいじゃないから）」。

金石範：「時鐘のせいじゃない」というわけや。

金時鐘：「アボジウンミョンイヨシナン（親父の運命だったんだから）」、「クロンシデヨシナン（そういう時代だったんだから）」と繰り返しながら涙ぐんでくれていた。

金石範：「お父さんの運命だった。そういう時代だったんだ」。

金時鐘：それで救われたんや。神房のおかげやな。「これからはもっと気軽にマンナジャ（会おう）」とも言ってくれた。

金石範：それ、神房のおかげか（笑）。時鐘自身が信じないと言ってるけどね、やはり無意識のうち、やっているうちに時鐘も変わっていくわけだ。

金時鐘：だから、僕は信じるようになった。もう、故郷^{コトノシラ}の災いはその土地の神じゃなければ鎮めてくれない。日本の各地域に土産神^{うぶすながみ}がいるのと同じで、濟州はそれが神房^{シンバン}。改めて浄土信仰の素朴さを知った²²⁷。

この対談において、金時鐘はクッを行い、「本当に救われ」、濟州島に住む親戚たちと和解することができたと述べている。そして、「故郷の災いはその土地の神じゃなければ鎮めてくれない」と言いながら、鎮魂を鎮めることの重要性を強調した。つまり、濟州4・3の現場であった濟州島が、今では祖霊となり、在日している金時鐘も時を経てようやく自身の両親を供養することができたという心境が、この一文から読み取れるのである。金時鐘は、両親のクッを経て、ようやく濟州島と在日が「溶け合う」ことができたのである。

そうした過程の中で、金時鐘が供養する対象は、彼の両親や濟州島に存在する死者だけに留まらなかった。『失くした季節』の発表以降、金時鐘は、対馬において濟州4・3の慰霊祭を行う必要を唱え、実際に慰霊祭が遂行されたのである。次に、『失くした季節』以降の対馬における慰霊祭に関連する金時鐘の動向をみていく。

²²⁷ 金石範、金時鐘、文京洙編、前掲『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか：濟州島四三事件の記憶と文』206～210頁。

(2) 対馬・濟州慰霊祭と故郷の発見

対馬では、2014 年から対馬・濟州慰霊祭が執り行われている。対馬での慰霊祭は、金時鐘がその必要性を主張して始まったものである。その経緯を説明すると、以下の通りである。対馬には、1950 年代に数百体の朝鮮人の遺体が漂着したという出来事があった。当時、朝鮮人の遺体を目撃し、埋葬したという江藤光氏の証言によれば、同じ頃の 1950 年代には、長崎県対馬の佐護湾には数百体の遺体が漂着したという。江藤光氏は、流れ着いた遺体の処理や供養を行っていたということ、自身が亡くなる直前に、息子である江藤幸治氏に伝え、遺体の人々のための供養塔を建立してほしいという旨を遺言として残した。その遺言に従い、江藤幸治氏は、2007 年に対馬に供養塔を建立し、毎年お参りをしていた。江藤光氏も江藤幸治氏も、数百もの遺体が対馬海流に乗って朝鮮半島の方から来たということ、朝鮮戦争による死者が流れついたということと理解していた。供養塔の碑文にもその旨が書かれている。しかし、江藤幸治氏が濟州島で濟州 4・3 が同時代に起こっていたという事実を知り、濟州島から遺体が流れ着いた可能性があるということを知ったのは、2016 年以降のことであった。

一方、2013 年に金時鐘が濟州島を取材で訪問した際、同行した金時鐘の友人である長田勇氏に「対馬に行って慰霊祭をしたい」という旨を話した²²⁸。その背景には、金時鐘が濟州 4・3 当時、タブトンという現在の濟州島濟州市にある城内と呼ばれている地域にある港で、船で海の沖まで連れていかれる島民たちの姿を目撃し、また同じ港の浜に打ち上げられる水死体を目撃したという体験があった。金時鐘が当時見たものとは、濟州 4・3 当時に行われた水葬という虐殺方法、または遺体の処理方法によって殺された水死体であった。水葬とは本来、死体を海に葬流することであるが、ここでは生きてまま海に投げ入れて虐殺することを指す。文京洙によると、1948 年の 10 月以降、多くの島民が「赤色分子」、「左翼（南労党）フラクション」、「予備検束者²²⁹」として処刑され、虐殺の痕跡を消すために濟州沖に投げ捨てられたとされる²³⁰。水葬された水死体は、浜に打ち上げられることもあれば、戻って来ずに海に沈められたまま、あるいは海流に乗って移動し日本列島に漂着するケースも多くあった。濟州島で水葬が行われた現場から海流を辿っていくと対馬海流と合流し、その先

²²⁸ 長田勇氏は、以前にも沖縄の阿嘉島において従軍慰安婦の慰霊祭を企画し、沖縄において濟州 4・3 集会を行っており、その繋がり金時鐘と出会うことになった。筆者は、2023 年 5 月 28 日に、長田勇氏から対馬で慰霊祭を行うに至った経緯について直接話を聞いた。その他の資料としては、以下を参照。『71 周年 第 3 回 濟州島四・三事件 犠牲者 対馬・濟州慰霊祭 報告書』濟州 4・3 漢拏山の会、2020 年。

²²⁹ 文京洙によると、1950 年 6 月 25 日の北朝鮮の南進を受け、韓国政府は 7 月初めから刑務所服役者や国民補導連盟員・要視察者を「予備検束」し、全国各地で殺害した。この「予備検束」は、植民地下の 1941 年の治安維持法の改定によって導入された予防拘禁制度にその起源を発している。濟州島でも保導連盟が組織され、その多くが相次いで虐殺された。1950 年 8 月 4 日、濟州警察署や酒精工場に押し込められていた予備検束者数百名が、濟州沖合で水葬された。8 月 19 日には濟州警察に収監されていた数百名の予備検束者が濟州飛行場で銃殺され闇埋葬された（文京洙、前掲『濟州島四・三事件』137～138 頁）。

²³⁰ 文京洙、前掲『濟州島 4・3 事件：「島タムナのくに」の死と再生の物語』129～130 頁。

には、江頭光氏が多くの朝鮮人の遺体を見つけた長崎県の上対馬にあたるのである。金時鐘が対馬で慰霊祭を行いたいと思った背景には、自らが目撃した水葬死体が対馬に漂着しているはずだという確信があった。そして、金時鐘はその思いを友人であり、日本で様々な取り組みを行なっている長田勇氏に対馬で慰霊祭をしたいという胸の内を明かしたのである。

その後 2014 年には、金時鐘と長田勇氏が中心となり、第 1 回目の対馬・済州慰霊祭を対馬の峰町で実施した。その後、2016 年に江藤幸治氏が建立した「供養塔」に関する記事が新聞に掲載されたことにより、金時鐘と長田勇氏は初めて「供養塔」の存在を知ることになる。長田勇氏は、すぐに江藤幸治氏に会いに行ったところ、江藤氏は供養塔のある場所で韓国式の慰霊祭を行いたいと話し、2018 年 9 月 16 日には、第 2 回目の対馬・済州慰霊祭が「供養塔」のある上対馬の佐護湾で執り行われた。以下の〈表 10〉は、慰霊祭のパンフレットに記載された説明文である。

済州港ターミナル向かい側に位置する旧酒精工場は、4・3 の時に住民たちの収容所であり監獄であった。1949 年 3 月 2 日、済州道地区戦闘司令部が設置されると、武装隊との全面戦を繰り広げる一方で、「下山すれば生かしてやる」という帰順作戦を展開し、多くの人々が下山し、収容された。6・25 が起こると、刑務所に収監された彼らは、どこかに連れられて集団虐殺された。再検束されて連行された人々を済州埠頭の沿海に、石をつけて放り投げて水葬したという話もある。

その時期に上対馬の佐護湾に数百体の死体が浮かび、それを引き上げて心を込めて埋葬してくれた日本人がおり、その方の御子息(江藤幸治氏)がご尊父の遺志を受けて、2007 年 5 月に供養塔を立てて、済州で起こった歴史の痛みを後世に伝え、平和の大切さに目覚めさせるために、奥さんと毎年お参りをしています。

済州でも 2001 年から 2008 年まで追慕祭が奉じられた。今年は済州 4・3 ハルラ山会とチルモリ堂ヨンドウングッ保存会が主管し、実行委員会(金時鐘氏 江藤幸治氏)を作って主催する日韓共同の慰霊祭を、済州島では 4 月 2 日に執り行い、対馬では 9 月 16 日に奉じる。

ここには、済州 4・3 や朝鮮戦争時の水葬の犠牲者の遺体が対馬に漂着したこと、また、その遺体を埋葬、供養した対馬の人々の話を基に対馬で慰霊祭を行うに至った経緯について説明されている。そして、慰霊祭では、死者を慰霊する朝鮮半島の伝統的な儀式であるクッを執り行うこと、実行委員を金時鐘氏、江藤幸治氏とすることの意義についても書かれている。

2018 年の対馬での慰霊祭には、金時鐘の参加は叶わなかったが、追悼辞が寄せられた。以下の引用は、その一部である。

江藤幸治さまのご尊父が吊ってくださった何百体もの漂着遺体の多くは対岸とも言う

ていい釜山あたりから海流に乗って打ち寄せられた一九五〇年前後の無残な虐殺死体です。その中には時期を同じくして済州海峡を漂ってきた四・三事件の、恨みつきない水死体も当然含まれていたものと推測されます。なぜなら済州海峡の海流は、対馬海峡で東西に分かれて日本本州北部沖合いで合流する黒潮の分流、すなわち対馬暖流とつながっており、わが国韓国と対馬は地勢学的にも必然の交流を生ましめる歴史性を共有してきたつながりが、そこには働いているようにさえ思えてならないからです。

(…中略…)

その李承晩政権は朝鮮戦争を前後して拘束していた四〇数万人からの予備検束者を、「^{バルゲンイ}赤狗」(共産主義^{いぬ}の狗)として公々然と虐殺粛清しました。済州島四・三事件はまさに、そのジェノサイド的虐殺の走りともなった惨劇だったのです。

日韓親善の橋渡し役を歴史的に担ってきた友好の島対馬で、犠牲を強いられた水死者たちを追悼することはそのまま、植民地統治後の日韓の実態を省り見る、更なる契機ともなっていくでしょう。

このように金時鐘は、追悼辞において、対馬に漂着した「無残な虐殺死体」は、4・3の犠牲者のものであったと推測できると言及した上で、済州4・3を「ジェノサイド的虐殺の走りともなった惨劇」と表現している。そして、対馬を韓国との交流を生む歴史を共有している場とし、対馬で済州4・3の慰霊祭を行う意義について、「犠牲を強いられた水死者たちを追悼することはそのまま、植民地統治後の日韓の実態を省り見る、更なる契機ともなっていく」と述べている。

金時鐘は、翌年の2019年9月29日に同じ場所で開催された第3回対馬・済州慰霊祭に参加し、そこでも追悼の思いを語った。以下は、その内容の一部である。

戦前戦後の記憶はもはやないに等しいこの頃です。朝鮮戦争が始まった1950年前後して、対馬に流れ着いた数百体からの無念な水葬虐殺死体は、現にこうして供養塔まで建立されて上対馬の渚でざわざわと風音をたてています。朝鮮と日本の消しえない近現代史のひずみを、今に証しだててもいるのです。この供養塔の前に佇めば、浮かばれない死者たちの霊が、私たちを海越えて引き合わせているかのような気さえします。本日の慰霊祭にわざわざご参列くださっている日本の心ある友人たちに申しあげるには気が退ける話ではありますが、済州島の4・3事件も、朝鮮戦争前後して引き起こされた四十数万人からの予備検束者虐殺も、ひいては南北に分断された朝鮮半島の民族的悲劇さえも、元を紐せばかつての帝国日本の植民地統治に由来します。

(…中略…)

済州島四・三事件で酸鼻を極める虐殺をほしいままにした警察幹部、討伐隊隊長クラスはみな大日本帝国軍人の将校だった者、または朝鮮総督府特高警察官であった者か、親日右翼の名だたる顔役であった者たちでありました。この供養塔は無念な死者を慰霊して

いるだけではなくて、かつての日本の贖罪しよくざいの一端をも、海鳴りの中でさらしている記念碑的供養塔にさえなっているともいえます。

上の引用のように、金時鐘は「無念な水葬虐殺死体」について言及した後、「供養塔の前に佇めば、浮かばれない死者たちの霊が、私たちが海越えて引き合わせているかのような気さえ」と述べている。また、2018年と同様、「虐殺」が行われた根本的な原因には日本の植民地統治があったということを主張している。その脈絡から、最後には「この供養塔は無念な死者を慰霊しているだけではなくて、かつての日本の贖罪しよくざいの一端をも、海鳴りの中でさらしている記念碑的供養塔にさえなっている」と述べている。

このように、金時鐘は慰霊祭が行われる度に、自身の思いを追悼辞に込めて表現してきた。それらに共通する内容は、済州4・3の体験者として実際に目撃した虐殺や、「水葬」による犠牲者についての証言を行うこと、済州4・3や朝鮮戦争の根源である日本の植民地統治の責任を問うこと、そして何よりも対馬で済州4・3による死者を追悼することであると考えられる。

金時鐘にとって、済州4・3の犠牲者を対馬で慰霊するということは、故郷である済州島と離れたまま、日本において済州島と間接的につながる行為であると考えられる。また、金時鐘は対馬に漂着して済州島に帰れない犠牲者が済州島を追われるように去らなければならなかった自らの立ち位置と重ね合わせたからこそ、対馬で慰霊祭を行う必要性を唱えたのである²³¹。

以上のように、済州4・3体験証言と『失くした季節』の発表前後における故郷にまつわる金時鐘の動向を見ると、済州4・3による死者たちを在るべきところに帰すことを文学活動や対島の慰霊祭を通して試みてきたことが確認できる。それは、『失くした季節』の作品にも描かれている済州4・3や故郷に関する描写にも表れている。このような金時鐘の2000年以降の一連の動きは、彼自身の故郷と向き合いながら故郷を再発見することに繋がったことを意味する。特に、『失くした季節』発表後の対馬における慰霊祭に関連する取り組みを行うことによって、日本において済州島とつながる中継地の対馬を見つけたのであったのだ。

これらを踏まえた上で、『失くした季節』以降の対馬での取り組みとあわせて考えなければいけないことがある。それは、金時鐘にとって非常に大きな衝撃を与えた出来事、すなわち2011年に起こった東日本大震災についてである。『失くした季節』を発表した8年後に金時鐘は第8詩集『背中の地図』を発表した。この作品は、3・11をテーマに編まれた詩集である。次の第Ⅲ部では、『背中の地図』について詳しくみていく。

²³¹ 2020年以降の対馬における慰霊祭は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により延期され、2023年9月17日に第4回目の慰霊祭が執り行われる予定である。また、現在供養塔の横に金時鐘の詩碑を建立する計画が進められている。

第Ⅲ部 『背中の地図』(2018) の作品分析

第6章 『背中の地図』(2018) からみる金時鐘の体験と東日本大震災

第1節 『背中の地図』の制作背景と意図

2018年に発表された『背中の地図』は、2011年3月11日起こった東日本大震災(以下、3・11)をテーマに編まれた詩集である²³²。第Ⅰ章「山濤^{やまなみ}のあと」、第Ⅱ章「日は打ち過ぎて」、第Ⅲ章「禍いの青い火は燃える」の3章からなる。各章9篇の詩が収められており、全部で27篇の詩が収録されている。これらの詩は、2011年から2018年にかけて発表されたものであり、本詩集のために書き下ろされた作品、初出を別に持つ作品、または初出を一部修正した作品がある。

『背中の地図』の「あとがき」によると、金時鐘は3・11が起こったことにより、「日本のこれまでの詩の在りようをも、破綻させずにはおこななかった」、「詩の書かれるいわれが根底からひっくり返ってしまった」と述べている²³³。このように、3・11は詩人としての金時鐘の創作活動に大きな影響を与えた出来事であった。

しかしながら、『背中の地図』は、ただ3・11から受けた衝撃について書かれた詩集ではない。これに関して、金時鐘は、3・11を体験した者として、「どうすれば「記憶に沁み入る言葉」が紡ぎだせるのか²³⁴」と問いながら作品を書いたと述べている。ここで金時鐘が「記憶に沁み入る言葉」と語る際の「記憶」とは、一体何を指すのだろうか。3・11は金時鐘に大きな衝撃を与えたが、その衝撃は、彼の無意識の中に沈潜していたトラウマともいえるような体験の「記憶」を呼び起こすものであった。その一つは、濟州4・3の「記憶」であり、もう一つが1959年から始まった帰国事業の「記憶」であると考えられる。本稿では、『背中の地図』を在日朝鮮人として生きてきた金時鐘の人生を振り返るために編まれた詩集と位置付ける。その上で、金時鐘の個人的な「記憶」が3・11の体験とどのように交差しながら描かれているのか明らかにする。

『背中の地図』の冒頭には「序詞」が置かれており、詩集のタイトルである「背中の地図」に込められた意図が述べられている。以下は「序詞」の本文である。

ノアの洪水を思わせた東日本大震災の地、東北・三陸海岸は、日本列島を形づくっている本州の背中にあたるところのように私には思える。振り返っても自分では見えない、運

²³² これに関しては、岡崎享子「金時鐘『背中の地図』(2018)と三・一一東日本大震災—濟州四・三と帰国事業の観点から—」『立命館文学』第679号、2022年9月26日、25～38頁を参照。

²³³ 金時鐘、前掲『背中の地図』136～137頁。

²³⁴ 同上、31頁。

命の符丁が貼り付いているかのような背面だ²³⁵。

ここに記されているとおり、「背中」とは、日本列島の裏側という意味で、3・11 で大きな被害を受けた「東北・三陸海岸」を比喻する言葉として用いられている。

その一方で、「背中」は人間の身体部位、とりわけ金時鐘本人の手が届かず目に見えない場所としても用いられている。これに関しては、3・11 が起こった当時、金時鐘が実際に体験した実話にもとづく作品「背後は振り返れない」で次のように描かれている。

むずかゆいとか
刺されて痛^{いた}かゆいとか
どのようになじで肘を曲げて角^{みど}を立てても
右が駄目なら左の指先とんがらせて
這わせてみても
年寄りの骨格ではどうにもならない一点が
背中にはあって
三面鏡を背に映したところで
振り向けばなおその一点はねじった方向の
側面に隠れて眼^{なまこ}からますます遠くなってしまう。

(金時鐘「背後は振り返れない²³⁶」『背中 of 地図』)

この後に「ばつ悪くも私はそのとき新幹線のトイレの中にいた」と続くが、これは金時鐘の実話に基づく。これに関し、『背中 of 地図』の「「渴く」によせて²³⁷」には、3・11 が起こった当時、金時鐘が高見順賞の授賞式のため東京に行く途中の新幹線の中にいたことが記されている。また、「背後は振り返れない²³⁸」に書かれているように、「私」が新幹線のトイレの中で、「年寄りの骨格ではどうにもならない」「背中」の「一点」に手を伸ばそうとしているところに、3・11 が起こったことが記されている。地震が起こった直後、「私」は「どうにもならない何か／日本で一番手の届かないところで突発」したことを感じ取り、「自分の背中に亀裂が走るのを覚え」る。その後、状況を把握した後に、もう一度「自分の背中をまぐって」みても、やはり「一点」には届くことはなく、何が取り付いているのかを確認できない、という内容で詩は締め括られる。

このように金時鐘は、「背中」という言葉に、日本の裏側である3・11の被災地と、自分

²³⁵ 同上、6 頁。

²³⁶ 同上、70～71 頁。

²³⁷ 同上、30～31 頁。

²³⁸ 同上、70～75 頁。

の手が届くことのない見えない場所という二重の意味を持たせている。このことは、「背後は振り返れない」の中で、「事はいつも自分のいないところで起き／自分では見定めようもないところで／異変は突発する」という箇所からも読みとれる。

それでは、「背中の地図」の「地図」にはどのような意味があるのか。同じく「背後は振り返れない」には、3・11の被災地である東日本の地理的位置付けについて次のように言及している。

「ウラ^{ニホン}日本」とはたしか
脊梁山脈を北へ超えた
日本海よりの地方のはずだ。
大津波はまさにその裏のうらを衝いて
弓なり状の本州の背を襲ったのだ²³⁹。

(金時鐘「背後は振り返れない²⁴⁰」『背中の地図』)

ここに記されているように、金時鐘は日本列島を縦断する脊梁山脈を境に日本海側の「ウラ^{ニホン}日本」と太平洋側のオモテ日本があると認識している。これに関しては、『新潟』(1970)の冒頭にも「脊梁山脈の彼方に／日本の表裏を劃す大地裂帯があることは／案外知られてない確証の一つだ」と書かれている。金時鐘は朝鮮半島で満20歳まで過ごし、渡日後も彼の眼差しは、「ウラ^{ニホン}日本」側から朝鮮半島に向いていた。さらに、『新潟』で描かれた帰国事業も「ウラ^{ニホン}日本」側の出来事であった。

このように、金時鐘は、彼の経験にもとづいて作られた「地図」を持っていたのだ。そして、金時鐘は、3・11を自身の「地図」の上にはない範囲、あるいは見ようとしてこなかった「死角²⁴¹」で起きた出来事と捉えた。金時鐘は、「東北は結局のところ列島の背すじあたりで呻いていて／そこは振り向いても見えはしない／昏い^{くら}背中だ。／忘れ果ててしまった何か／打謎^{だめい}の符丁のように貼り付いている²⁴²」と、自省しながら繰り返し述べる。金時鐘は、3・11と向き合う中で、「忘れ果ててしまった何か」があることに気付き、それが何であるのかを探ろうとする。その過程の中で、彼は、「ウラ^{ニホン}日本」で自身が体験した個人的な記憶を思い起こしたと考えられる。その個人的な記憶とは、3・11から連想される済州4・3と帰国事業である。そこで次節では、『背中の地図』において、3・11の体験と金時鐘の個人的体験がどのように重なり合うように描かれているのかについて考察する。

²³⁹ 同上、72～73頁。

²⁴⁰ 同上、72～73頁。

²⁴¹ 同上、74頁。

²⁴² 同上、64頁。

第2節 3・11と重なり合う濟州4・3描写

(1) 「また そして 春」—濟州4・3の再体験

『失くした季節』において、金時鐘にとっての「春」は、多くの人々に残虐な死をもたらした「季節の終わり」を意味するものであった。この季節観は、『背中地図』においても見てとることができる。3・11が起こった3月11日は、「冬」が終わりを告げて、まさに「春」を迎えようとする季節であった。『背中地図』においても「春」をテーマとする詩が数編収められているが、そこには濟州4・3の「春」のイメージが重ね合わされている。以下では、『背中地図』の中から「春」をテーマにした作品をとりあげ、濟州4・3の記憶と3・11の体験がどのように結びついているのかについて考察する。

『背中地図』の第Ⅱ章「日は打ち過ぎて」には、「また そして 春」という作品が収められている。

道だけが整えられた
人気のない通りを歩いていった。
何かに引っかけた声のように
風が吹きさらしの窓枠で鳴っていた。
小学校もいまだ立ちつくしたままで
校庭では入りまじった声が
剥き出しのピアノ線のようにこもっていた。
早くもうす闇は麓をおおい
陰影はしぶきを上げて足許から舞い上がった。

すべてがうす墨の絵のように淡かった。
秋の名残りの乾いた雑草も
閉ざしたままの家の門も
いなくなった人たちの思いと共にあり
災禍をくぐり抜けた多くの顔は重なり合って透明で
うすほんのり木々のあわいを染めては流れた。
すべてがすでに自然を象^{かたど}ってたたずんでいるのだ。
離散は散り敷き雪が舞った。

生きているからこそ目にする光景だ。
つい先だっの春のように年が変わり
いなくなった村も丘も雪に埋もれて
思いは裸木^{はだかぎ}そのままにそこにつっ立っている。

記憶もさぞずっしり雪の下で震えていることだろう。
仮住まいの間仕切にも間もなく明かりが点り
老夫婦の丸まった背も浮かび出るはずだ。
私は私で帰る当てのある家路につき
車窓を透かして浮かんでいる自分の顔を
見つめるともなく覗いているに違いない。
春だ、なんてつぶやきながら。

(金時鐘「また　そして　春²⁴³」『背中の地図』)

この作品には、特定の地名が記されていないが、「災禍」や「仮住まい」という言葉から、震災後の冬の被災地を描写したものと考えられる。作品の前半では、「人気のない通り」、立ちつくしたままの「小学校」、校庭にこもった「声」、「閉ざしたままの家の門」などが描かれ、「すべてが墨の絵のように淡」く、「自然を象^{かたど}ってたたずんでいる」だけであることが記されている。このように、この詩では、震災の後に生き残った者が、3・11によって取り残されたものを確認するという内容となっている。

3・11の被災地に取り残されたものを描写した詩は、『背中の地図』の中に数多く登場する。例えば、作品「風のなか」では、「その日」のままに立っている「家」、「スーパー」、「うどん屋」、野球少年の「白い影」などといったものが出てくる。また、他の作品「エレジーの周り」では、取り残されたものとして、犠牲になった人々の「声」が描かれている。このように、残された者が、失われたものと取り残されたものを確認するというテーマは、『失くした季節』に収められた済州4・3と関連する作品にも共通するものである。

「また　そして　春」においても、作中の登場人物である「私」が取り残された存在として描かれている。そして「私」は被災地を目にしながらも、「車窓を透かして浮かんでいる自分の顔を／見つめるともなく覗いているに違いない。／春だ、なんてつぶやきながら」という場面で締め括られる。この場面は、「私」が被災地を訪れ、現地の様子を確認した後、電車に乗って帰路につくまでの間に「車窓」に映る自分自身を覗いている状況を表している。

ここで「私」が「車窓」に反射している自分を見る、とはいったい何を意味しているのだろうか。これについて詩の中では、「私」が被災地で残されたものを確認する中で、雪の下で震える「記憶」の存在に思いを馳せる。つまり、3・11の被災地で金時鐘は過去の「記憶」を発見したのである。このように、帰路につく「私」が「車窓」で自分を覗くとは、金時鐘本人が自らと向き合い、過去の「記憶」と出会い直す行為をあらわしている。

このことは、次に続く「私」の「春だ」というつぶやきでより明確になる。これに関し、『失くした季節』でも確認したように、金時鐘にとっての四季は「夏」の解放に始まり「春」

²⁴³ 同上、56～59頁。

の濟州4・3で終わるものであった。このように考えると、作中で「私」が「春だ」とつぶやいたのは、雪に覆われた「冬」の被災地を通じて濟州4・3の「春」を思い出している状況を描いたと考えられる。「冬」の被災地と、濟州4・3の「春」を交差させることで、やがて訪れる「死」の季節である「春」のイメージをより一層浮き彫りにさせているのである。

(2) 「弔い遙か」―死者を描く

『背中の地図』では、死者に関する描写が克明になされている点が大きな特徴となっている。その代表的な作品として、ここでは第I章「山濤^{やまなみ}のあと」に収められている作品「弔い遙か」をとりあげる。

生身^{なまみ}はからみ合った流木の
澱^{よど}みの底でずり落ちていた。
判別がつかぬほど
人間を脱した^{なきがら}亡骸^{なきがら}だった。
夜どおし台風の余波の雨がしぶき
人々は息を詰めて還らぬ家族の権化を拝んだ。
私の両手は合わさったまま
固まっていた。
たしかに潤ってはいった手だった。
天外の青い火を引き入れて
団居^{まどい}を浮かび上がらせた村だった。
その年の春
町ごと浚われて人がいなくなり
この夏もまた方々で山がくずれて
人々が消えた。
人の居つけない空白があたりを払い
つと沈黙が立ち上がって
バスの運転手の顔を振り向かせた。
私は口までがこわばった。
瞳孔がない、彼は死人だ。
積まれた^{がれき}瓦礫^{がれき}の間を
ボランティアの善意が乗り合わされて走っているのだ。

(金時鐘「弔い遙か²⁴⁴」『背中の地図』)

²⁴⁴ 同上、21～25頁。

この作品では、「生身^{なまみ}はからみ合った流木の／澱^{よど}みの底ですり落ちていた。／判別がつかぬほど／人間を脱した亡骸^{なきがら}だった」とあるように、死者の描写から始まる。その後も、死んで「瞳孔がない」「バスの運転手」様子が描かれている。その他の作品「禍は青く燃える²⁴⁵」にも、「憩^{やすら}わせていた船まで押し上げて／山濤^{やまのみ}はあまたの生涯を沖へ沈めた」、「海の底で泥まみれの積^{かかわら}の下で／土砂につかえた動けぬ命が噓^{うそ}せている。／息せききった村人たちの懸命な手を待ちながら／拉^{ひし}げて固くなっている」にも死者の描写がなされている。この「山濤」は、『背中^{せなか}の地図』の第1章の題目「山濤^{やまのみ}のあと」にも使われている言葉である。さらに、作品「夜の深さを 共に²⁴⁶」に「神々の深い溜息^{ためいき}に渚^{しづ}がたわみ／迫^{せま}り上がった海が山濤^{やまのみ}となって／いつときに列島の背を打ったのです²⁴⁷」と記されているように、津波をあらわす比喩表現である。このように『背中^{せなか}の地図』には、津波や災害で亡くなった死者を連想させる描写が数多く登場する。

いったいなぜ、金時鐘はこのように津波による無残な死者の姿を詳細に描いたのだろうか。それはやはり、済州4・3の体験がその背景にあると考えられる。第4章で述べたように、金時鐘は2000年に開催された講演会において済州4・3の体験を始めて公の場で語った。そこで金時鐘は、済州4・3の最中に「豆腐のおから」のような状態の死体を実際に目撃したと述べている。以下は、その状況について証言した内容である。

ゲリラ側に仕立てられた民衆を針金で括って五、六人単位で海に投げ込んで虐殺をした、その死体が数日たつと浜に打ち上げられてくる。私の育った済州島の城内の浜は砂利浜ですが、海が荒れると砂利がグォーッと鳴って響くんです。そこに針金で手首を括られた水死体が打ち上げられてくる。何体も何体も。海に浸かっていたために、その体は豆腐のおからのようになっていて、波が寄せるたびに向きを変え、皮膚がずるずるとずり落ちるんです。明け方から遺族たちが三々五々集まってきて、死体を確認する²⁴⁸。

この証言の中で語られている「ゲリラ側に仕立てられた民衆を針金で括って5、6人単位で海に投げ込んで虐殺」とは、前章で述べたように、済州4・3の中で頻繁に行われた水葬を意味する。これに関して、金時鐘は、2019年9月29日に行われた第3回対馬・済州慰霊祭に参加し、そこで行われたインタビューで水葬の死体を目撃したことを次のように振り返っている。

²⁴⁵ 同上、115～120頁。

²⁴⁶ 同上、129～134頁。

²⁴⁷ 同上、131頁

²⁴⁸ 金時鐘、前掲「記憶せよ、和合せよ」『図書新聞』1頁。

事件の当時、水葬が始まったのは 48 年 10 月末頃から。当時アルコール工場があった場所で、今は無くなったと思いますが、米軍の小さな船に手を縛られた人々を乗せて連れて行ったのを二度見ました。(…中略…) タプトンで水葬された死体が上がってきたのも二度ありました。水に入れられて長い時間経ったため、(…中略…) 水の流れに押したり引いたりされて、骨になります。肉が剥がれて。記録には、500 数体が水葬され虐殺されたとあるのですが、実際に肉体が上がってきたのは、そんなにありませんでした。です。で、その頃済州の海流から流れ、対馬のなにわ海流に合流して対馬に漂着したのでしょう²⁴⁹。

このように金時鐘は、済州 4・3 当時、水葬のために連行される人々を 2 度も目撃し、水葬された死体がタプトンという海岸に打ち上げられた姿を目撃したと証言している。それも、まるで昨日のことであったかのように、死体の様子を克明に説明しているのが印象的である。

これに関して、呉世宗は、『新潟』に描写された「水死体」が金時鐘の済州 4・3 体験がもとになっており、「水葬」が関連していることを指摘している²⁵⁰。それから時を経て 2018 年に発表された『背中の地図』においても、金時鐘が目撃した済州 4・3 の犠牲者たちの「水死体」は、3・11 の犠牲者たちの描写として再び立ち現われたのである。このように、『背中の地図』に描かれた死者たちの詳細な描写は、済州 4・3 における金時鐘の原体験が下地となっている。また、3・11 の犠牲者と済州 4・3 の犠牲者に共通するのは、「水」による死者が多数発生したという点である。津波による 3・11 の悲惨な被害を目の当たりにした金時鐘は、「水による死」というイメージを媒介として、無意識の中にトラウマとして沈潜していた済州 4・3 の水葬の記憶を再び体験したと考えられる。

第 3 節 海から想起される帰国事業の記憶

(1) 帰国事業と金時鐘

金時鐘は、1970 年に帰国事業をテーマとした長編詩集『新潟』を発表した。浅見洋子によると、この詩集は 1960 年前後に完成し、1963 年頃には出版できる状態にあったという²⁵¹。つまり、帰国事業が始まって間もない時点で、金時鐘は『新潟』を書き終えていた。しかし、総連との対立等により、金時鐘は約 10 年間文学活動を行うことさえ困難な状況に陥り、『新潟』の発刊は、金時鐘が総連と決別した後の 1970 年まで待たなければならなかった。この

²⁴⁹ このインタビューは、2019 年 9 月 29 日に長崎県対馬で開催された第 3 回対馬・済州慰霊祭に筆者が参加した際に直接金時鐘から聞き、記録したものである。

²⁵⁰ 呉世宗、前掲『リズムと抒情の詩：金時鐘『長篇詩集新潟』の詩的言語を中心に』343～347 頁。

²⁵¹ 浅見洋子、前掲『金時鐘の言葉と思想：注釈的読解の試み』215 頁。

ことから分かるように、『新潟』は彼が総連との関わりを断ち、一人の在日朝鮮人詩人として再出発する決意が込められたという点において重要な作品である。

『新潟』は、在日朝鮮人である「ぼく」が朝鮮人集落猪飼野から帰国船が出港する新潟港へ行くものの、帰国船には乗らずに朝鮮半島の分断線を超えようと試みる物語である。『新潟』の最後は、朝鮮半島でも日本でもない海の上で「一人の男²⁵²」が歩いているという結末で締め括られている。金時鐘は、『新潟』を書いた目的について、日本の中で分断線を越える物語を描くことであったと述べている²⁵³。実際、1949年に済州島から渡日した金時鐘は、当初日本を経由して北朝鮮に行くつもりだったと言う程、北朝鮮にシンパシーを感じていた²⁵⁴。しかし、朝鮮戦争の休戦後、北朝鮮において金日成体制が確固たるものとなっていく過程で、自身が所属していた南労党のリーダーである朴憲永（1900～1956）や林和（1908～1953）が粛清されるという知らせを受け、北朝鮮に疑念を持つようになったという²⁵⁵。これに関しては、金時鐘が1950年代に所属していた総連との対立を深めていったことも、北朝鮮に疑念を持つに至った要因の一つであると考えられる。

このような経緯で、金時鐘は1959年から始まった帰国事業において、日本に残るという決断をし、帰国船に乗って北朝鮮へ向かう周囲の在日朝鮮人の人々を見送る側に立った。このように、『新潟』における「一人の男」とは、金時鐘の等身大の姿を描いたものであった。そして、帰国事業で帰国船に乗らなかった「一人の男」は、50年以上もの歳月が経った後に、『背中の地図』の作品「窓」の「私」として再び描かれることになるのである。

(2) 作品に描かれる＜境界＞

『背中の地図』の第Ⅲ章「禍いの青い火は燃える」には、「窓」という作品が収められている。この作品は、「窓」一枚で仕切られる「内」と「外」の二つの世界を描いたものであるが、そこには金時鐘の帰国事業の体験が3・11の体験と交差されるように描かれている。

この作品は、3・11が起こる直前の『現代史手帖』の2011年1月号²⁵⁶に掲載され、その一部を改編したものが『背中の地図』に掲載されている。この2つの版を比較すると、一部の言葉の変更や、大幅な追記箇所があることがわかる。このような変更や追記は、3・11の後に行われたものである。したがって、この2つの版の違いを比較・考察することによって、金時鐘が3・11を体験した後にどのような心境の変化があったのか読みとることができると考えられる。

まず、『現代史手帖』に掲載された初版本も3・11の後に出版された『背中の地図』版も、冒頭の部分はまったく同じ内容であり、変更された箇所はない。その部分を引用すると、以下の通りである。

²⁵² 金時鐘、前掲『新潟』195頁。

²⁵³ 金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる』285頁。

²⁵⁴ 同上、265頁。

²⁵⁵ 同上、279～280頁。

²⁵⁶ 金時鐘「窓」『現代史手帖』2011年11月号、思潮社、84～85頁。

窓はもうひとつの
 壁にほかならなかった。
 いくら見渡しても
 さえぎられるばかりの境界だった。
 高さばかりが高まって行って
 外界はひたすら
 透かされるガラスの無音の世界だ。
 街なかの喧騒や
 けたたましい異変のおののきよりも
 窓はむしろ敗北をかかえる
 晦渋な空間でいたいのだ。

(金時鐘「窓²⁵⁷」『背中の地図』)

このように、「窓」は「壁」であり、「境界」であることが示されている。そして、その後で「窓」の外側に関する抽象的な描写がなされている。すなわち、「外界」とは「ガラス」のように透けて見えるにもかかわらず、「無音の世界」である。一方、それと対照となる内側については、「街なかの喧騒」や「けたたましい異変のおののき」が渦巻く世界と描写されている。このような表現から、「境界」とは朝鮮半島の分断戦を意味し、「外界」とは北朝鮮、それに対する内側とは金時鐘の立つ場所のことを表していると考えられる。そして、この南北を分断する「窓」は、「敗北をかかえる」「晦渋な空間」として、その「壁」の高さは高まるばかりであると描写されている。したがって、この作品には、朝鮮半島分断の壁を「窓」に譬えながら、金時鐘本人である「私」と朝鮮半島、とりわけ北朝鮮との関係に置き換えて描かれているのである。

そして、この次の箇所からは「私」と「窓」の関係がより詳しく描かれている。これに関し、ここでは初出版と『背中の地図』版で大きく異なっていることに着目する。2011年の『現代詩手帖』に掲載された初出版を(ア)とし、2018年の『背中の地図』版を(イ)として、両版の変更点を比較すると以下の通りとなる。下線部は筆者による。また、両版の対応関係を示すために必要に応じて行間を加えた。

(ア) 2011年『現代史手帖』初出版	(イ) 2018年『背中の地図』版
この自足をかこっている囲いの中で 私はいつ窓への不信を明かせるだろう。	この自足をかこっている囲いの中で 私の窓はいつ自らの意志の表れとなるのだ

²⁵⁷ 金時鐘、前掲『背中の地図』121～122頁。

<p>とりたてた意味とてなく 窓からは星がちらつき雲が流れて 日差しがまばゆく移ろうている。 そしてかくも物事<small>ものごと</small>の内側で萎えていっ ている。 <u>そう、別れはいつも過去のことだ。</u></p> <p><u>またとは逢えない人たちに</u></p> <p>叫んだこともない窓は今のままだ。</p> <p>いやむしろ身を乗りだして <u>歓呼の声を挙げていたのが</u> <u>その窓だ。</u></p> <p>未来へはついに開くこともないまま <u>窓はただ舞い散る落ち葉を見やっている。</u> それでも窓は内らにこもるものを愛する。 透明にさえぎられているなかで <u>競り上がる窓から愛そうとしている。</u></p> <p>窓は内からかかる<small>かんぬき</small> 門<small>かど</small> である。</p>	<p><u>ろう。</u></p> <p>とりたてた意味とてなく 窓からは星がちらつき雲が流れて 日差しがまばゆく移ろうている。 そしてかくも物事<small>ものごと</small>の内側で萎えていっ ている。 <u>別れは常に</u> <u>思い返せるほどのへだたりしかない過去で</u> <u>ある。</u></p> <p><u>またとは逢えるはずもない北への特異な国</u> <u>へ</u> <u>声を洩らして見送ったのは私である。</u> <u>叫びひとつあげたこともない窓が</u> <u>以前にもまして音を断って静まっている。</u></p> <p>いやむしろ身を乗り出して <u>歓呼の声をあげていたのがその窓でもあ</u> <u>る。</u></p> <p>未来へはついに開くこともないまま <u>窓はただ舞い散る木々を見やっている。</u> それでも窓は内らにこもるものを愛する。 透明にさえぎられているなかで <u>事の成り行きをただ競り上がる窓から眺め</u> <u>ている。</u></p> <p><u>東北も福島も</u> <u>もちろん見晴るかすはるかな向こうだ。</u></p> <p>窓は内からかかる<small>かんぬき</small> 門<small>かど</small> である。</p>
--	---

まず注目したいのは、(ア)において「私はいつ窓への不信を明かせるだろう」と記されている部分が、(イ)において「私の窓はいつ自らの意志の表れとなるのだろう」と変更されている点である。これに関して、(ア)において、なぜ「窓」は金時鐘にとって「不信」の対象とされていたのだろうか。ここで「窓」が南北朝鮮を分断する<境界>であると考えれば、金時鐘にとっての<境界>とは、「自らの意志」によって作り出されたものではなかった。植民地朝鮮に生まれ育ち、渡日してから現在に至るまで、朝鮮半島と日本の政治情勢に翻弄され続けてきた金時鐘にとって、<境界>とは常に時代状況により作られるものであり、他者から強いられるものであった。その意味で、<境界>は金時鐘にとって「不信」

の対象であった。

しかしながら、この「窓」は(イ)において、いつかは「自らの意志の表れ」となるものと書き直されている。つまり、朝鮮半島分断の<境界>は、「自らの意志」によっていつかは克服される可能性を秘めたものとして捉え直されているのである。このように(ア)と(イ)の間には、大きな心境の変化が読みとれる。

そして、次の部分では「窓」を取り巻くより具体的な描写が続く。ここで注目すべきは、(イ)において、帰国事業の描写と推測できる内容が大幅に加筆されている点である。すなわち、(ア)では、「またとは逢えない人たちがどこに行ったのかについては言及されておらず、「窓」が具体的に何を指すのか示されていない。しかし、(イ)では、「またとは逢えない人たちが「北の特異な国」へ行ったという新たな内容が追加され、「北」に行った人たちを「見送った」側にいる「私」の立場についても書かれている。このことから、「窓」とは新潟港から北朝鮮へと出発する帰国船の窓をあらわしていることがわかる。そして、この「窓」は「歓喜の声」をあげるが、その後、未来が閉ざされ、「舞い散る木々」を「見やっている」存在になってしまうことが描かれている。

これに関しては、『背中地図』の第Ⅲ章に収録されている別の作品「またしても年は去り」においても、「窓ガラスの内にこもったまま」の「私」が、北朝鮮に帰ろうとする「友人」を見送る描写がある。その後には、「祖国、その祖国のはずの北がまだ正義であったころ／にじってでも行き着いていかねばと／泣いて憧れた友がいた」と書かれている。このことから、この「窓」は、北朝鮮へ出発する「友人」とその人々を見送る「私」の間に存在する「境界」であると解釈できる。

それでは、この「境界」とは、金時鐘にとってどのような存在なのであろうか。帰国事業に関しては、金時鐘も渡日当初は北朝鮮に行くつもりであったと述べている。このように、彼もまた帰国船に乗った友人の側、すなわち「窓」の外側にいたかもしれない者であった。そのように考えると、「境界」を跨ぐ外側と内側は確固たるものではなく、ふいに乗り越えられてしまう存在であるかもしれないことを表している。このことと関連して、金時鐘は、2019年5月29日から31日にかけて開催された『済州フォーラム』の講演会において、「境界は内と外の代名詞」というテーマで、「境界」について2つの定義を説明している。1つ目は、「国境とか土地とかの境界、またはあるものの占めている範囲と他との境目」であり、2つ目は、「人がこの世に生きてゆく上で置かれている立場や、地位を指しているときの使われ方」で、「そこには当然各自が出会った境遇、または置かれている環境も含まれ」という内容であった²⁵⁸。「境界」を後者のように考えると、周囲の環境や境遇によって「境界」は変動するものであると考えられる。これと同様に、(ア)において「不信」の対象であつ

²⁵⁸ 金時鐘は、『済州フォーラム2019』に参加し、済州4・3研究所が主催したセッション「4・3と境界—在日の線上から」で報告を行なった。本報告を含む資料(韓国語)は、以下を参照した。http://www.jejuforum.or.kr/data/publications/file2_1569302386.pdf、最終閲覧日：2022年6月27日。

た「窓」は、(イ)において「自らの意志の表れ」によって乗り越えられる可能性を有したものと書き換えられている。ここには、「境界」を「自らの意志」によって主体的に乗り越えたいという金時鐘の願望を見てとることができる。

そして、最後の部分では、3・11に関する内容が加えられている。(ア)は、3・11以前に発表された初出版であるために、もちろん3・11や東北についての記述はない。それに対して、(イ)では、「東北も福島も／もちろん見晴るかすはるかな向こうだ」というように、3・11のことを指し示す明確な一文が付け加えられている。しかも、「窓は内からかかる^{かんぬき}門である」という締め括りの文章の直前に置かれることで、帰国事業の時と同様に、「窓」は「私」と3・11を隔てる「境界」であり「壁」として存在している。これに関しては、『背中の中の地図』のいくつかの作品において、「私」が3・11の被災地を汽車で訪れる場面や（「夜汽車を待って」）、被災地にいながらも「私」は「車窓」（「弔い遙か」、「また そして 春」）の内側にいるという場面が登場する。つまり、この場合の「窓」は、被災地を走る列車の「車窓」を意味しており、この「車窓」の内側にいる「私」と外側にある被災地との間には、透明なガラスで遮られた「境界」が横たわっているのである。

このように「窓」は、北朝鮮に向かう帰国船の「窓」と被災地を走る「車窓」の二重の意味を持っている。それぞれの「窓」は、＜境界＞をあらわし、「私」は、北朝鮮へ出発する人々や、3・11の被災地を＜境界＞の内側から眺める存在として描かれている。帰国事業と3・11の出来事を「窓」を隔てたところから見るしかない「私」の立ち位置は、二つの出来事に対して傍観者でしかいられないという金時鐘の心境を表している。

そして、この詩の最後の一行である「窓は内からかかる門である」という表現は、「窓」、すなわち＜境界＞を作っているのは「内」にいる「私」自身であることを意味する。金時鐘の故郷であるはずの北朝鮮や3・11の被災地に＜境界＞を作っているのは自分自身であるという自己批判の眼差しを垣間見ることができる。そのことは、他の作品「夜汽車を待って」においても確認できる。「私」が、被災地を尋ねた先で、「それ」に当たる「いつものあの書きつけのノート」を探している場面である。

絆や励ましや

地縁血縁の懸命な^{よしみ}誼がつまっていた。

癒えない災禍への

せめてもの私の持ち寄りだった。

それがどうしたわけか見あたらないのだ。

やはりへだたりは

己れがかこっている距離のようである。

(金時鐘「夜汽車を待つ²⁵⁹」『背中の地図』)

ここでも、「私」と「癒えない災禍」を隔てる「壁」が存在することが示されている。そして、やはり「へだたり」は「己れ」が作り出しているものとして描かれているのだ。なぜ金時鐘は、北朝鮮や3・11の被災地との間に自ら<境界>を作ったということを繰り返し書くのだから。それは、金時鐘が、帰国事業で旅立っていった人々や3・11の被害を受けた当事者そのものにはなることができず、その痛みを共に感じるできないことに対する自責の念を持っていたからだと考えられる。

しかしながら、<境界>を自ら作るということは、「窓」の内側にいる「私」の意志によって、壁としての<境界>を乗り越えることができる可能性をも示唆している。先に述べたように、金時鐘にとっては、<境界>とは自らの「意志」によって作られるものではなかった。しかし、(イ)において、「窓」は自らの「意志」によって乗り越えられる可能性のあるものと記されているように、金時鐘は3・11の体験を経て、<境界>を作り出すのも、乗り越えるのも、実は自らの「意志」次第であるということを示そうとしたのではないだろうか。

以上のように、3・11をテーマとして編まれた金時鐘の詩集『背中の地図』は、3・11の体験が金時鐘の濟州4・3と帰国事業の体験やそれにもとづく記憶と混じり合いながら描写されている。金時鐘は、2018年2月初めに心不全症で緊急入院した先で病床につきながら、「人生もこれで終わったのか」と思い、3・11をテーマに書き溜めてきた作品を本詩集にまとめたという。彼にとって、『背中の地図』は、それ程の思いが込められた詩集であった。『背中の地図』の最後に収められている作品「夜の深さを 共に」には、「私は見ました」というフレーズが四度も繰り返され、「私」が3・11を「見た」目撃者であることが強調されている。ただし、「私は見ました」という言葉には、二重の意味が込められている。金時鐘は、3・11を体験し、その被害に接しながら、過去の濟州4・3や帰国事業の体験をそれに重ね合わせることで、その「記憶」を「見た」と言っているのではないだろうか。

実際、『背中の地図』に収められた作品には、「私」が3・11の被災地に出向き、その悲惨な様子が詳細に描かれている。しかし、そのあまりにも具体的で克明な描写からは、ただ3・11の被災地の様子だけではなく、金時鐘本人がかつて経験した悲惨な事件の記憶が投影されている。先に述べたように、3・11の津波による犠牲者の描写からは、金時鐘が濟州4・3の最中に目撃した水葬の犠牲者を思い起こさせる。また、3・11の被災地を訪れる列車の「車窓」は帰国船の「窓」を彷彿とさせ、「私」と3・11の被害者たちとの間に存在する<壁=境界>は、「私」と北朝鮮へと旅立っていった同胞たちとの間に存在する<壁=境界>をあらためて想起させるのである。

その<壁>=<境界>には、3・11や帰国事業の当事者になれないという金時鐘の自責の念が込められている。その一方で、<壁>=<境界>は、「内からかかる 門^{かんぬき}」と比喻され

²⁵⁹ 金時鐘、前掲『背中の地図』63～64頁。

ているように、自らの意志で乗り越えられる可能性を有したものとして表現されている。金時鐘にとって3・11は、日本列島を襲った未曾有の大災害であっただけでなく、それまで彼自身が抱き続けてきた在日朝鮮人の歴史的痛みと向き合い直す契機となったのである。

金時鐘が『背中の地図』において、繰り返し描いた〈境界〉は、残されたものと無くなったものの中にある〈境界〉であったといえる。それは、済州4・3において〈生き残った者／亡くなった者〉、帰国事業において〈日本に残った者／北朝鮮へ行った者〉であった。これらの金時鐘の体験と3・11で生き残った者／亡くなった者との〈境界〉が作られたという現象とが重なり合うのである。

しかし、3・11において〈境界〉が作られたのは、人間の生死の間だけのことではないことを金時鐘は『背中の地図』で訴えている。『背中の地図』には、3・11後に残されたものとして原子力発電所があり続けるということが繰り返し書かれているのである。原発について書くということは、『背中の地図』の大きな主題の一つであるといえるのである。次に、『背中の地図』において、原発がどのように描かれているのかについてみていく。

第7章 『背中の地図』における原発批判と故郷回帰

第1節 金時鐘の原発への応答

金時鐘は、3・11直後から「福島原発破綻」をテーマに詩を書き続けてきた。『背中の地図』には、それらの作品が数多く収録されている²⁶⁰。『背中の地図』の「あとがき」には、金時鐘の原発への思いが次のように述べられている。

ひとりあがいてでも福島原発破綻にはこだわりつづけなければと、年が暮れるたび、新年が明けるたび、その都度自分に引き戻してくるように向き合う言葉をつらねてきた。
(…中略…) 放射能汚染という、通常の生活ではまみれるはずもない人工的災禍に迫られた人たちの、怒りと困惑の底で醸されている人間的な悲しみをわが物としたい、としんそこ願ってのことだった。思いも半ばの詩集とはなったが、私の執着が萎えたということではない。人間の思いをまことあざなっていける詩が、書きたい²⁶¹。

この「あとがき」からは、金時鐘がいかに「福島原発破綻」と向き合いながら作品を書くことにこだわっていたのかが分かる。金時鐘にとって、原発を書くことは、個人の主題であると同時に、「原発破綻」が忘れ去られるのを防ぐためでもあった。さらに上の引用文に続いて、金時鐘は原発の問題を「人類関心事」であり「世界的課題」であると述べながら原

²⁶⁰ 金時鐘「震災を書く」『日本近代文学館』第288号、2019、12頁。

²⁶¹ 金時鐘、前掲「あとがき」『背中の地図』136～138頁。

発の問題が世界規模で重要な課題であることを指摘している²⁶²。

『背中の地図』には、このような原発に対する問題意識が書かれた作品が多数収録されている。ここでは、金時鐘が原発をどのように描いているのかについて、以下の4つの観点からみていく。1つ目は、原発がどのように表象されているのかについてである。2つ目は、原発を作り上げた社会背景にある利便性への批判である。3つ目は、3・11や原発に対する忘却の問題である。4つ目は、原発と金時鐘との間に存在する〈境界〉についてである。

(1) 詩語からみる原発表象

まず1つ目の観点である『背中の地図』において原発がどのように表象されているのかについてみていく。『背中の地図』には、原発を直接表している詩語と、原発を比喻する詩語が散りばめられている。原発を直接表している詩語には、原発に関する専門用語も含まれるが、それらを表にあらわすと以下の〈表10〉のとおりである。

〈表10〉『背中の地図』における原発を直接表している詩語と原発に関する専門用語

該当章	作品名	関連用語
第Ⅰ部	「網」	原子力のエゴ、除染
	「道の道理」	原子力発電所
第Ⅱ部	「馴染んで吹かれて」	原子力発電所
	「円筒は輝く」	円筒タンク、原子炉建屋、汚染水、原発
	「風の余韻」	原発、放射能、燃料デブリ
第Ⅲ部	「それでも言祝がれる年はくるのか」	セシウム、ベクレル、ガーガー計数管、マイクローベルト
	「入り江の小さい村で」	原子
	「禍いは青く燃える」 「夜の深さを 共に」	放射能

このように、『背中の地図』には、第Ⅰ部から第Ⅲ部にかけて原発に関する直接的な用語が多く使われていることが分かる。その一方で、原発を直接表さずに比喻を用いながら原発や原に関連する事柄を表現している箇所も多々見受けられる。以下では、原発の比喻表現がどのようになされているのかについて、「青い火」と「光の棘」という詩語に焦点を当てて考察する。

① 「青い火」

『背中の地図』には、原発に関する比喻の詩語として「青い火」が度々用いられている。

²⁶² 同上、140頁。

「あとがき」においても、金時鐘は「ゆめゆめ原発の青い火に未来があってはならない」と言及しているように、「青い火」は原発を指している。以下の〈表 11〉は、『背中の地図』における「青い火」という詩語が用いられている作品とその使われ方を整理したものである。

〈表 11〉『背中の地図』において「青い火」が用いられている詩語

該当章	作品名	「青い火」の使われ方
第Ⅰ部	「弔い遙か」	天外の青い火
第Ⅱ部	「エレジーの周り」	天外の青い火
	「夜汽車を待って」	
	「風の余韻」	天外の火まで青く点した原発の英知
第Ⅲ部	「入り江の小さい村で」	岩戸の青い火
	「禍は青く燃える」	青い火
		天外の青い火
		禍いは青く燃えているのだ
	「夜の深さを 共に」	原子力の青い火
		天外の火
「それでも言祝がれる年はくるのか」	千年変わらぬ青い鬼火	

ここからも分かるように、「青い火」は作中において多く使用されている。またそれは、作中における「天外の火まで青く点した原発」（「風の余韻」）や「原子力の青い火」（「夜の深さを 共に」）という表現からも分かるように、原発それ自体を指している。ここで注目すべきは、原発が明るいイメージとして描かれているという点である。例えば、「青白い天外の火で輝いている」（「エレジーの周り」）とあるように、「青い火」は輝いているものとして描写されている。この他にも、『背中の地図』において原発がある世界観は明るく輝くものとして捉えられていることが大きな特徴である。

②「光の棘」

2つ目の原発の比喩的表現としてあげられるのが「光の棘」である。この詩語も先の例と同じように、原発が明るいものとして表現されている。「光の棘」が用いられている例をあげると、以下の〈表 12〉の通りである。

〈表 12〉『背中の地図』における「光の棘」の用いられ方

該当章	作品名	「光の棘」の使われ方
第Ⅰ部	「不在」	光の棘 <small>とげ</small> の <small>また</small> 築りばかりが／大気にひそんで満ちていた。

第Ⅱ部	「円筒は輝く」	交ざり合った光の棘が朋友のようにささやいて ／経めぐる潮 ^{うしお} が声を殺してつぶやいている。
第Ⅲ部	「禍いは青く燃える」	禍はその郷土で青い火を噴いている。／ちりちり 突き刺さり／街が村が光の棘にささくれている。

上の〈表 15〉の作品「不在」には、「光の棘」が「大気」に満ちているという描写されていることから分かるように、「光の棘」とは原発から発せられる放射能を意味している。そのことがよく表れている作品として、作品「円筒は輝く」があげられる。その作品の本文は、以下の通りである。下線部は筆者による。

策も尽きはてた円筒タンクが
 原子炉建屋の周りにつっ立っていつている。
 はみ出たものはものはずみで放置され
 省りみられなかったものは隈無くあたりに浸みいつて
 行き着く先のみ際の海に溶け込んでゆく。
 それこそものはずみの出来事のように
 地下の逆る汚染水をかかえた円筒が
 心房細動のわななきもものかは
 銀色に輝いて光っている。

遣り場のない死に水は円筒で原発の周りを埋めてゆき
 その上を風が巻いて吹き通つて
 いつ爆ぜるとも知れない飽満のげっふはしかめっ面だ。
 交ざり合った光の棘が朋友のようにささやいて
 経めぐる潮^{うしお}が声を殺してつぶやいている。
 ものはずみの人生のように
 省りみられないものたちを円筒が押し込み
 きらきらと原発を囲んで照り映えている。

(金時鐘「円筒は輝く」²⁶³『背中の地図』)

この作中の「円筒」とは、原子炉を指す。その「円筒」すなわち原子炉は「銀色に輝いて光つて」おり、その周りも「きらきら」「照り生えている」。このように、原発が明るい世界に存在するものとして描かれている。さらに、「円筒」から放たれる「汚染水」は「死に水」

²⁶³ 同上、83～85 頁。

と表され、その「死に水」に混じり合った「光の棘」が「ささやく」と描かれていることから、「光の棘」は放射能の比喩として使われていることが分かる。

(2) 利便性を追求する社会への批判

次に、2つ目の観点である原発を作り上げた社会背景にある利便性への批判についてみていく。これに関しては、第Ⅱ章に収められている作品「馴染んで吹かれて」の中で、戦前から戦後、そして原発事故に至るまでの日本社会に対する批判が書かれている。この作品の本文は、以下の通りである。

いやむしろ、見やってはびこらす
過去だってあるのだ。
まさぐるからといって
あたりが暗いわけではさらさらない。

変わりばえのない日々をつらねて
それだけ手馴れてしまった多くの物たち。
愛想の平穩、
上がりかまち框の艶、
高速までも景観となり
すっかり利便さにへたってしまった
意識の角縁かどへり。
(…中略…)

いずれもが馴染んでは視えない
明確な事柄ことがらだ。
鴨居で褪せている写真のように
白昼はだから闇までも白いのだ。
召めされた兵士も
晴れ着の稚児も
拍手打って参道の鳥居を巢立っていったのだ。
(…中略…)

明かせば自由は
利得に絡む得失であった。
破綻した原子力発電にまで利得を重ねてゆくような
取りついた中流意識が生き甲斐ともなってしまったのだ。

(金時鐘「馴染んで吹かれて²⁶⁴」『背中の地図』)

この作品では、原発を作り上げた社会的背景として「利便さ」や「利得」があげられている。さらに、「利便さ」ばかり追い求める「中流意識」に「手慣れ」、「馴染んで吹かれる」ように流されていった日本社会の風潮を批判している。このような批判は、『背中の地図』の他の作品においても頻出する。例えば、「目先の利得に高度経済の成否を託すとは／なんという思い上がりを私たちは受け入れてきたことか」（「風の余韻」）と「私たち」を批判している。このように、目先の利益を追求して原発を受け入れてきた日本社会のあり方全体に疑問を投げかけているのである。

このような批判は、金時鐘作品において、「光／闇」の対立関係の構図として描かれている。この場合の「光」とは、利便性を追求する人間社会やその上に成り立つ原発を指す。一方、「闇」は人間が立ち入れない神々の世界を意味する。

金時鐘は、「光」の世界を表す社会、つまり利便性を追求した社会を「白昼」や「不夜城」と表現している。例えば、現代社会の様子を日が沈まない「白昼」と表現した。さらに、「利便さに相好をくずし／夜を追いたてた不夜城に悦にはいつている」（「禍いは青く燃える」）という表現からは、「眠らない街」や「繁華街」と消費や利便性を追い求める現代社会を皮肉っていることが分かる。先に述べたように、金時鐘は原発がある状態を明るい光の世界として描いている。それと同様に、「白昼」と「不夜城」も明るい「光」のイメージを持つものとして描かれているのである。

その一方で、「光」に対応するものとして「闇」の世界が描かれている。このことがよく表れている作品として、第Ⅲ章の「禍いは青く燃える」があげられる。この作品の本文は、以下の通りである。

山濤はあまたの生涯を沖へ沈めた。

海の底で泥まみれの^{かわら}磧の下で
土砂につかえた動けぬ命が^お噓せている。

(…中略…)

見ひらいて見たとて
しずけさにおおわれた闇は見通せない。

空気の芯で尖っている
放射線の放出は見届けられない。

(…中略…)

まばゆい浪費に浮かれているのは

²⁶⁴ 同上、76～82頁。

利に^{きと}敏い己れである。
利便さに相好をくずし
夜を追いたてた不夜城に悦に入っている。

思いおこすのだ。
産土神が^ま坐しました里の夜は
^{おそ}畏れがしろしめす奥深い^{やみ}暗だった。
その畏れを散らして
禍いは青く燃えているのだ。

(金時鐘「禍いは青く燃える²⁶⁵」『背中の地図』)

この作品には、暗闇のイメージとして、「海の底」、「^{かむら}積の下」、「夜」、「里の夜」が登場する。まず、「海の底」と「^{かむら}積の下」は、津波を指す「山濤」による死者が存在する場所とされている。そして、「夜」と「里の夜」は、「産土神」が存在する場所として描かれている。さらには、原発ができた後、「畏れがしろしめす奥深い暗」の世界が「利便さ」や「浪費に浮かれる」光の世界に支配されてしまったことを指摘している。つまり、闇の世界は死者や神の世界であり、原発の存在によって闇の世界が光の世界に支配されてしまったということが描かれている。

このように『背中の地図』において、金時鐘は「光／闇」の二項対立を用いながら利便性批判をしている。その利便性を表す状況を「光」の世界とし、神々が存在する状況を「闇」の世界として描いたのである。

(3) 原発の忘却に対する警鐘

① 記憶の漂白—忘却の「白」のイメージ

続いて3つ目の観点である3・11や原発に対する忘却の問題についてみていく。これに関して金時鐘は、『背中の地図』の「あとがき」で以下のように言及している。

東日本大震災ほどの、人智のかぎりを尽くした原発まで破綻させた大災害ですら、年月の移り変わりのなかでは同じように漂白されていってしまっている²⁶⁶。

このように金時鐘は、月日が経つにつれ、次第に3・11の大災害や原発破綻を起こしたことが忘れ去られてしまっていることを記憶の「漂白」と表している。このようなイメージは、『背中の地図』の中で繰り返し登場する。そのことは第Ⅱ章に収録されている作品「風

²⁶⁵ 金時鐘、前掲『背中の地図』115～120頁。

²⁶⁶ 同上、136頁。

の余韻」にはっきりと描かれている。この作品の本文は、以下の通りである。

ふためいていた日が夢のようだ。
なんとなく落ち着きも居ついたようで
半の日の今日も間のびしたまま傾いている。
翳^{かすみ}さながらに立ち込めていた悲しみ。
殊に印象ぶかかった幾つかの名前まで
すげなくも記憶のへりで白んでいっている。
(…中略…)
陰ひとつない街並みはその向こうに見える。
そうしてすべてが眺める位置でうすれていっている。
(…中略…)
なにもかもが一様に
乾いた葉に擦れ合いながら消えていっている。

(金時鐘「風の余韻²⁶⁷」『背中の地図』)

この作品の冒頭にある「ふためいていた日」とは、3・11直後の日々を指していると考えられ、その時に印象に残った「名前」や「街並み」そして「なにもかも」が白くなり、薄れ、次第に消えていくということが書かれている。

その他にも、記憶が「白」くなり薄れていく様子を描いた作品として第Ⅲ章に収められている作品「それでも言祝がれる年はくるのか」があげられる。この作品の本文は、以下の通りである。

まだ明けきらぬ夜。
うす闇を透かして 事物を見る。
くろぐろと科学の驕^{おご}りにうずくまった街。
家並みのはずれでほの白く尽きている
先のない道。

木が立っている。
立つしかない木が射すくめられて
ふるえているということは
故^{ゆえ}知らぬ蟬を今に

²⁶⁷ 同上、86～89頁。

毒気の茂みで鳴かすということだ。
犬っこ一匹居つかない街で
声をかぎりど虚しい叫びを上げるということだ。
(…中略…)
骨も露な建屋の屋根を浮かび上がらせて
長い夜が白んでいる。
それでも天外の火は
囲んで沈めた水壁の底で
千年変わらぬ青い鬼火を放っている。

所詮は囲われた火だ
隣り合っはすごせない明かりだ。
閉ざした雨戸の節を貫いて
光がひとすじ
置きっ放しのちゃぶ台の上に届いている。
ひそかなこの
朝を信じる。

(金時鐘「それでも言祝がれる年はくるのか²⁶⁸」『背中の地図』)

この作品は、夜と朝の間の「うす闇」の夜に「事物を見る」ことから始まり、そこで見える白いものについて書かれている。例えば、「科学の驕りにうづくまった街」、「先の見えな
い道」、「長い夜」がそれにあたる。それらは、原発に囲われた状況において存在するが、か
ろうじて見ることができ、白く消えかけている状態である。それは物事が「漂白」され、忘
却されつつある状況を示している。このような忘却を表す「白」や「漂白」のイメージは「光」
の世界と密接に関係している。前に述べたように「白昼」は輝く光の世界を表し、それは人
間社会を批判する詩語であった。

これに関連して、「馴染んで吹かれて」では、「白昼は闇までも白い」と表現されている。
これは、物理的な自然の作用を表していると考えられる。その光の作用とは、ある者が直接
光を見ようとして、その光があまりにも強烈な場合、その眩しさで焦点がぼやけて白く映る
現象を意味する。つまり「白昼は闇までも白い」とは、存在しているのにもかかわらず対象
を捉えることができない状況を表していると考えられる。このように、金時鐘は「光」の作
用によって対象物が不可視化されることを「漂白」と表現し、それに対して警鐘を鳴らして
いるのである。

²⁶⁸ 同上、96～100頁。

②記憶の風化—風に吹かれる記憶

記憶の忘却に関するもう1つのモチーフとして「風」があげられる。第5章で既に述べたように、『失くした季節』における「風」が、出来事やある対象に吹きその存在自体を失くしてしまう「風化」作用のイメージを持っていることを確認できた。そのことが、『背中
の地図』にも引き継がれるモチーフとして描かれている。第Ⅲ部に収められている作品「風の
なか」は、そのことをよく表している。この作品の本文は、以下の通りである。

やはり春はそれでもやってきていて
咲きだした豌豆の花が
傾いたフェンスの網目一面絡んでいた。
たやすくは去らぬとばかり
氷雨の風もまた吹きつのは
いっそう雨戸の^{きめ}木目を晒してもいる。
人を居つかせない罪のように
ただ押し黙って
家はその日のままだに立っている。

知っていて知らない
行った先ざき。
そこで滞っている
昏い吹き溜まり。
散っていった先でも一様に風は渡っている。
入り混じった無機質な風が
心の中まで吹き込んでいる。

憶えようにも憶えきれない。
聞いていてもわからない。
感じもしない見えもしない。
それでも人は寄りつけない。
セシウム、ベクレル、ガイガー計数管。
千分一ミリを計測するという
マイクロシーベルト。

角のスーパーも、並びにあったうどん屋も出店の八百屋も、
空き地のフットボールも野球少年も、

吹きっさらしの原っぱで白い影をふるわせている。
そこにあらねばならないはずのものたちが
地鳴りのように声を上げてふるえている。

(金時鐘「風のなか」²⁶⁹『背中の地図』)

この作品の舞台は、「その日のまま」に存在する3・11の被災地であると考えられる。タイトルの「風のなか」にも表されているように、そこには「風」に吹かれている状況が描かれている。ここで「風」は、憶えること、聞くこと、感じることを妨げるもの、すなわち記憶を風化させるものとして描かれる。その後には、被災地に残された「スーパー」、「八百屋」、「空き地のフットボール」や「野球少年」などの本来「そこにあらねばならないはずのものたち」が「吹きっさらしの原っぱで白い影をふるわせ」ながら「地鳴りのように声を上げてふるえている」と続く。ここで「白い影」とは、3・11で亡くなった人々や失われた物の「亡霊」を指すと考えられる。「風」はそれら「白い影」である「亡霊」にも吹きつけ、その存在までも脅かしている。その「風」に抗うように、「そこにあらねばならないはずのものたち」が「地鳴り」のように声にならない声をあげて自らの存在を知らしめようとしている様子が描かれている。

このように、出来事や記憶に吹き「漂白」されること、そして忘れ去られる対象である物事が「風」に吹かれ、声をふるわしている様子を描き出すことは、3・11後も「原発」を使用し続ける現代社会に対する警鐘であるとも捉えることができる。ここからは、3・11や原発事故の忘却を危惧する金時鐘の心境が見受けられる。このような記憶や出来事が風化して忘れられていくという問題意識は、第Ⅲ章の後半部分に収録されている作品に多くみられ、詩集全体を締め括る大きなテーマとして設定されている。

(4) 原発と金時鐘との間に存在する〈境界〉

① 「私」と原発の隔たり—金時鐘の立ち位置

最後に、4つ目の観点である原発と金時鐘との間に存在する〈境界〉についてみる。

『背中の地図』には多様な方法で原発批判がなされている。その度に登場する人物が「私」であり、「私」と原発との間には様々な〈境界〉、つまり隔たりが描かれている。この隔たりとは、原発を囲っている立入禁止区域のフェンス、「私」と原発の心の隔たりを意味すると考えられる。『背中の地図』の作品には、原発が「閉ざした門扉の内側で光っている」(「網」)ことや、原発は「所詮は囲われた火」(「風の余韻」)であると書かれているように、原発は隔たりの内側、つまり「私」の向こう側に存在するものと書かれている。

とりわけ、第Ⅰ章の作品「道の道理」には、原発の周りにある〈境界〉と「私」の関係が

²⁶⁹ 同上、101～105頁。

よく表わされている。この作品の本文は、以下の通りである。

この舗装道路の固い仕切りのまえでは
いかな誰も行き暮れる。
そっくり腑抜けになるのだ。
新たに仕上がった区画整理のように
整然と則^{のり}が交叉して
ゆらゆら越えられない境界が照り映えている。
(…中略…)
ついに目を剥く犬の極限。
私とて眺める位置でなら牙を剥く。
お互いが寄りつけないへだたりの中で適応するのだ。
そうとも、帰ってくる人はなくても日は暮れる。
私の背後で堰を越えた濁流が溢れ
沖合のどこかか航路を失くした船が一隻
夜陰をついて喉をしぼっている。
遠吠えは尾を引いて
麓の森からも流れている。
道はまっすぐ海へ突き出て
行き着く前に立ち消える。
その先が原子力発電所だ。

(金時鐘「道の道理²⁷⁰」『背中の地図』)

まずこの作品には、原発を囲んでいる「固い仕切り」の前では、「いかな誰も暮れ」、「腑抜けにな」ってしまい、原発と人間の共存が不可能な状況になると書かれている。ここからもわかるように、原発を囲んでいる「固い仕切り」とは、原発周辺の<境界>を指す。その他にも作中には<境界>を表す詩語として、「舗装道路の固い仕切り」、新たに作られた「区画整理」、「へだたり」、「堰」があげられている。これらの<境界>は、「越えられない境界」とあるように、「人」と原発の間に存在する隔たりを意味している。

また、作中のその<境界>は、「私の背後」にある。「私」と<境界>の関係性については、既に第6章でも述べた。そこでは、金時鐘の過去の個人的な帰国事業の体験と3・11の体験をもとに、<境界>の内側（こちら側）と外側（あちら側）の世界が存在し、「私」は内側から外側の出来事の傍観者として存在するということを論じた。この「私」の立ち位置が原

²⁷⁰ 同上、18～20頁。

発の問題にも同様に描かれている。つまり「私」は、被災地の〈境界〉の外から原発を眺める位置にいるということである。そしてそれは、金時鐘が原発に対する立ち位置を表していると考えられる。

このことを踏まえると、作中の「お互いが寄りつけないへだたりの中で適応する」とは、誰もが「へだたり」の内側で適応しながら共存することと解釈できる。このことに関して、金時鐘は「あとがき」で以下のように述べている。

いかな大震災だって、自然災害は郷土までは奪いつくせない。人はやがて居つくのである。ところが原発破綻となるともうその地域に人は居なくなる。隣り合っては過ごせないのなら、それは端からそこに在ってはならないものだ²⁷¹。

このように金時鐘は、原発が人の郷土まで奪ってしまう「在ってはならないもの」であることを述べている。つまり金時鐘は、原発を「へだたり」や「領域」を侵害するものとして捉えているのである。

②目撃者としての「私」―外部から出来事を見る

次に、原発の目撃者としての「私」が〈境界〉を通して原発をどのようにみているのかについてみていく。『背中の地図』において、「私」は原発周辺にある〈境界〉の外側から原発を観察するという構図が繰り返し描かれている。この「私」と原発の関係について書かれた作品に第Ⅲ部の最後に収められている「夜の深さを 共に」があげられる。この作品には、「私は見ました」という詩句が繰り返され、「私」が3・11において「見た」ものが描かれている。作品の本文は、以下の通りである。

私は見ました。

ノアの洪水を今に見ました。

不安を無^お下にはねつけた人たちの

想定外の 禍^{わざわい} がいかに凄絶^{せいぜつ}で

いかに広く予想された不安であったかを

とくと見ました。

(…中略…)

私は見ました。

消えていった言葉の

風にしなるもがきを見ました。

神々がひそめてきた天外の火を

²⁷¹ 同上、137 頁。

利便さに代えた人智の驕りを、
昼をもあざむく不夜城の
いつ果てるともない虚飾の浪費を、
その文明の 畏れを知らぬ退廃を。
とうとう地球が身悶えたのです。
神々の深い溜息に渚がたわみ
迫り上がった海が山濤となって
いつときに列島の背を打ったのです。

私は見ました。
うずくまって見る夢を見ました。
人間本来の素朴さに立ち返った
夢のなかの夢を見ました。
人智の遠く及ばないものはみな
神々の内のものです。
生き物はすべて
領分をわきまえて生きています。
隣り合ってはすごせないのなら
それは端からそこにあってはならないものです。
もともと鬮がり神々の領域でした。
夜の深さを追いやった報いを
私たちは今みなして受けているところです。
ゆめゆめ原子力の青い火に
未来があってはなりません。

私は見ました。
呼び合う間もなく裂かれていった人たちの
虚ろな心の空洞を、
空洞の奥の昏い沼を見ました。
澱みが鈍く、
放射能を湛えてしずもっていました。
浄めようにも浄めようがない
水の崇りをそこに見ました。
ゆらゆら影でしかない私がゆらめいて
眺めるだけの私を私が見つめていたのです。
見えないままに冒される

まなこ
眼のそこの緑の錆を。

(金時鐘「夜の深さを 共に²⁷²」『背中の地図』)

この作中には、「私」が「見た」ものとして津波を表す「ノアの洪水」、原発を表す「天外の火」、地震を表す「山濤」、「地球の身悶え」、「神々の深い溜息」がある。さらには、被害にあった人々の「虚な心の空洞」、「空洞の奥の昏い沼」を「見た」ことが書かれている。「昏い沼」や「水の祟り」と言う詩語から、「私」は被災地の海を見ている状況であることが推測でき、とりわけ「水」によって命を落とした人々を見ようとしていることが分かる。しかし、実際に見えるのは「放射能を湛えて」澱んでいる「沼」であり、「水の祟り」であり、水面に映る「眺めるだけの私」自身である。つまり、「私」は、被災地の外部である「眺める位置」から、3・11による原発事故を見、それによって失われた命や失われた生活があったということを見た目撃者としての役割を担っているのである。

ところでこの作品の最後には、水面に写った「私」の「眼」も錆び、冒され始めている状態であることが打ち明けられている。ここからは「私」自身を眺める自己批判や自らの在り方を見つめ直す姿勢が描かれている。なぜ金時鐘は、この作品の結末として「私」が「私」を眺めるという構図を描いたのだろうか。

その理由としては2つのことが考えられる。1つ目は、金時鐘「私」自身を眺めることによって、原発に対する「私」の立ち位置を確認するという行為を表現しようとしたことである。それはすなわち、「私」と原発が<境界>を隔てた2つの世界に分けられ、原発からみれば「私」は境界の外部に存在するということを意味している。そして2つ目は、「私」の中に「水面」=<境界>を隔て内側の「私」ともう1人の外側の「私」が存在するということである。

このことに関して、金時鐘は『背中の地図』を発表した後に「震災を書く」ことについて以下のように述べている。

各地の海辺で白亜の城を築いている「原発」は、その村、その地域がこぞって引き入れた賛同の事業でもあったものです。その「事業」の原発で村はうるおい、村人たちはたしかな稼ぎを手中にしました。つまり“反原発”への意志発揚はこの村、この地域を挙げての賛同には目もくれず、原発の危険を言挙げしている“外部”の要求であり、思いつめている市民意識の正義であります。外部と絡んでいる内部と、内部が外部を形づくっているこのしがらみこそ、“原発”をただ糾^{ただ}している私の認識の内部ではなからうか²⁷³。

金時鐘は、ここでも原発に関して「外部」と「内部」の構造を用いながら言及している。

²⁷² 金時鐘、前掲『背中の地図』129～134頁。

²⁷³ 金時鐘、前掲「震災を書く」12頁。

金時鐘は、原発を受け入れた地域や村を「内部」、金時鐘を含む反原発を提唱している人を「外部」と位置付け、原発の「内部」にいる人々にとっては「反原発」の主張は「外部」からの要求でしかなく、「外部」の「市民意識の正義」であると述べているのである。一方、反原発側は、「外部」の問題である原発を「内部」の「市民意識の正義」をもって、反原発の正当性を主張していると言及している。このように金時鐘は、「内側」と「外側」が合わせ鏡のような構造になっていることに着目し、立ち位置によってそれぞれの「外部」と「内部」が存在するという点を指摘している。金時鐘は、その構造について原発をとりまく「しがらみ」であり、原発の問題を考える際の難しさであると認識しているのである。

このことから、作中の「私」が3・11を眺め、最後に「私」を眺めているという結末は、金時鐘が原発の問題に対する向き合い方を示している。それはまた、原発破綻が自分自身の問題であり、自らの在り方を問う問題として捉えなければならないことを訴えているのである。

このことに関して、金時鐘は、『背中地図』を発表した後の2019年に書いた作品「形そのままに」を紹介している。ここには、「私」と「震災地」、「内部」と「外部」について書かれている。この作品の本文を記すと以下の通りである。

その地でなければ 向き合えない外部がある。
立つ位置に照らして見定めれば
震災地はへだたった外部の異変であり
その異変は即
人的禍いの奥まった内部でもある。
関わりのない私の生存権まで
やすやすと掠めてゆくのだ。
(…中略…)
風圧や風聞や
その地だからこそのしかかる重みがある。
外部の形そのままに
押し返さなくてはならない位置に私はいる。
めぐる季節が芽吹く季節におしかぶさっているように
その地の蘇りも向き合える私の内部でなくてはならぬ。
そのようにも私はその地でなければならぬことを
わが事の内に収めていかねばならない
外部の人なのだ。
(…中略…)
光の棘もものかわ
牛蒡の形そのままに押し返す

一本の牛蒡でしかありえぬために
形そのままに禍いは
外部としてそこに在らねばならぬ。

(金時鐘「形そのままに²⁷⁴」(2019))

この作品には、「立つ位置」によって異なる「外部」と「内部」が存在することが書かれている。具体的には、「震災地」にとって「私」は「外部」であり、「私」にとって「震災地」は「外部」であることが描かれている。これに加え、作中の「震災」は「人的禍いの奥まった内部でもある」という一文からは、原発が「私」の「内部」にも影響を与えた「わが事」の問題であることが読み取れる。そのことを踏まえつつも、「私」は「震災地」にとっての「外部の人」で在り続け、「牛蒡」が土の中から、そのままの形で地上に生えるように「風圧」や「風聞」に対して「外部の形そのままに」「押し返さないといけない」と書かれている。ここからは、「私」が「震災地」との一定の距離を保ちながら、「外部」としての客観的な視点から「震災地」を見る役割を担う必要があるという意図が読み取れる。

このように、『背中の地図』の作品「夜の深さを 共に」とその後発表された作品「形そのままに」には、金時鐘の原発に対する向き合い方が表されている。つまりそれは、3・11や原発を自らの「内部」の問題であると認識しつつも、震災地にとっての「外部」として3・11や原発をみる視点を持ちながら批判し続けようという姿勢であり、また、そうすべきであるという金時鐘の意志の表れでもある。

このように、3・11や原発に対する「私」の在り方や立ち位置の意思表示は、金時鐘の中の「外部」と「内部」の在り方を考えさせることになったに違いない。言い換えると、「外部」が存在することによって、「内部」つまり「私」がいる場所や、いるべき場所が必然的に可視化されるのである。それは、金時鐘にとって自分の存在する場所、そして存在すべき場所をどのように考えるのかという問題に繋がっているのである。それは、金時鐘にとって故郷について考えさせるきっかけになったと考えられる。次節では、『背中の地図』においてみられる金時鐘の故郷観についてみていく。

第2節 作品からみる故郷の描かれた方

(1) 『背中の地図』における故郷表象

『背中の地図』には、様々な故郷に関連する詩語が用いられている。ここでは、『背中の地図』において故郷がどのように描かれているのかをみてみよう。以下の<表13>は、『背中の地図』(2018)における「故郷」を表す詩語を表にしたものである。

²⁷⁴ 同上。

<表 13> 『背中の地図』 (2018)における「故郷」を表す詩語

作品名	詩語	使われ方
「朝に」	住処 ^{すみか}	帰りつけない住処 ^{すみか} ではあっても／蔓草 ^{つるくさ} は延び、花は咲く。
「不在」	故郷 古里	見捨ててきて故郷ではなく／居つきようがない古里を／そのところに置いてきたもだ。
「夜汽車を待って」	ふるさと	彼らもまた取り残した何かをかかえて／ふるさとを後に都会へ行くのだ。
	己のふるさと	帰るところへ帰れない／己のふるさとだったのかも知れない。
「またしても年は去り」	祖国	祖国、その祖国のはずの北がまだ正義であったころ
「禍いは青く燃える」	郷土	浚いつくしても奪いえなかった郷土だ。(…中略…) 禍いはその郷土で青い火を噴いている。

この<表 16>の通り、『背中の地図』(2018)においても「故郷」を表す詩語が頻出する。例えば、「祖国」が「北」、すなわち北朝鮮を意味する詩語として使われている。また、「己のふるさと」が登場し、ひらがな表記の「ふるさと」が数回使われている。それ以外にも、新しく「住処^{すみか}」、「故郷」、「古里」、「郷土」という故郷を表す詩語がいくつも登場する。その他、『失くした季節』で登場した「己の在所」はここでは見られないが、「住処」は「在所」と似たような使われ方をしている。このことから金時鐘は、年を重ねるごとに故郷にまつわる詩語を多様化させているということが分かる。

それでは、『背中の地図』において故郷はどのように描かれているのだろうか。『背中の地図』には、故郷喪失のテーマが見られる。これは、『失くした季節』から引き継がれるテーマである。しかし、『背中の地図』は、3・11をテーマとして編まれた詩集であるため、金時鐘の個人的な故郷喪失の体験と3・11の被災者にとっての故郷喪失の体験が重ねて描写されているという点が特徴的である。そのような作品の例として、『背中の地図』の第I章に収められている作品「不在」があげられる。その本文は、以下の通りである。

いくたび年は去ったか。
 囲いの枷^{かせ}も解かれてはゆき
 思いのままに辿^{たど}ってもいい家路ともなった。
 それでも人はいっかな不在で
 光の棘^{とげ}の祟^{たた}りばかりが
 大気にひそんで満ちていた。

奥歯を嚙んで
そっぽを向いた追分だった。
見捨ててきた故郷ではなく
居つきようがない古里を
そののところに置いてきたのだ。

突如「基準値内」が跳ね上がり
1ミリシーベルトの年被曝限度が
二〇倍上げても帰還は可能だと
ついに風も逆さに吹いて吹かれてゆくのか
遠くで望むしかない愛着は浮き雲と流れ
夢がまさぐる夢のように
そこらで生きて
消えた。

(金時鐘「不在²⁷⁵」『背中の地図』)

この作品には、故郷を表す詩語として「家路」が登場する。最初の「家路」は、「囲いの
枷も解かれ」た場と書かれていることから、被災者にとっての「家路」を指すと考えられる。
そしてここでは、3・11後に放射能の「基準値内」になり、「思いのままに辿ってもいい家
路」になったのにもかかわらず、放射能をさす「光の棘」が満ちている場所に人は相変わら
ず「不在」であり、「家路」に辿り着けないことが描かれている。

ここから分かるように、この作品には被災者の故郷喪失の状況が描写されている。その際、
被災者にとって、故郷とはやむを得ず「置いてきた」存在であった。この被災者にとっての
故郷喪失状況は、金時鐘と故郷喪失の体験と同じ状況である。そのことは、金時鐘の個人の
体験だけではなく、多くの在日朝鮮人を初めとするディアスポラの存在の人々にも当ては
まるだろう。そのことに金時鐘は共鳴し、自らの故郷喪失と被災者の人々の故郷喪失を共通
の体験として重ね合わせていると考えられる。

このように、『背中の地図』には、故郷を表象する詩語が多様に用いられ、被災者と金時
鐘の共通する体験である故郷喪失が大きなテーマとして掲げられているのである。

(2) 故郷喪失の再体験

上で述べたように、故郷喪失を体験した金時鐘は、3・11で人々が故郷喪失を余儀なくさ

²⁷⁵ 金時鐘、前掲『背中の地図』11～14頁。

れた光景を目の当たりにした。いわば、故郷喪失を再体験することになる。またそのことは、金時鐘は自らが故郷喪失状態にあることを改めて認識する契機になったと考えられる。そのことがよく表れている作品として、第Ⅱ章に収められている「夜汽車を待つて」があげられる。この作品の本文は、以下の通りである。

そこへはまだ行ったこともないのに
なぜか大事な何かを忘れてきた気がしてならない。
夜ともなれば列車はきまって三陸海岸を逆のぼり
無人駅にも桜は例年どおり舞っていて
そこでもまた私は
朴訥な誰かを見捨ててしまっている。
(…中略…)
絆や励ましや
地縁血縁の懸命な^{よしみ}誼がつまっていた。
癒えない災禍への
せめてもの私の持ち寄りだった。
それがどうしたわけか見あたらないのだ。
やはりへだたりは
己がかこっている距離のようである。
東北は結局のところ列車の背すじあたりで呻いていて
そこは振り向いても見えはしない
昏い^{くら}背中だ。
忘れ果ててしまった何か
打謎^{だめい}の符丁のように貼り付いている。

ヒロノは行き止まりの駅だった。
遠い呼び声のように
潮騒いが風をついて流れていた。
またも乗り継いで私は辿ってフクシマへ行き
いく組かの若者たちは反対ホームで
フクシマを離れる列車を待っていた。
彼らもまた取り残した何かをかかえて
ふるさとを後に都会へ行くのだ。
心に巢食う 飢えのようにだ。
(…中略…)
がらんどうの四つ辻で行き暮れて

膝をかかえていたのもしくは
帰れるところへ帰れない
己れのふるさとだったのかも知れない。
立ち帰るとしよう。
無人駅で
夜汽車を待つて。

(金時鐘「夜汽車を待つて²⁷⁶」『背中の地図』)

この作品には、「大事な何かを忘れてきた気がしてならない」、「忘れ果ててしまった何か」があることが繰り返されている。ここでの忘れてしまったものとは、3・11 自体や被災地がそれに当たるだろう。しかし、作品の後半では「私」の忘れたものが「私」の故郷であることと結びつく場面が登場する。それは、「私」が、「取り残した何か」を抱えながら「フクシマ」を去って都会に行く「若者」を見ながら、「私」が忘れたものが「帰るところへ帰れない／己のふるさとだったかも知れない」と自覚する場面である。そして最後には、「夜汽車」に乗って「立ち帰る」決意をする。つまり、作中で描かれる「私」は、被災地に出向き、残されたものと無くなったものを確認する。その結果、「私」も残されたものの一人であることを思い知らされ、「私」は戻るべき場所に帰ろうとするのである。

この「私」が被災地に出向くことによって、自らの故郷を再確認するという場面は、『背中の地図』の他の作品にも見られる。例えば、「弔い遙か」には、「私」が「車窓」の内側から死者について思いを馳せた後、「とにもかくにも私は出向かねばならない。／それも帰り着くために／私は行って戻らねばならない」と記されている。このように、「私」は被災地に行き、被災地の状況を目撃した後、再び「私」のいるべき場所に帰るという、いわば「私」の被災地への旅路が描かれているのである。

この「私」の被災地への旅は、金時鐘の故郷観と密接に関わっていると考えられる。例えば、前述したように、「私」の被災地での確認作業は、帰国事業や済州4・3の体験の記憶を呼び起こし、再体験させる行為と考えられる。ここからも分かるように、金時鐘は作中の「私」に被災地への旅をさせることによって、彼の記憶や体験が蘇るイメージを表現しようとしたのである。その旅の内容を具体的に記すと、「私」が3・11被災地に行き、現場を目撃しながらもそこで北朝鮮や済州島への記憶の旅に出て、そして再び「私」が住んでいる場所へと戻る。このように金時鐘は、震災地と対峙することによって自らの故郷を回想し、自らのあるべき場所に帰っていく過程を作品に描いたのである。

そうすると、金時鐘にとっての自身のあるべき場所や故郷はどこであるのか。その手がかりとなるのは、2022年に金時鐘が発表した作品「献詩」である。この作品には、「在所」と

²⁷⁶ 同上、60～66頁。

いう詩語を用いながら故郷に対する思いが描かれており、金時鐘と故郷の関係性が表れている。したがって、次節では「献詩」の作品分析を行うことによって、『背中の地図』以降、金時鐘はどこに向かっていこうとしているのかについて考えてみる。

(3) 「私」の向かう先—被災地への旅の後に

① 「献詩」(2022)と金時鐘『猪飼野詩集』(1978)における故郷を繋ぐ川

金時鐘が2022年に発表した「献詩」については、第3章で既に詳しく述べた。「献詩」には、「在所」という詩語が用いられながら、在日朝鮮人集落の猪飼野に住む人々の故郷に対する思いが描かれている。この「在所」の描かれ方を検討することによって、金時鐘の故郷観がいかなるものであるか考えてみる²⁷⁷。以下は、この作品の本文である。

人が住みついた当初から
猪飼野は居ながらにして迷路であった。
あぶくをまたいで橋が延び
対岸を見すえて街が切れていた。
そこではその地の習わしすらも
持ちきたったくにでの慣習に追いやられ
日本語ともつかぬ日本語が声高に幅を利かせて
通りにまで異様な臭気をはびこらせ
得体の知れない食べ物えたいが
おおっぴらにまかなわれてにぎにぎしかった。

風紋もよじれず 蟹も這わず
澱んでも運河は下水を集めて川であり
異郷でくすんでゆく
年古りた家郷の实在であった。
どこでどう河口が出海なのかは誰も知らず
けんめいに集落が水路のへりでひしめいていたのだ。

文化とやらはもともと独自のものだ。
三度のめしも欠かせぬおしんこも
はては祭祀のしきたりまでも
在所でなじんだ風俗がそのまま
遠い日本でのゆるがぬ基準になっていて

²⁷⁷ これに関しては、岡崎享子、前掲「金時鐘の「生理の言語」と「在所」—『猪飼野詩集』(1978)から「献詩」(2022)へ—」を参照。

生きるよすがの意地のように
在日の先代たちはこだわって生きた。
そのかたくなな執着が
物言わぬ生理の言語ともなって受け継がれ
代を継いだ世代たちの
心の奥の語りともなって今に至った。
意固地なまでの在日の伝承があったればこそ
焼肉もキムチも誰もが好む
日本じゅうの豊かな食べ物に成りもした。

周りはみながみな
つけんどんなチョウセンジン。
そのただ中で店を張り
共に耐えて暮らしを分かち
いよいよコリアタウンの日本人とはなった
いとしい「隣の従兄弟」たち。
やはり流れは広がる海に至るものだ。
日本の果てのコリアンの町に
列をなして訪れる日本の若者たちがいる。
小さい流れも合わさっていけば本流さ。
文化を持ち寄る人人の道が
今に大きく拓かれてくる。

二〇二二年四月九日
(老生) 風人 金時鐘

(金時鐘「献詩²⁷⁸」(2022))

上の引用のように、「献詩」において「在所」という詩語は、第3連の「生理の言語」を説明する文脈の中で登場する。そこには、「在所でなじんだ風俗」がそのまま「猪飼野」でも再現され、「在日朝鮮人の人々の間に「生理の言語」として受け継がれることが書かれている。

また、「献詩」には、全体を貫くテーマとして「運河」が存在する。この「運河」は、「在所」と密接な関わりを持つものとして描かれている。第1連には、「どこでどう河口が出会

²⁷⁸ 本文は、石碑に刻まれている内容と、筆者が直接金時鐘から見せてもらった書き下ろし原稿の内容を参考にした。

う海なのかは誰も知らず／けんめいに集落が水路のへりでひしめいていたのだ」という描写があるように、「運河」は実際に存在する「猪飼野」の朝鮮人集落を縦断する平野川がモデルになっていると考えられる。

「猪飼野」に住む在日朝鮮人にとって、平野川は切っても切れないほど生活の一部としていつも側にある存在であった。在日朝鮮人の人々は、海に朝鮮半島に続く平野川を見ながら故郷を思ったに違いない。この在日朝鮮人の人々が抱く平野川と故郷の繋がりについては、既に1978年に発刊した『猪飼野詩集』に描かれていた。これに関して、『金時鐘コレクション』に収録されている2018年に実施されたインタビュー録「在日朝鮮人の源流—『猪飼野詩集』をめぐる」²⁷⁹において、金時鐘は在日朝鮮人の人々が抱く平野川と故郷の関係性について話している。ここで金時鐘は、「猪飼野」にはいつか「猪飼野」から出たいと思いつつもそこで生活を終える在日朝鮮人が多くいたことを述べながら²⁸⁰、「猪飼野」に隣接している平野川に関して以下のように言及している。

猪飼野に住んでる人たちにとっては運河だけど、流れた先は海のはずなんだよね。そのドブ河を正式には平野運河と言うんだ。その流れた先を猪飼野の人たち、おっちゃんら、おばちゃんらは見たことがないの。それでいながら、いつかここを抜け出て、猪飼野を抜け出て、連絡船に乗って国に帰るといふうに、その夢を持っておるんや。そこに幻の船、進水できなかった船がいつも浮かんでいるという、そのことをずっと書きたかった。それが一〇回の連載で終わっちゃった²⁸¹。

このインタビューで金時鐘は、平野川から「海」に出て行き、それぞれの「国」に帰るといふ物語を描きたかったと述べている。しかし、『季刊三千里』への連載が打ち切りになったことにより、果たすことができなかったと回想している。これに続き、もし継続して作品を書くことができたなら、「幻の船」や「進水できなかった船」が実際に猪飼野を抜け出す内容を書きたかったと述べている²⁸²。

このことを踏まえた上で、金時鐘は『猪飼野詩集』の発表から44年後経った2022年に、「献詩」の中で平野川について書いた。そこには、平野川の「水路」の「流れは広がる海に至るものだ」と書かれており、そこには平野川から「海」に出て「国」に帰ることを夢みた過去の人々の思いが込められていると考えられるのである。このように、金時鐘にとって、「川」は在日朝鮮人の集落から故郷へと繋がる道筋として、44年経つてもなお引き継がれる故郷に関する重要なモチーフであることが分かる。それでは、この時間を経て存在する2つの作品において、平野川の描かれた方はどのように変化しているのだろうか。そのこと

²⁷⁹ 金時鐘「〈インタビュー〉在日朝鮮人の源流—『猪飼野詩集』をめぐる」『金時鐘コレクション「猪飼野」を生きるひとびと』第IV巻、藤原書店、2019年、368～399頁。

²⁸⁰ 同上、375頁。

²⁸¹ 同上、378頁。

²⁸² 同上、379頁。

を知るために、まずは『猪飼野詩集』の未刊詩「チノギの船 果てる在日 (5)」における平野川の描かれ方についてみていく。

②『猪飼野詩集』の未刊詩「チノギの船 果てる在日 (5)」と「在所」

前にも述べたように、在日朝鮮人の人々にとって、平野川は故郷に繋がる川として認識されていた。「猪飼野」にある平野川が「国」、故郷に繋がっているという在日朝鮮人の人々の故郷と平野川の関係性があらわれている作品として、『猪飼野詩集』の未刊詩「チノギの船 果てる在日 (5)」(以下、「チノギの船」)²⁸³があげられる。「チノギの船」では、朝鮮半島出身の「男」が徴用された後に、「猪飼野」で30年間「もやし用の大豆を選び分け」ることで生計を立てながら、「船」で「海」に出ることを夢見た先の行く末について描かれている。次の引用は、この作品の終盤部分である。

行きつけなくて／萎える男の／描きあげた／船が消せない。／その夫の／チノギが行ってしまったのだ。／翻然と／路地の騒音に／海鳴をかぶせ／異郷でしなびた／生涯乗っけて出ていったのだ。／船底には／大まさかりの錘まで／転覆防止にしつらえてある／紋様を符したチノギの船だ。／とうの昔に放たれていた／願いのなかの／禱りの船だ。／だれもみな／気が狂れたとは思いやしない。／だれもが猪飼野で／行き止まっているから／狂うほどの／チノギの正気を／だれもが心の底で悲しんだのだ。／いまに運河が満ちるとき／チノギの船がやってくる。／流れを逆さに上がってくる。／

(筆者追記：一段下がる) わたしをつれてよ／わたしをつれてよ／チノギの船よ／わたしをつれてよ／見えない月でも／汐は満ちるよ／風がでたから／帆げたが鳴るよ／チノギの船だよ／わたしをつれてよ²⁸⁴

上の引用からも分かるように、「チノギが行ってしまったのだ」を機に、「猪飼野」で生活していた「男」の結末へと移っていく。それでは、この「チノギ」とは一体何を指すのだろうか。「チノギ」を指すものとして、2通りの解釈が可能である。なぜなら、「チノギ」はカタカナ表記されており、朝鮮語が原型にあることが推測できるため、原文の複数の可能性を推測できるからである²⁸⁵。1つ目の解釈は、登場人物である「男」の名前である。この場合、「チノギの船」とは、「チノギ」が持っている「船」と読むことができる。浅見も、

²⁸³ 金時鐘、同上『金時鐘コレクション「猪飼野」を生きるひとびと』272～280頁。

²⁸⁴ 同上、277～280頁。

²⁸⁵ 金時鐘は、作品の中で度々朝鮮語をカタカタ表記で示している。『猪飼野詩集』においては、朝鮮語のカタカタ表記は、本文以外にもルビで表記されることも多々見受けられる。『猪飼野詩集』におけるカタカナ表記の例をあげると、以下の通りである。括弧の中はルビ表記を指す。固有名詞としては、イカイノ、万景峰(マンボンギョン)、チマチョゴリ、錦繡山(クムスサーン)、鎮海(チネ)周衣(トンマルギ)などがあげられる。その他にも、死(チュグム)、祭需(チェス)、日本暮らし(イルボンサリ)のように、の在日朝鮮人の間で使われている単語の使い回しもカタカタ表記で表している。

「チノギ」を「男」の名前と理解している²⁸⁶。また、浅見も言及するように、「チノギの船」という作品は、実際の金時鐘の知人「申というおっさん」の実話をもとに書かれている²⁸⁷。その実話とは、「申というおっさん」が故郷に帰るための「船」を実際に作ろうと試みたものの失敗し、結局「申というおっさん」は「猪飼野」に留まったという話である。しかし、作品では、「チノギ」が出て行ってしまった後に、「男」が「猪飼野」に留まるという描写は見当たらない。残された「猪飼野」に住む人々が行ってしまった「狂うほどの／チノギの正気」に対して同情したということが描かれているだけである。つまり「チノギの船」において、「男」は「猪飼野」から出て行ったままの状態であると読めるのである。

2つ目の解釈として、「지노귀 (チノギ)」を指しているとも考えることもできる。『韓国民俗大百科事典』によると、「지노귀」とは、ソウル地域で行われる亡くなった者に捧げる巫祭、巫俗儀礼である「굿 (クッ)」である「지노귀굿 (チノギクッ)」を意味する²⁸⁸。また、崔吉城によると「지노귀굿」の「지노귀」は、「지노귀 (指路鬼)」や「진혼 (鎮魂)」と表記され、前者は死霊の行く道を示し、後者は死霊を鎮圧することを意味する²⁸⁹。これらのことを踏まえると、「チノギの船」とは、亡くなった者を弔うための巫俗儀礼に使用する「船」と解釈することができる。

これに関連して、『猪飼野詩集』が書かれた1970年代当時、現在のJR西日本大阪環状線桜ノ宮駅西側の河川敷に、済州島出身の女性がクッを行う「龍王宮」と呼ばれる空間があったことを考慮する必要がある。龍王宮は1963年から1967年にでき、1970年代後半に最盛期を迎えた²⁹⁰。塚崎昌之によると、龍王宮が河川敷にできた理由として、済州島では先祖は海にいと考えられており、殊に海女の間では海に対する信仰は厚いものがあった点、済州島の海辺の堂(タン)に通じるものを感じ取った点、水を通して故郷の済州島につながっている点等を指摘している²⁹¹。ここからも、済州島出身者が多くを占める「猪飼野」の在日朝鮮人にとって、「水」を通して「済州島」に繋がると信じられていたことがみてとれ、金時鐘が「チノギ」に鎮魂という意味合いを含ませていたという可能性をみてとることができる。その場合、「チノギの船」は、猪飼野に住む在日朝鮮人の魂を鎮めるための「船」とも解釈でき、「チノギが行ってしまった」という表現は、「男」の魂を乗せた「船」が行ってしまったと読むことが可能である。

以上のことから、「チノギ」には、「男」の名前と、鎮魂という二つの意味が重ね合わせられていると解釈できることを確認できた。そうすると、「チノギ」の行き着く先はどこで

²⁸⁶ 浅見洋子、前掲『金時鐘の言葉と思想：注釈的読解の試み』335～336頁。

²⁸⁷ 同上、337頁。

²⁸⁸ 「韓国民俗大百科事典」<https://folkency.nfm.go.kr/kr/topic/detail/2858>、最終閲覧日：2022年7月24日。

²⁸⁹ 崔吉城『韓国のシャーマニズム-社会人類学的研究』弘文堂、1984年、344頁。

²⁹⁰ 塚崎昌之「在日一世女性の祈りの場所・龍王宮をめぐる歴史」『こりあんコミュニティ研究会「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト』こりあんコミュニティ研究会、2011年、47頁～50頁。

²⁹¹ 同上、48頁。

あるのかが次第に明らかになる。それは、本来いるべき場所であり、帰るべき故郷であると考えられる。しかし、特に一世や二世の在日朝鮮人の人々にとって、故郷に帰るという願いを叶えることは難しかった。「チノギの船」の最後には、「猪飼野」に暮らす在日朝鮮人の人々の声と思われる「わたしをつれてよ」というフレーズがリフレインされ、人々が「チノギの船」を待ち侘びているところで作品は締め括られている。このように金時鐘は、物理的に故郷に帰れなかった在日朝鮮人の人々の心情を汲み取り、「男」すなわち「申というおっさん」の「魂」だけでも「チノギの船」に乗って「海」に渡り故郷に帰るという物語を構想したと考えられる。この場合の故郷とは、「魂」が帰る場所としての故郷、つまり平野川の先に繋がる朝鮮半島なのである。

③「チノギの船」と「献詩」からみる故郷観 —猪飼野から「在所」へ

前で述べたように、1970年代に発表された「チノギの船」と2022年に発表された「献詩」には、川を通して「猪飼野」から「在所」へと繋がるという共通する故郷観がみられる。この2つの作品からは、「猪飼野」から「在所」へと導いてくれるはずの「海」に対する概念の変化も見受けられる。「チノギの船」において、「海」は「さえぎられたもののなかに」あり、「せり上がったまま／目のすぐ まんまえて／切り絶って」る存在、すなわち故郷と「猪飼野」を隔てる壁として描かれている。

その一方で、「献詩」においては、「水路」の「流れは広がる海に至り」、「水路」が「海」に通ずることを断言している。この部分は、下水のような運河から「海」、そして故郷にたどり着けなかった過去の在日朝鮮人の思いを汲み取っている。つまり、「進水できなかった」「チノギの船」、「幻の船」、「連絡船」が、いずれは「海」に通じて「在所」に進んでいくという希望の意味が込められているのである。

このように、下水の「水路」から故郷に通じる「水路」へ、閉ざされた「海」から開かれた「海」へとイメージの転換が行われたきっかけは、3・11を体験することによって金時鐘にとっての〈水〉に対する概念に大きな変化が起こったからであると考えられる。例えば前に述べたように、『背中の地図』の作品には、金時鐘が帰国事業や済州4・3についての記憶の旅を通じて、海で隔てられた「あちら側」と「こちら側」を乗り越えようとする意図がみられた。それに加え、故郷喪失を体験した津波＝〈水〉の被災者と出会い、金時鐘自らも帰るべき場所に帰還することを決心することによって、海が故郷への「家路」となったのである。

このようなことから、金時鐘は「献詩」において、猪飼野の平野川の水路が海へと繋がり、その先には「在所」へと繋がっていることを描こうとしたことが読み取れる。つまり、平野がわの〈水〉に「水路」という開かれたイメージを与えることによって、在日朝鮮人の人々の魂が、それぞれの「在所」へと帰還することを文学の想像力をもって果たそうとしたのである。

終章

本稿では、2000年以降から現在における金時鐘の言語観と故郷観について考察した。その際、詩集『失くした季節』と『背中の詩集』に焦点を当て、具体的な作品分析を行いながら、彼の言語世界がいかなるものであり、晩年における彼の故郷に対する関係性を明らかにした。本論文で考察した内容を要約すると、以下の通りである。

第Ⅰ部では、金時鐘の言語観と故郷観の関係について考察した。金時鐘は自らのエッセイなどを通じて、「日本語」「朝鮮語」「在日朝鮮人語としての日本語」「生理の言語」という4つの言語について語っている。本論文では、金時鐘が2000年以降に尹東柱の朝鮮語詩集『空と風と星と詩』の翻訳と金素雲の『朝鮮詩集』の再翻訳を行ったことに着目し、これを「朝鮮語」と出会い直す作業であったと解釈した。また金時鐘は「在日朝鮮人語としての日本語」を提唱し、それを「生理の言語」であると表現した。本論文では、金時鐘が作品中で朝鮮語の読みをカタカナで頻繁に表記している点に着目し、「在日朝鮮人語としての日本語」がいかなるものであるのか考察した。さらに、金時鐘は最新の「献詩」(2022)において、在日朝鮮人の生活の中で継承される「生理の言語」について書いている。この作品の分析を通じて「生理の言語」とは父母から伝えられる故郷の言語であり、金時鐘の言語観の根底にあるものであることを論じた。

第Ⅱ部では、金時鐘の第7詩集『失くした季節』について分析を行なった。ここでは、まず2000年以降における金時鐘の済州4・3体験証言やそれに関する対談をとりあげながら、彼と済州4・3の関係について考察した。そこで明らかになったことは、体験証言以前にも、金時鐘の体験証言は金石範『火山島』で書かれていたことであった。さらには、金時鐘自身も『地平線』や『光州詩片』において既に済州4・3体験を断片的に書いていたということも明らかにした。しかし、『失くした季節』では済州4・3が作品の主要テーマとして前面に掲げられている。ここでは、植民地解放の「夏」から済州4・3の「春」へと移り変わる金時鐘独自の季節観の分析を通じて、済州4・3の記憶が作品中にどのように表象されているのか明らかにした。また、『失くした季節』と同時期に取り組んでいた尹東柱の詩の翻訳作品とを比較分析すると、両作品には共通点がみられる。特に「在所」という故郷を表す詩語は、尹東柱の詩の原文「제고장」から訳出されたものであり、尹東柱の故郷観が金時鐘の故郷観に影響を与えた。さらに金時鐘は『失くした季節』を発表した後、済州4・3の犠牲者の遺体が漂着した対馬で、済州4・3慰霊祭に関する取り組みに関わった。本論文では、金時鐘が「慰霊」という形で、日本にいながらも故郷である済州島と繋がる方法を見出したことを指摘した。

第Ⅲ部では、3・11をテーマにして書かれた『背中の地図』(2018)について考察した。金時鐘にとって3・11は非常に大きな衝撃を与えた出来事であり、特に水や海にまつわる記憶を呼び起こした。本論文では、済州4・3当時に見た水葬による死者の様子が、3・11の津波の死者と重なり合うように描かれていることなど、3・11と「水」に関連する金時鐘の

個人的な記憶が交差して描かれている点を指摘した。その他、在日朝鮮人の人々が新潟港から船に乗って朝鮮民主主義人民共和国へと向かう帰国事業の記憶がこの作品に表現されて点について論じた。また、『背中の地図』では原発批判が大きなテーマとして設定されている。そこには、利便性のみを追求した社会への批判が繰り返され、原発事故が忘却されている現状に警鐘を鳴らそうとする意図がみられる。また作品中の登場人物である「私」が被災地に出向き、その現場を目撃することで「私」が「己のふるさと」を再認識し、故郷へ帰る決意をするという構図から、本作品の大きなテーマが「故郷喪失」であることを論じた。

最後の終章では、猪飼野に流れる平野川の水路が海へと繋がっていく様子を描いた「献詩」の分析を通じて、「生理の言語」を語り「在日を生きる」金時鐘が、最終的に帰ろうとしている場所が済州島であること、そこはまた自らが幼少期を過ごし、両親が眠る故郷であることを結論として提示した。

以上のように、本論文では、2000年以降における金時鐘の言語観と故郷観について、『失くした季節』と『背中の地図』の作品分析を通して考察した。そこで明らかになったことは、2000年以降の済州4・3体験証言、そして翻訳作業や創作詩集の制作活動は、金時鐘が故郷を振り返り、故郷に帰っていく集大成であるということである。本稿で明らかになった金時鐘の故郷観をまとめると以下の通りである。

金時鐘は、植民地解放後に「自分の在所探し運動」を行い、朝鮮人としての「在所」を探した。しかし、朝鮮半島が南北分断への道筋を辿る中、金時鐘は、南北分断に反対し、済州4・3にも関わった。そのことから明らかなように、当時の金時鐘の故郷とは、統一された朝鮮であったはずである。しかし、植民地解放後も済州4・3、それに続いて朝鮮戦争が勃発し、現在に至るまで朝鮮半島は分断されたままなのである。それに加え、在日朝鮮人として生きてきた金時鐘にとって、故郷とは常に朝鮮半島と日本の情勢の制約から自由でなかった。つまり金時鐘は北朝鮮にも韓国にも帰ることができない故郷喪失の状況に置かれ、再び「在所」を探し続けることになったのである。

その一方で、金時鐘は2000年以降の朝鮮語詩集を翻訳することによって、故郷と向き合い、「在所」という故郷を表す詩語を再発見した。その後、『失くした季節』において「在所」について自身の言葉で語ることができ、「在所」を具体的に可視化することができた。そして、『背中の地図』では、3・11の経験を経て「在所」に帰る決意をするに至ったのである。つまり、金時鐘は、2000年以降、翻訳作業、『失くした季節』と『背中の地図』の作品に、故郷と対峙しながら、自身のあるべき場所を認識し、そこに帰っていくという過程を描いたのである。その故郷とは、金時鐘の両親が眠る済州島であると考えられる。

これに関連する出来事として、2019年4月1日から4日までの金時鐘の済州島滞在があげられる²⁹²。これに筆者も同行することができた。済州島では4月3日は公休日であり、国家行事として追念式が執り行われる。しかし、金時鐘は「自分は国家行事に参席する資格は

²⁹² この2019年4月1日～9日までの金時鐘と夫人の済州島の訪問に、筆者も同行することができた。

ない」と言い、追念式には行かなかった。金時鐘は、この濟州島での滞在中に、金時鐘にとって重要な人物である2箇所の墓を訪れた。それは、李徳九元総司令官の墓と両親の墓であった。金時鐘は李徳九の墓を初めて訪れ、「来るのが遅すぎました」と嗚咽をしていた。

また、その翌日には金時鐘の両親のお墓を訪れた。墓石が中央にあり、その後ろに2つ朝鮮式のお墓が2つある。その間に岩が1つあるが、金時鐘によると1人息子の代わりにと母が言っていたらしいと話した。金時鐘は、両親の墓に触れ、そして両手を合わせながら長い間目を瞑り、沈黙していた。その光景は、墓の下に眠る両親に心の言葉を寄せているようだった。また、その墓石には両親の名前以外に、金時鐘ご本人と夫人の名前が刻まれていた。このことは、将来金時鐘がそこに骨を埋めるということを意味する。つまり、金時鐘はいま現在、両親が眠る濟州島のこの墓こそが、自分が最後に帰る場所であると考えているのである。

これに関連して、2023年4月29日に金時鐘は濟州4・3 当時に水死体を目撃した時の様子について証言したことがあった。筆者もその場に立ち会うことができた²⁹³。そこで金時鐘は、現在の濟州市にあるタブトンという港の浜で、水葬されて戻ってきた水死体を目撃した時の状況について語った。ある日その浜で音がしたので近づいていくと、死体に向かって神房（シンバン：濟州島の巫堂を指す）が舞いながら祈りを捧げていたという。その神房の姿はスローモーションのように見え、神聖な光景であったと述べた。続けて金時鐘は、その浮かび上がってこなかった水死体のことを思うとやるせない気持ちになると言いながら、死者の霊はその土地でしか鎮まらないことを悟ったと語ってくれた。このように、死者の魂が生前に根付いた土地でしか鎮まらないということは、金時鐘自身にも当てはまるのではないだろうか。つまり、金時鐘の魂は両親が眠る濟州島でないと鎮まらないのである。このように、いつかは両親のいる濟州島に帰りたいと願っているのである。

金時鐘にとって、「在日を生きる」という生き方や、朝鮮と日本の「はざま」に生きるという考え方は、解放後も続く自らに染み付いた植民地主義を剥ぎ取るための格闘の結果生まれたものであった。それはまた、金時鐘が主体的に日本で生きていくための活力であり、生きていくための存在理由であった。それらが、同時代を生きる在日朝鮮人や次世代の在日朝鮮人に大きな影響を及ぼしたのは確かである。その一方で、それを受け取る読み手の人々は、「在日を生きる」という言説や、「ディアスポラ」詩人という型に、「生身」としての金時鐘を当てはめ過ぎてしまっているのではないだろうか。しかし、金時鐘は1人の人間として、幼少期から青年期を濟州島で暮らした濟州島の島民であった。本稿で考察したように、金時鐘は2000年以降の作品の中で、自分が存在すべき場、つまり「在所」へと帰っていくことをしばしば表現するようになった。このことはすなわち、「ディアスポラを生きる詩人」や、「境界を生きる詩人」という、自身による意味付け、または周囲による意味付けから解放されることを、金時鐘本人が願っているからと考えられる。

²⁹³ この証言は、2023年4月29日に鶴橋で行った会食の際に筆者が直接聞いたものである。

このことに関連して、金時鐘は 2023 年 4 月 29 日に、済州で神房の姿を見た時の証言に続いて、自身が今まで大事にしていたクロボトキンの言葉について筆者に語った。その言葉とは、「いいじゃないか。そこには私の至純な歳月があったのだから」というフレーズである。金時鐘は、その言葉を励みに今まで生きてきたという。金時鐘は、誰からも分かってもらえなくても、「いいじゃないか」、自分が決めた道、決めた信念を持って生きていた歳月があったのだからと自分自身にこの言葉を言いながら受け止めていたという。この話からも分かるように、金時鐘は在日朝鮮人として、日本の植民地主義の問題や社会問題、そして朝鮮半島の南北分断や軍事独裁政権の批判などの問題について意義を申し立ててきた。金時鐘は、あちら側／こちら側の＜境界＞を行ったり来たりしながらそれらの問題に向き合ってきた。そのことは、決して簡単なことではなく、孤独の道であったことをこの言葉は物語っている。

人生の最晩年にさしかかった金時鐘は、このような孤独な戦いを終えて、自らが真の故郷と考える済州島に帰ろうとしているのである。このように金時鐘は、「在日を生きる」ことを終えた末に、済州島から離れた 70 年以上もの長旅の後、ようやく両親のもとへ帰っていくのである。そして金時鐘の行き着く先には両親が待っている。もし両親が金時鐘にかける声があるならば「よく帰ってきた」と金時鐘を喜んで迎え入れるはずである。金時鐘にとっての故郷とは、両親そのものなのだ。

金時鐘が両親のもとへ帰る時、＜風＞は金時鐘を済州島へと運ぶことを手伝うだろう。平野川は、大きな川から海へ、そして済州島へと繋がる＜水路＞となり、彼を済州島に連れて帰るだろう。その時初めて、金時鐘が 2000 年の済州体験証言の際、最後の言葉として発した「和合せよ、記憶せよ」が金時鐘の＜内側＞で実現するのである。

参考文献

(金時鐘著—詩集)

- 金時鐘『地平線：金時鐘詩集』ヂンダレ発行所、1955年
——『日本風土記：詩集』國文社、1957年
——『新潟：長篇詩』構造社、1970年
——『猪飼野詩集』東京新聞出版局、1978年
——『光州詩片』福武書店、1983年
——『化石の夏：金時鐘詩集』海風社、1998年
——『失くした季節：金時鐘四時詩集』藤原書店、2010年
——『背中の地図』河出書房新社、2018年
——『日本風土記Ⅱ：金時鐘詩集』藤原書店、2022年

(金時鐘著—翻訳)

- 尹東柱著、金時鐘訳『空と風と星と詩：尹東柱詩集』もず工房、2004年
金時鐘訳『再訳朝鮮詩集』岩波書店、2007年
尹東柱著、金時鐘編訳『空と風と星と詩：尹東柱詩集』岩波書店、2012年

(金時鐘著—随筆集)

- 『さらされるものとさらすものと』解放教育選書8、明治図書出版、1975年
——『クレメンタインの歌』文和書房、1980年
——『「在日」のはざままで』立風書房、1986年
——『草むらの時：小文集』海風社、1997年
——『「在日」のはざままで』平凡社、2001年
——『わが生と詩』岩波書店、2004年
——『朝鮮と日本に生きる—済州島から猪飼野へ』岩波書店、2015年

(金時鐘著—詩選集)

- 金時鐘『原野の詩：集成詩集 1955～1988』立風書房、1991年
——『境界の詩：金時鐘詩集選：猪飼野詩集/光州詩片』藤原書店、2005年
金時鐘著、磯貝治良、黒古一夫編『金時鐘』「在日」文学全集5、勉誠出版、2006年
金時鐘著、丁海玉編『祈り：金時鐘詩選集』港の人、2018年

(金時鐘コレクション)

- 『幻の詩集、復元にむけて：詩集』『日本風土記』『日本風土記Ⅱ』金時鐘コレクション2、藤原書店、2018年

- 『幼少年期の記憶から：「クレメンタインの歌」ほか』金時鐘コレクション 8、藤原書店、2018年
- 『日本における詩作の原点：詩集『地平線』ほか未刊詩篇、エッセー』金時鐘コレクション1、藤原書店、2018年
- 『在日二世にむけて：「さらされるものと、さらすものと」ほか』金時鐘コレクション7、藤原書店、2018年
- 『「猪飼野」を生きるひとびと：『猪飼野詩集』ほか未刊詩篇、エッセー』金時鐘コレクション4、藤原書店、2019年
- 『真の連帯への問いかけ：「朝鮮人の人間としての復元」ほか』金時鐘コレクション10、藤原書店、2020年
- 『海鳴りのなかを：長篇詩集『新潟』ほか未刊詩篇』金時鐘コレクション3、藤原書店、2022年

(その他)

- 野口豊子編集『金時鐘の詩：もう一つの日本語：シンポジウム・言葉のある場所：「化石の夏金時鐘詩集」を読むために』もず工房、2000年
- 「記憶せよ、和合せよ」『図書新聞』2487号、図書新聞、2000年5月27日、1～2頁。
- 金石範、金時鐘著、文京洙編『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか：済州島四・三事件の記憶と文学』平凡社、2001年
- 金時鐘、細見和之、藤井たけし他「日本語の未来、詩の未来」特集 連続講座「国民国家と多文化社会」第14シリーズ コリアン・ディアスポラ-交差する多様な表現『立命館大学言語文化研究』16巻1号立命館大学国際言語文化研究所、2004年
- 「私の作品の場と『流民の記憶』」復刻版『ヂンダレ』16号、不二出版、2008年、2～8頁。
- 「盲と蛇の押問等—意識の定型化と詩を中心に」復刻版『ヂンダレ』18号、不二出版、2008年、2-8頁。
- 金時鐘、倉橋健一、山田兼士「〈ひとり〉の場所——小野十三郎の現在形（特集 小野十三郎再読）」『現代詩手帖 51(10)』思潮社、2008年
- 「窓」『現代史手帖』2011年11月号、思潮社、84～85頁、2011年
- 金時鐘、姜順喜「詩が生成する時」『論潮』第6号、論潮の会、2014年
- 金石範、金時鐘著、文京洙編『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか：済州島四・三事件の記憶と文学』増補、平凡社、2015年
- 金時鐘、佐高信『「在日」を生きる：ある詩人の闘争史』集英社、2018年
- 「震災を書く」『日本近代文学館』第288号、2019年、12頁
- 「語る-人生の贈りもの- 金時鐘 13 “両親の墓で 声あげて泣いた”」『朝日新聞』2019年8月7日朝刊

—— 「特集ワイド：93 歳金時鐘さん 大阪コリアタウンに献詩 異郷の在日、共生の本流願い 文化耕した知恵、先人への敬慕」『毎日新聞』夕刊、2022 年 5 月 13 日夕刊 2 頁。

—— 「2022 年アジア文学フェスティバル 第 4 回授賞式 基調講演＜詩は書かれなくても存在する＞-私の「日本語への報復」が悟らせたもの-」金時鐘直筆の原稿資料、2022 年

(韓国語に翻訳された金時鐘作品集)

고성만역은 『비판적 4·3 연구』 제주: 한그루, 2023

김시중저, 곽형덕역 『일본풍토기』 서울: 소명출판, 2022

김시중저, 이진경, 카게모토 쓰요시역 『잃어버린 계절』 서울: 창비, 2019

김시중저, 이진경, 심아정, 카게모토 쓰요시역 『이카이노시집, 계기음상, 화석의 여름』 서울: 도서출판 b, 2019

김시중저, 곽형덕역 『지평선』 서울: 소명출판, 2018

김시중저, 윤여일역 『재일의 틈새에서』 서울: 돌베개, 2017

김시중저, 윤여일역 『조선과 일본에 살다』 서울: 돌베개, 2016

김시중저, 곽형덕역 『니이가타』 서울: 글누림, 2014

김시중저, 김정례역 『광주시편』 서울: 푸른역사, 2014

김시중저, 유숙자역 『경계의 시』 서울: 소화, 2008

김석범, 김시중저, 이경원, 오정은역 『왜 계속 써왔는가 왜 침묵해 왔는가』 서울: 제주대학교출판부, 2007

(日本語論著)

赤尾光春、早尾貴紀編、上野俊哉ほか著 「ディアスポラの力を結集する：ギルロイ・ボヤーリン兄弟・スピヴァク」松籟社、2012 年

浅見洋子、2012 年度大阪府立大学博士学位論文『金時鐘の言葉と思想：注釈的読解の試み』大阪府立大学、2013 年

安部桂司『日共の武装闘争と在日朝鮮人』論創社、2019 年

伊吹郷訳『尹東柱全詩集 空と風と星と詩』影書房、1984 年

磯貝治良「変容と継承」『社会文学』27 号、日本社会文学会、2007 年

—— 『「在日」文学の変容と継承』新幹社、2015 年

—— 『「在日」文学論』新幹社、2004 年

—— 『始原の光：在日朝鮮人文学論』創樹社、1979 年

林容澤『金素雲『朝鮮詩集』の世界：祖国喪失者の詩心』中央公論新社、2000 年

宇野田尚哉、坪井秀人編著『対抗文化史：冷戦期日本の表現と運動』大阪大学出版会、2021 年

鶴飼 哲「詩の贈与（『金時鐘四時詩集 失くした季節』（藤原書店、二〇一〇）金時鐘さん、高見順賞受賞）」『環：歴史・環境・文明』第 50 巻、藤原書店、36～39 頁、2012 年

- 鵜飼哲「金時鐘の詩と日本語の『未来』」、三浦信孝、糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』藤原書店、2000年
- 「金時鐘の詩と日本語の『未来』」三浦信孝、糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』藤原書店、2000年
- 元秀一『猪飼野物語』草風館、1987年
- 浮葉正親「在日朝鮮人文学の研究動向とディアスポラ概念」『名古屋大学日本語・日本文化論集』20巻、2013年、1～18頁
- E. W. サイド著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1993年
- 岡崎享子「金時鐘『背中の地図』（二〇一八）と三・一一東日本大震災—済州四・三と帰国事業の観点から—」『立命館文学』第679号、2022年9月26日、25～38頁。
- 岡崎享子「金時鐘の「生理の言語」と「在所」—『猪飼野詩集』（1978）から「献詩」（2022）へ—」『立命館大学言語文化研究』第34巻第2号、2022年12月25日、51～66頁。
- 呉世宗『リズムと抒情の詩学：金時鐘『長篇詩集新鴻』の詩的言語を中心に』藤原書店、2010年
- 小沢弘明、三宅芳夫編「移動と革命：ディアスポラたちの「世界史」」論創社、2012年
- 小野十三郎『詩論』真善美社、1947年
- 『詩論+続詩論+想像力』新潮社、2008年
- 大村益夫『風と石と菜の花と：済州島詩人選』新幹社、2009年
- 「朝鮮文学の翻訳—尹東柱『序詞』の翻訳を中心に」徐勝、小倉紀蔵編『言葉のなかの日韓関係：教育・翻訳通訳・生活』明石書店、2013年
- 川村湊『生まれたらそこがふるさと：在日朝鮮人文学論』平凡社、1999年
- 『韓国朝鮮在日を読む』インパクト出版会、2003年
- 『震災・原発文学論』インパクト出版会、2013年
- 木村朗子『その後の震災後文学論』青土社、2018年
- 木村朗子、アンヌ・バヤール=坂井編著『世界文学としての“震災後文学”』明石書店、2021年
- 『季刊三千里』創刊号、三千里社、1975年
- 『季刊在日文芸民濤』第3号、在日文芸民濤社、1998年
- 金奉鉉『済州島歴史誌』金中林、1960年
- 金奉鉉、金民柱編『済州島人民들의《4.3》武装闘争史：資料集』交友社、1963年
- 金素雲『乳色の雲』河出書房、1940年
- 『朝鮮詩集』岩波書店、1954年
- 金石範『火山島』第Ⅲ巻、文藝春秋、1983年
- 金石範「私は見た、四・三虐殺の遺骸たちを」済州島四・三事件を考える会・東京編『記憶と真実：済州島四・三事件：資料集：済州島四・三事件60年を越えて』新幹社、2010年、44～62頁。
- 金石範著、姜信子編『金石範評論集Ⅰ文学・言語論』明石書店、2019年

金堯我『在日朝鮮人女性文学論』作品社、2004年
 黒川創編『朝鮮』新宿書房、1996年
 権保慶「小野十三郎『詩論』と金時鐘」『超域文化科学紀要』20号東京大学大学院総合文化
 研究科超域文化科学専攻、2015年
 ——「金時鐘における民衆と諷刺：一九七〇年代の金芝河との関連をめぐって」『朝鮮
 学報』第240輯、2016年、41～70頁
 権寧珉編著、田尻浩幸訳『韓国近現代文学事典』明石書店、2012年
 小林敏明『故郷喪失の時代』文藝春秋、2020年
 『小学館韓日辞典』小学館、2018年
 G. C. スピヴァク著、上村忠男訳『サルタンは語るができるか』みすず書房、2012年
 宗秋月『宗秋月全集』土曜美術社出版販売、2016年
 宋恵媛、宮本正明編『続在日朝鮮人文学資料集：一九四六～六〇』緑蔭書房、2020年
 ——『「在日朝鮮人文学史」のために：声なき声のポリフォニー』岩波書店、2014年
 ——『続在日朝鮮人文学資料集』緑蔭書房、2020年
 宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集：一九四五～八四』緑蔭書房、2014年
 宋恵媛編『在日朝鮮人文学資料集：一九五四～七〇』緑蔭書房、2016年
 宋友恵著、愛沢革訳『尹東柱評伝：空と風と星の詩人』藤原書店、2009年
 『済州4・3事件真相調査報告書』済州4・3真相究明及び名誉回復委員会、2003年
 済州四・三平和財団編『済州四・三事件の理解』済州四・三平和財団、2014年。文京洙『済
 州島四・三事件』岩波書店、2018年
 高橋邦輔『尹東柱・詩人のまなざし』耕文社、2022年
 趙秀一『金石範の文学：死者と生者の声を紡ぐ』岩波書店、2022年
 崔吉城『韓国のシャーマニズム-社会人類学的研究』弘文堂、1984年
 池明観『韓国近現代史-1905年から現代まで』明石書店
 塚崎昌之「在日一世女性の祈りの場所・龍王宮をめぐる歴史」『こりあんコミュニティ研究
 会「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト』こりあんコミュニティ研究会、2011年、47
 頁～50頁
 坪井秀人編『戦後日本の傷跡 The scars of post-war Japan』臨川書店、2022年
 中川成美、西成彦編『旅する日本語』松籟社、2022年
 中村福治『金石範と「火山島」：済州島4・3事件と在日朝鮮人文学』同時代、2001年
 西成彦『バイリンガルな夢と憂鬱』人文書院、2014年
 野崎六助『魂と罪責：ひとつの在日朝鮮人文学論』インパクト出版会、2008年
 朴和美「「自分時間」を生きる、ということ」『抗路：在日総合誌』第8号、抗路社、2021
 年
 林浩二『在日朝鮮人日本語文学論』新幹社、1991年
 ——『在日朝鮮人文学：反定立の文学を越えて』新幹社、2019年

—— 『戦後非日文学論』 新幹社、1997年

玄善允 『金時鐘は「在日」をどう語ったか』 同時代社、2021年

玄武岩 「コリアン・ネットワークと「在日」」 『環』 第11巻、藤原書店、2002年

廣瀬陽一 『金達寿とその時代：文学・古代史・国家』 クレイン、2016年

廣瀬陽一 『金達寿伝：日本のなかの朝鮮』 クレイン、2019年

ポール・ギルロイ著、上野俊哉、毛利嘉孝、鈴木慎一郎訳 「ブラック・アトランティック：近代性と二重意識」 月曜社、2006年

細見和之 『アイデンティティ／他者性』 岩波書店、1999年

—— 『ディアスポラを生きる金時鐘』 岩波書店、2011年、221～222頁。

松原新一、倉橋健一 『70年代の金時鐘論：日本語を生きる金時鐘とわれらの日々』 砂子屋書房、2010年

水野直樹、文京洙著 『在日朝鮮人：歴史と現在』 岩波書店、2015年

文京洙 『済州島4・3事件』 岩波書店、2018年

—— 『済州島四・三事件：「島^{タムナ}のくに」の死と再生の物語』 岩波書店、2018年

山田兼士編、細見和之編 『小野十三郎を読む』 思潮社、2008年

梁石日 「金時鐘論」 『アジア的身体』 青峰社、星雲社（発売）、1990年

柳美里 『JR 上野駅公園口』 河出書房新社、2017年

(韓国語論著)

권영민 『한국현대문학사 1』 서울:민음사, 2014.

윤동주 『하늘과 바람과 별과 시 -원본 대조 윤동주 전집-』 서울: 연세대학교출판부, 2005.

윤동주 『하늘과 바람과 별과 시』 서울: 소와다리, 2016.

—— 『하늘과 바람과 별과 시』 서울: 소와다리, 2016.

이건제 『한국근현대문학의 모더니티』 서울: 선인, 2015.

이진경 『김시중, 어긋남의 존재론』 서울: 도서출판 b, 2019.

허영선 『당신은 설위할 봄이라도 있었겠지만』 서울: 마음의숲, 2019.

(英語論著)

David S. Roh 『Minor Transpacific: Triangulating American, Japanese, and Korean Fictions』 Redwood City: Stanford Univ Pr, 2022.

Jeju 43 Peace Foundation 『The Jeju 43 Mass Killing』 Seoul: Yonsei University Press, 2018.